

熱 田 区 白 鳥 一 丁 目

白鳥古墳第Ⅱ次発掘調査報告書

1989

名古屋市教育委員会

例 言

1. 本書は、名古屋市熱田区白鳥一丁目2番17号に所在する白鳥古墳の法持寺本堂改築に伴う第Ⅱ次発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、愛知県教育委員会文化財課の指導のもとに、国庫補助金の交付を受けて名古屋市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、昭和61年2月17日～3月28日までの延べ27日間にわたって実施した。
4. 本調査にあたっては、白鳥山法持寺、熊谷組名古屋支店の関係各位より御理解・御協力を得た。
5. 本調査に関する調整事務は、名古屋市教育委員会文化課文化財係が担当した。
6. 本調査を担当したのは、名古屋市見晴台考古資料館学芸員、山田鉦一、木村有作、伊藤厚史、竹内宇哲、野澤則幸である。
7. 埴輪の胎土分析は三辻利一氏（奈良教育大学）にお願いした上、玉稿を賜わった。
8. 本調査の排土工事部分については、造園工事業者である大崎園芸有限会社が工事請負によって実施した。発掘区及び墳丘の基本平面図作成業務は、国際航業株式会社に委託して実施した。
9. 本書で用いた方位Nは、図4が磁北を示す他は真北を示す。海拔高は名古屋港工事事務基本水面（N. P.）を用いた。 $N. P. = T. P. + 1.4119m$
10. 本遺跡出土の遺物、記録類等は、名古屋市見晴台考古資料館で保管している。
11. 本書の編集は担当者全員の協議の上で行ない、執筆分担は文末にて記した。
12. 発掘調査参加者
（学生）山岸賢一、左右木未起、金子健一、安部かえで、松井秀、脇田志野
13. 整理参加者
（学生）太田偉喜、藤井義孝、山田敬三、造田耕司、青木修、鷲野尚行、久田由佳子
（一般）市川かおり、内山龍次、大江達子、近藤和子、桜井裕子、壇野和、中上孝子、中根千春、古川俊江、松島美恵子
14. 本書作成までに下記の方々から御指導・御協力を賜わった。芳名を記して感謝の意を表したい。（敬称略、50音順）
赤塚次郎、安達厚三、池本正明、伊藤禎樹、犬塚康博、井上光夫、岩崎卓也、内田智久、江崎武、大船孝弘、梶山勝、加納俊介、川江秀孝、蒲原宏行、狐塚省蔵、久野正博、栗田真澄、小出義治、斎藤孝正、笹沢浩、柴垣勇夫、鈴木敏則、関川尚功、関根孝夫、高木宏和、滝沢亮、辰巳和宏、中井正幸、七原恵史、榑崎彰一、贄元洋、橋本博文、土生田純之、林原利明、松村冬樹、森岡秀人、矢島宏雄、山根洋子、渡辺誠

本文目次

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査の経過	4
1. 調査に至る経過	4
2. 調査の経過	5
III 遺構	8
1. 墳丘及びその周辺	8
2. 調査区の概要	11
3. 検出した遺構	12
IV 遺物	24
1. 古墳時代・埴輪	24
2. 古墳時代・その他	39
3. 古代・中世	39
V 参考資料	48
1. 古記録にみる石室内出土遺物について	48
2. 館収蔵の埴輪	50
VI まとめ	62
付載 名古屋市周辺の窯跡出土須恵器・埴輪、古墳出土埴輪の蛍光X線分析	65
1) はじめに	66
2) 分析試料	66
3) 分析方法	82
4) 分析結果	82

挿 図 目 次

図 1	白鳥古墳と周辺遺跡図	2
図 2	白鳥古墳と名古屋台地	3
図 3	発掘区とその周辺	5
図 4	墳丘実測図（昭和20年代）	9
図 5	墳丘実測図（昭和61年）	10
図 6	グリッド配置図	11
図 7	遺構平面図	13
図 8	土層断面図	14
図 9	中世遺構分布図	16
図10	SK 3 実測図	17
図11	SK 14（上）、SK 6（下）実測図	18
図12	SD 1・2 遺物出土状態設定図	19
図13	SD 1 内遺物出土状態図	20
図14	SD 2 内遺物出土状態図	22
図15	埴輪実測図（1）	31
図16	埴輪実測図（2）	32
図17	埴輪実測図（3）	33
図18	埴輪実測図（4）	34
図19	埴輪実測図（5）	35
図20	埴輪実測図（6）	36
図21	埴輪実測図（7）	37
図22	土製品実測図	39
図23	遺物実測図（1）	46
図24	遺物実測図（2）	47
図25	法持寺所蔵石室写図	48
図26	岡田敬写図	49
図27	法持寺所蔵写図	49
図28	断夫山古墳埴輪出土位置図	51
図29	遺物実測図（1）	58
図30	遺物実測図（2）	59

図31	遺物実測図 (3)	60
図32	遺物実測図 (4)	61
図33	遺物実測図 (窯跡)	78
図34	遺物実測図 (古墳1)	79
図35	遺物実測図 (古墳2)	80
図36	遺物実測図 (古墳3)	81
図37	下原2・4号窯出土埴輪のRb-Sr分布図	86
図38	城山2号窯出土須恵器・埴輪のRb-Sr分布図	86
図39	東山10・11・54号窯出土須恵器・埴輪のRb-Sr分布図	86
図40	窯跡出土須恵器・埴輪のFe量	86
図41	古墳出土埴輪のRb-Sr分布図	86
図42	古墳出土埴輪のFe量	87
図43	古墳出土埴輪のK量	88

表 目 次

表1	埴輪観察表 (1)	27
表2	埴輪観察表 (2)	28
表3	埴輪観察表 (3)	29
表4	埴輪観察表 (4)	30
表5	遺物観察表 (1)	41
表6	遺物観察表 (2)	42
表7	遺物観察表 (3)	43
表8	遺物観察表 (4)	44
表9	遺物観察表 (5)	45
表10	写図・遺物一覧表 (1)	48
表11	写図・遺物一覧表 (2)	50
表12	遺物観察表 (1)	55
表13	遺物観察表 (2)	56
表14	遺物観察表 (3)	57
表15	分析試料 (窯跡1)	70
表16	分析試料 (窯跡2)	71
表17	分析試料 (古墳1)	72

表18	分析試料（古墳 2）	73
表19	分析試料（古墳 3）	74
表20	分析試料（古墳 4）	75
表21	分析試料（古墳 5）	76
表22	分析試料（古墳 6）	77
表23	窯跡出土試料の分析値	83
表24	古墳出土埴輪の分析値（1）	84
表25	古墳出土埴輪の分析値（2）	85
表26	K・Fe 因子による古墳の分類	89

図 版 目 次

図版 1	航空写真 1946年 6 月米軍撮影（国土地理院所蔵） 1986年 3 月白鳥古墳南側上空より撮影
図版 2	発掘区の状況（1） 発掘調査前の状況 周濠検出状況
図版 3	発掘区の状況（2） 4BGr. SD1 およびSD3 4BGr. SK3 山茶碗出土状況
図版 4	発掘区の状況（3） 4BGr. SD1 遺物出土状況 4BGr. SD1 掘削後
図版 5	発掘区の状況（4） 4CGr. SK4 山茶碗・小皿および鉄刀出土状況 4BGr. SK3 山茶碗出土状況
図版 6	発掘区の状況（5） 周濠掘削中 SD2 検出状況 4D～4EGr. SD2 検出状況
図版 7	発掘区の状況（6） 4D～4EGr. SD2 遺物出土状況 4DGr. SD2 遺物出土状況
図版 8	発掘区の状況（7） 周濠掘削後 SD1・2 検出状況 周濠掘削後
図版 9	発掘区の状況（8） 周濠掘削後 SD3 掘削後
図版 10	発掘区の状況（9） 中央セクションベルト西面、周濠北端層序 調査区西端東面セクション、周濠北端及び SD1 層序
図版 11	遺物写真（古墳 1）

- 图版12 遺物写真 (古墳 2)
- 图版13 遺物写真 (古墳 3)
- 图版14 遺物写真 (古墳 4)
- 图版15 遺物写真 (古墳 5)
- 图版16 遺物写真 (中世 1)
- 图版17 遺物写真 (中世 2)
- 图版18 遺物写真 (中世 3)
- 图版19 遺物写真 (中世 4)

I 遺跡の位置と環境

白鳥古墳は、名古屋市熱田区白鳥一丁目2番17号に所在する。古墳の所在する熱田区は名古屋市の中心域のやや南寄りにあり、熱田神宮の鎮座することで知られている。現在のように名古屋臨海部の埋立が進む以前は海が入りこんでおり、江戸時代は東海道宮宿（宮の渡し）として栄えたところである。

白鳥古墳は西に沖積平野を臨む洪積世台地上の縁辺近くに立地する。この洪積世台地は名古屋台地と呼称され、台地の北・西・南側は沖積平野や埋立地が広がり、東部にはやや標高のある丘陵がはり出している。名古屋台地は、中小の河川等の開析をうけていて、北西側から那古野台地、熱田台地、御器所台地、瑞穂台地、笠寺台地というように区分されている。いずれも、洪積世後期に形成された熱田層が基盤となる。熱田層は砂層とシルト層の互層からなり、上部はふつう風化により粘土化が進行し、明るい黄橙色を呈する。

白鳥古墳は、熱田台地の中央付近の西縁、標高約10m付近に、前方部を南に向けて構築されている。西側の沖積面との比高は7~10mを測る。現在は名古屋城築城の際に掘削された堀川が台地の下を南流している。台地縁辺には小河川などによる小規模な開析が考えられるが、市街化のすすんだ現在ではうかがいしることはできない。

名古屋台地は象の頭に似た形状をしており、その鼻にあたる部分が熱田台地である。南北約4km、東西0.7~1km程度の細長い台地であるが、その上には多くの遺跡が残されている。縄文時代の遺跡として、新宮坂貝塚でハイガイなどの貝殻の他に、早期の粕畑式土器が採取されているが、類例は少ない。弥生時代になると、台地の北寄りを中心に高蔵・玉の井・森後町・熱田神宮内・熱田神宮南門前貝塚の遺跡がみられる。なかでも、高蔵遺跡は明治時代から「高蔵貝塚」として知られ、東西約500m・南北約800mにおよぶ一大集落である。ここは名古屋台地上では数少ない弥生時代前期の遠賀川式土器が出土し、また「高蔵式」土器の標識遺跡でもある。

古墳時代の遺跡としては、白鳥古墳の他、断夫山古墳・高蔵古墳群・瓶屋橋古墳・花の木古墳などの古墳があり、高蔵遺跡・神宮南門前貝塚などからは古墳時代の須恵器・土師器が出土する。断夫山古墳は、白鳥古墳から北へ約300mのところであり、市内では原形を良好に留めている前方後円墳である。全長151m、後円部径80m、前方部幅116m、高さが後円部13m、前方部16.3m、くびれ部10.5m、造出部4.8mを測り、東海地方最大の規模を誇る。年代については発掘調査が行われていないことなどから手がかりは少なく、5世紀後半から6世紀前半の幅をもって考えられる。白鳥古墳との関係も新旧の問題を含めて論究されているが、大幅な食い違いがみられる現状にある。古来、白鳥古墳を日本武

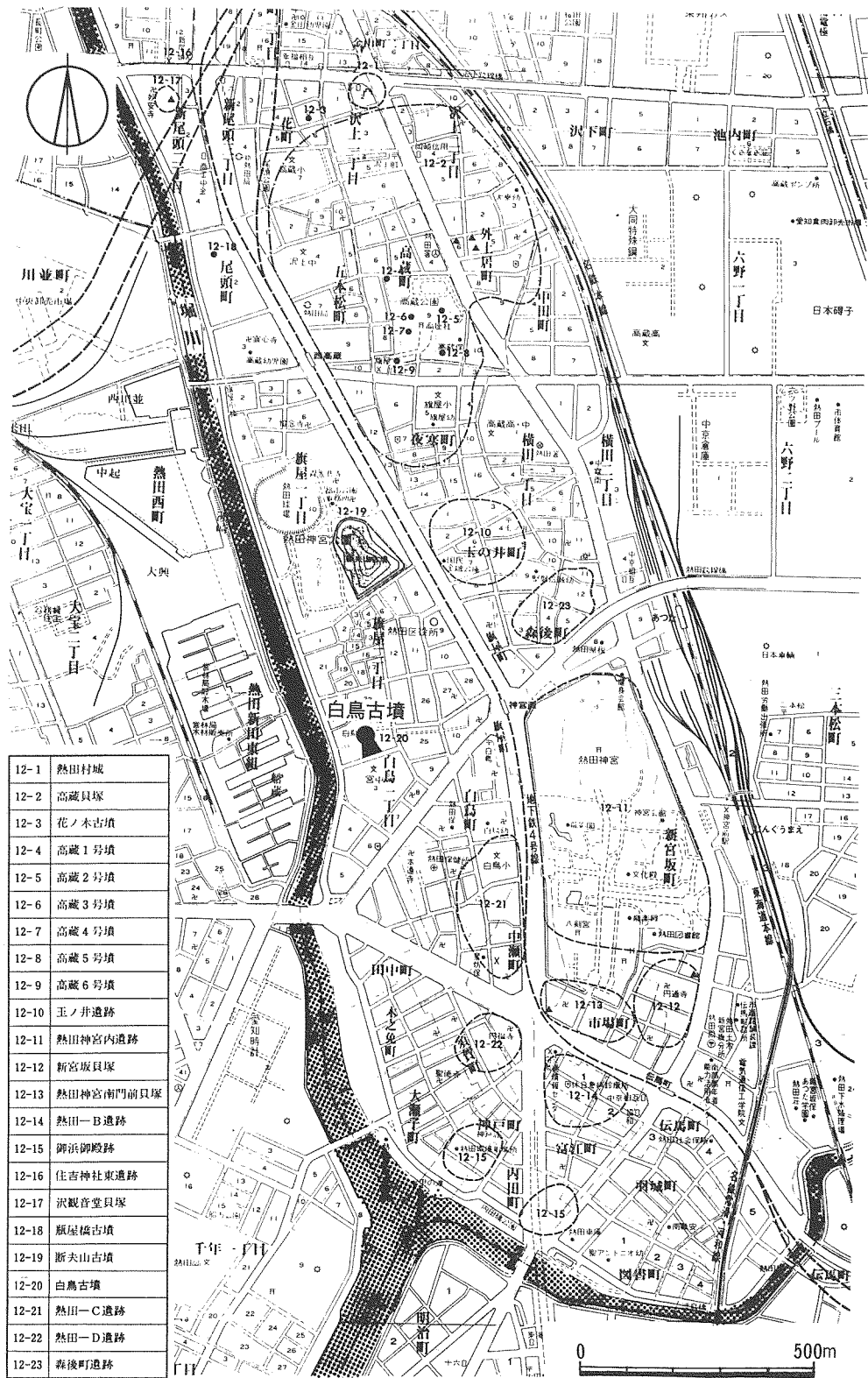


図1 白鳥古墳と周辺遺跡図

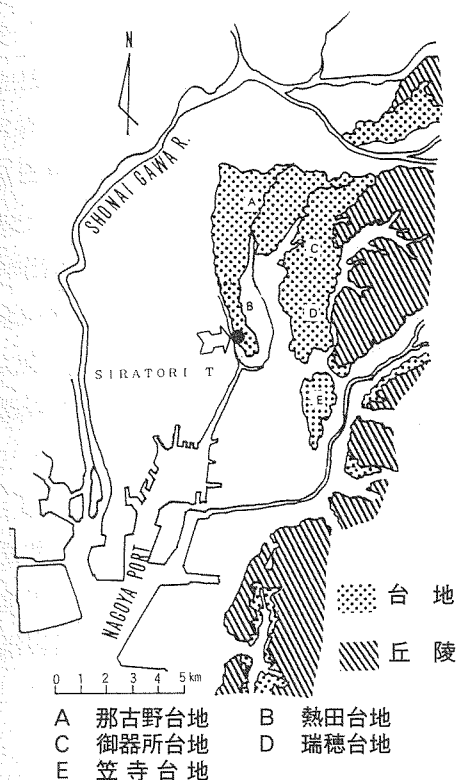


図2 白鳥古墳と名古屋台地

尊陵、断夫山古墳をその妃の宮簀媛陵とする伝承が残されており、白鳥古墳も第2次大戦前までは一部熱田神宮の管理下にあった。現在のところ双方の古墳とも、古代尾張南部に勢力を伸ばし尾張国造に任ぜられたとされる尾張氏に関わる古墳と推定される向きが強いようである。

断夫山古墳の北 200m の付近には、高蔵古墳群がある。かつては15基以上の円墳で構成されていたと思われるが、現在では4基を残して大半が戦後の市街化の波にのまれてしまっている。唯一調査された高蔵一号墳は、複室構造の胴張り石室（全長10.2m）を有する径約10m、高さ2mの円墳で、6世紀後半に比定されている。

古墳時代の集落遺跡としては、熱田台地では高蔵遺跡があげられるが実体はまだ明らかでない。最近、名古屋市では、熱田台地の北に接する那古野台地の西縁部を調査する機会が多く、その中には古墳時代の集落遺跡が多く含まれている。北から中区堅三蔵通・正木町・伊勢山中学校・尾張元興寺跡の各遺跡である。とくに後三者については、大集落となる可能性が高い。いまのところ、こうした遺跡群の関係をうかがうことは困難であり、白鳥古墳等との関連も含めて今後の課題としてあげられよう。

熱田台地上の遺跡からは、山茶碗など中世に関連する遺物がみついている例が多い。また、近世における宮宿などに関連する遺構が残存する可能性も残されるが、市街化がすすみ調査例も少ない現在の段階では、実体がよくわからない状況にある。（木村）

参考文献

- 三渡俊一郎 1983 「名古屋市熱田区白鳥・断夫山古墳の前後関係について」 『古代学研究』99
 檜崎 彰一 1985 「名古屋市熱田区高蔵第一号墳の調査」 『名古屋大学文学部研究論集』XI

Ⅱ 調査の経過

1. 調査に至る経過

熱田区白鳥一丁目に所在する白鳥古墳では、すでに第Ⅰ次調査(庫裡)が昭和60年2月から3月にかけて行なわれている。調査区の設定が墳裾から約10mと離れ、面積も約165㎡と狭く、攪乱も随処に及んでいた為に、比較的多数の円筒埴輪を主とした遺物を検出できたにも関わらず、外部施設(周濠及び外堤)の在り方を明確にするという当初の目的を果たし得なかった。今次の調査も第Ⅰ次と同じく法持寺建替工事(本堂)に伴うもので、後円部北東側の墳裾から周濠・外堤にかかる部分である。これより以下、昭和58年から始まる本堂建替工事に伴う埋蔵文化財に関わる取扱い経過内容について略述する。

昭和58年

熊谷組名古屋支店・設計担当者が文化課を訪れ、法持寺本堂建替に関する法的手続きの問い合わせを受ける。この段階では東面する南北に長い設計プランであったので、後円部墳裾の大部分を削平されることが憂慮された為、県教委文化財課の指導を得て、熊谷組担当者及び法持寺に対して計画の見直しを要請した。

昭和59年

法持寺所有地と市有地の換地を含めて計画の再検討を協議するが、市側でも都市計画街路の変更を必要条件とする為、現実的には無理が多く、双方共に納得の行く最善の方向性を見い出しえなかった。

昭和59年5月

法持寺より設計変更する旨の提案があり、内容的には寺地北端で南面するプランであった為、直接墳丘を損壊する危険を回避することができそうなので、これを了解して発掘調査を実施する方向で話が進められた。

昭和60年1月24日

文化財保護法第57条の2に拠る、本堂部分の発掘の届出。

昭和60年2月22日～3月20日

第Ⅰ次調査(庫裡)を行なう。この間、本堂部分の設計にかかる若干の問題箇所について協議する。

昭和60年10月

本堂部分の最終設計を確認し、年度内に発掘調査を実施する運びとなる。

昭和61年2月17日～3月28日

第Ⅱ次調査(本堂)を実施する。

(野澤)

2. 調査の経過

今回の調査は、法持寺の本堂改築に伴う事前調査のため、工事施工範囲を発掘区とした。位置は、後円部の北東にあたり、北は公道に約0.5m程の段差をもって接し、東は庫裡、西は白鳥公園と接している。発掘予定区は、既に旧本堂は取り壊されており平地になっていた。

発掘調査は、2月17日より開始した。発掘区の設定は、まず北側の道路境界より約1.5m離れた東西方向を基準線と決め、庫裡より約0.7m離れた所に基準杭を打った。この基準点をA点とし、この点が発掘区の北東端となり、且つ後円部の中心と結んだラインが濠と直交するようにし、このラインを濠の埋土の堆積状況を観察するための中央セクションベルトとして残すことにした。また、このラインの墳丘側で発掘区の南西端となる点をB点とした。2月18日から0.35㎡バックホウを使用し、発掘区西北端より表土除去に入った。北端は、攪乱されており東へ続いていた。この攪乱は溝状をなしており、昭和60年に調査した地点で検出した溝の続きと思われた。この溝の南側は、古墳の外堤部分と推定されるが、寺が移転して来た際に削平を受けたようで、表土直下より明橙色粘質土の地山が現れた。ほとんど地表面が地山という状態であった。その南側は南へゆるやかに下がる落ち込

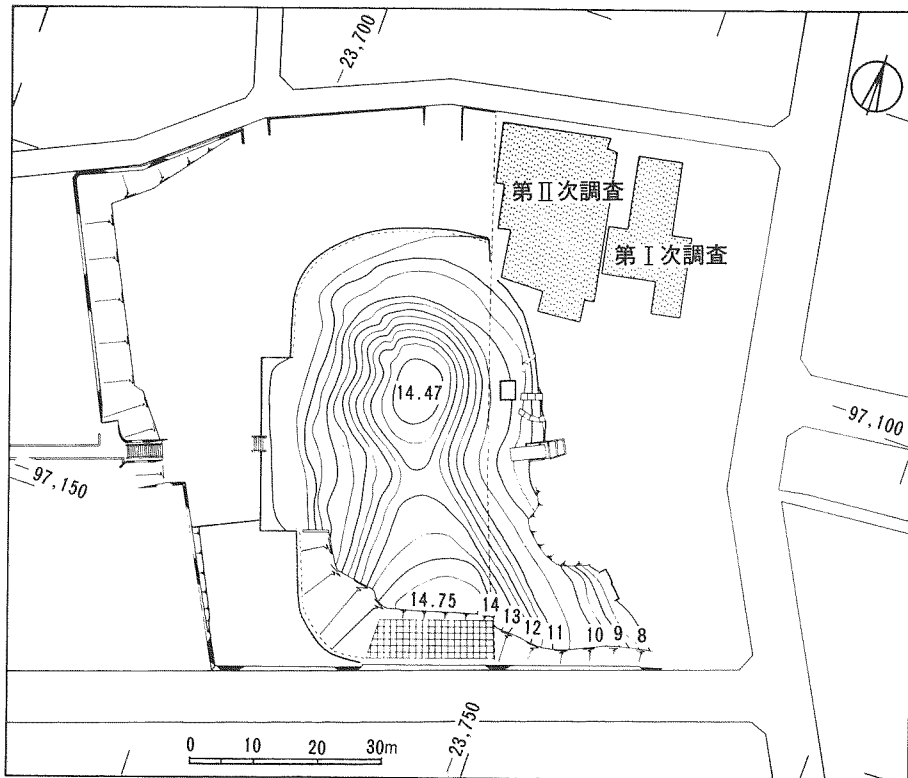


図3 発掘区とその周辺

みが認められ、濠の肩と思われた。埋土の上位には橙色の粘土が厚く堆積しており、その下より黒色土が検出された。このことから寺の移転する前までは、濠はまだ完全に埋まりきっておらず浅い窪みをなしていたようである。橙色土の存在は寺が移転した時に外堤部分の地山を削り濠を埋めたものと思われた。また瓦礫を埋めた攪乱坑やごみ穴が多くあった。バックホウによる作業は旧表土と攪乱坑を除去する所まで行い終了した。

2月20日より手作業による遺構検出、掘削に入った。まずは北端で検出した攪乱溝より始めた。溝の埋土は炭化物混じりの灰黄色土で、現代の瓦や陶磁器が多く混じっていたが、埴輪の小片もコンテナ箱に半分ほど出土した。かつては外堤上にも埴輪が立てられていたのかと想像された。この溝は、深さ4m以上あることが昨年度の調査で確認されているため、底まで掘ることはやめ約2m程の所で止めた。21日からバックホウで掘り残した攪乱土や旧表土を取り除きながら濠の肩の検出を始めた。また、これと平行して発掘区内を5m四方のグリッド(Gr.)に分けるための基準杭を打つ作業を行った。24日にグリッドを設定した。各グリッドの呼称は、北から1、2、3……、西からA、B、C……、としてグリッド南東の杭番号で表すこととした。25日にほぼ濠の肩を検出したので清掃し濠の検出状況の写真撮影を行った。

26日からいよいよ濠の掘削に入った。中央セクションに沿って北からサブトレンチを入れたところ、濠の残りは良いようで約0.5m程の深さがあることが明らかとなった。この時サブトレンチ内から二筋壺の破片が出土した。また、先に北東端で検出した溝SD3を完掘し、写真撮影を行った。濠の掘削を続けるうちに、埴輪の出土の仕方が地点により疎密があることが判ってきた。特に濠の肩に沿って多く出土し、その付近の埋土は暗灰褐色を呈していた。対して濠の中央部は出土が少なく、明橙色の埋土であった。このことから外堤からの流れ込みによる堆積と想定された。また中世の遺物もいくつか混じって見られた。この中には先日出土したものと同一個体の二筋壺の破片も含まれており、後日完形に復元することができた。3月に入り調査を続けるうち、4B、4CGr.で検出した土坑を掘削した結果、SK3より山茶碗2点、SK4より山茶碗小皿3点、土師小皿1点、鉄製刀子1本が出土した。濠の肩に出土した埴輪片は浅い溝(SD1)中に入っており、SK3は、この鈎状に曲がった溝の内側の中心に位置している状況であった。4D、5DGr.の埴輪の出土状況も鈎状であったが、明瞭な溝は検出されず、また4BGr.のように内側には土坑は検出されなかった。寺側の都合により21日までに南側を埋めるため、18日に1回目の空撮を行った。21日にSD1を完掘し、断面図を作成した。この結果、橙色の濠埋土の上に地山の黄白色砂を貼ったところに溝を穿った状況であった。SK4は、この貼った地山を切って穿っていた。また、4DGr.の濠の肩にも黄白色砂を貼っていた事が判明した。

3月27日に濠の肩の部分について第2回目の空撮を行い現地での調査を終了した。

(伊藤)

調査日誌抄

- 2月17日 器材搬入。発掘区設定。
- 2月18日 表土除去作業。
- 2月19日 表土除去作業。発掘区南側で濠を検出。
- 2月20日 ベルトコンベアの設置。調査区北側の溝の掘削。
- 2月21日 北側の溝の掘削。濠内の表土、旧表土の掘削。平行して基準杭打ち。
- 2月24日 グリッド(Gr.)の設定。旧表土、攪乱坑の掘削。
- 2月25日 濠の検出状況の写真撮影。1C、2CGr. で中世陶器片出土。
- 2月26日 濠の掘削開始。濠の中より二筋壺出土。2CGr. 溝SD3完掘。
- 2月27日 濠の掘削。埴輪片が濠の外肩に沿って多く出土。中世陶器が混じる。
- 2月28日 濠の掘削。5DGr. 土坑検出開始。降雪のため作業中止。
- 3月3日 濠の掘削。4A～4EGr. の濠の肩に沿い埴輪片続々出土。
- 3月4日 濠の掘削。4BGr. 土坑SK1～3、4CGr. SK4掘削。
- 3月5日 濠の掘削。4CGr. SK4、6清掃、写真。外堤部分の掘削、清掃。
- 3月6日 濠の掘削。中央セクションベルトの除去。北端溝清掃。
- 3月7日 濠の掘削。中央セクションベルトの除去。埴輪片等遺物出土状況写真撮影。4CGr. 土坑SK4、6の平面図断面図作成。外堤部分の清掃、掘削。
- 3月10日 雨天のため現場作業中止。
- 3月11日 濠の掘削。午後雨天のため現場作業中止。写真測量打合せ。
- 3月12日 濠内の遺物出土状況(浅い溝SD1・SD2)実測図作成。
- 3月13日 濠内の遺物出土状況実測図作成。中央セクションベルトの除去。
- 3月14日 雨天のため現場作業中止。
- 3月17日 発掘区清掃。
- 3月18日 空中写真撮影(第1回目)実施。全景写真撮影。
- 3月19日 午前雨天のため現場作業中止。午後濠内溝SD1遺物取り上げ。
- 3月20日 濠内溝SD2遺物取り上げ。濠南側埋め戻し。
- 3月24日 濠内溝SD2遺物取り上げ。4BGr. 溝SD1掘削、清掃、写真。
- 3月25日 調査区西壁断面図作成。濠内清掃。
- 3月26日 濠内清掃。全景写真撮影。
- 3月27日 空中写真撮影(第2回目)実施。
- 3月28日 現地調査終了。
- 3月29日 プレハブ事務所撤去。

Ⅲ 遺 構

1. 墳丘及びその周辺

白鳥古墳は、名古屋台地の西端に位置する前方後円墳で、長軸をN23°Wにとり、前方部を南東へ向けている。^(註1)昭和20年代に名古屋大学の行った測量調査(図4)によれば、墳長70mで、前方部は幅55m、長さ30m、高さ7mを測り、後円部は直径45m、高さ6.5mを測る。また、-4.0mから-5.0mの等高線付近ではテラス状を呈しており、墳丘は二段築成であることが判る。さらに、墳丘の北西から東側にかけて0.5m乃至1.5m前後の高まりが認められ、外堤が遺存していた模様である。白鳥古墳は日本武尊の墓として熱田神宮が管理をし、また白鳥山法持寺の鎮守と位置付けられるなど、信仰の対象となっていたにもかかわらず、墳丘の南側及び南西部は大きく破壊されており、これ以上の姿は判然としない。これより先、昭和21年6月7日にアメリカ軍の撮影した空中写真(図版1)を見ても、不鮮明ながら、墳丘の南側は畑か何かになっており、遅くとも戦争中には破壊されていたことが判る。その後、戦後復興期に墳丘南側の道が拡幅され、その南側に中学校が建設された。さらに中学校の建設に伴い、元、その位置にあった法持寺が白鳥古墳の東側へ移され、現在に至っている。従って名古屋大学の測量図は、こうした開発の進む直前の姿を知るものとして大変貴重である。

以上のような所見を踏まえつつ、今回の発掘調査を機に再度墳丘測量を試みた(図5)。古墳は現在、東側3分の1を法持寺が、残り3分の2を名古屋市がそれぞれ所有しており、名古屋市分は公園として利用されている。^(註2)墳丘自体は、名古屋大学の測量時に比べ、南側及び南西部の崩壊が一層進み、また東側、法持寺境内での地藏尊建立等に伴う改変が目立っている。一方、墳丘北側などに見られた外堤や濠は、削平・埋立てのためか痕跡すら確認できない。標高は前方部で14.75m、後円部で14.47mを測り、名古屋大学測量図の-4.0m等高線は、ほぼ標高10.5m等高線に対応するものと思われる。(竹内)

註1 1985年発行の概報では「墳丘長軸線をN15°Wにとり、」と記した。この値は名古屋大学の測量図に基づくものであるが、今回測量するにあたっては公共座標第Ⅶ系を利用し、真北方向を求めた。古墳南側の道路や礼拝場などを参考に測量図を比較したところ、北方位に8°程の差が生じたため、真北からの角度に改めた。なお、名古屋付近での真北と磁北との差(偏角)は、6°40'W前後であるので、名古屋大学の測量図は磁北を指すものと思われる。

註2 公園として整備・利用されているのは、古墳の濠にあたる部分で、墳丘南側の崩壊部に法面保護が行なわれた以外は墳丘自体に手は加えられておらず、墳裾部にはコンクリート製の柵を設けている。





2. 調査区の概要

発掘調査区は、白鳥山法持寺の^{はくちうざんぼうじじ}本堂改築予定地点に設けられた。法持寺は白鳥古墳の墳丘約3分の1をその境内地に有し、北東部および東側の周濠が境内地に含まれる。法持寺は本来、白鳥古墳の南側、現在の市立宮中学校のところに境内があり、昭和28年都市区画整理にともない現在の場所に移転している。本堂は、境内の北西端に位置し、白鳥古墳の後円部墳丘に接する。昭和20年代に名古屋大学考古学研究室によって作成された測量図によれば、本堂の位置には周濠の北東部および外堤がめぐるものと推定できた。前年（昭和60年）3月に行われた第Ⅰ次調査は、墳丘からやや離れた、本堂のすぐ東に接する庫裡の部分を調査した。第Ⅰ次調査では、期待された外堤部などの痕跡は検出されず、円筒埴輪や中世の山茶碗などが出土したのみである。おそらく法持寺がこの場所へ移ってきた際に削平や埋め立てによる平坦化がなされたためと考えられる。今回の第Ⅱ次調査にあっても、外堤については第Ⅰ次調査の結果から、削平されているものと予察された。しかし、周濠に関しては、埋め立てられた状態で残存している可能性が高いものと思われた。

第Ⅱ次調査の対象面積は約460㎡、改築する本堂の設計に合わせたため、西と南に張り出しをもつ不整形な発掘区となった。北辺は、法持寺境内の北端の垣根に沿い、道路まで約1.5mを測る。道路の方が約50cm程低くなっている。調査区は旧本堂が取り壊された平坦地に設けられ、南西は後円部墳丘に接している（図版2上）。

調査区の外枠を設定したあと、濠の良好な断面層位図をとるために、調査区の北東と南西を結んだ基準線をつくった。この線を基準に調査区内を小面積のグリッド(Gr.)に区分した(右図)。グリッドの形状は、一辺5mの正方形を基本としたが、5B~5Eの各Gr.は南北方向が4m、東西が5mの長方形とした。また調査区に対し、斜めにグリッドが組まれたため、調査区の端では不定形な部分が出てきた。(木村)

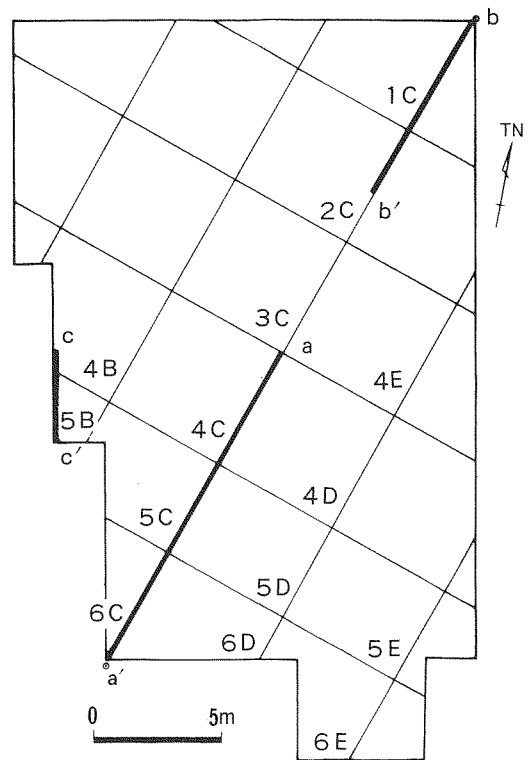


図6 グリッド配置図(太線は土層断面図)

3. 検出した遺構

調査前に推測したように、白鳥古墳の周濠の北東部の一部が検出された。周濠の外側、外堤があると思われた部分は、平坦地化し、古墳に関する遺構は発見されなかった。

一方、周濠内および調査区の北端部で中世の遺構が検出されている。第Ⅰ次調査で検出されている遺構や遺物と同様に、今回も中世の遺構や遺物がみつかったわけである。なかでも、周濠内には山茶碗や鉄刀などを出土する土壇や、周濠の肩に沿うように掘られ、埴輪片や山茶碗片が集中して検出された2本の溝があることがわかった。

(1) 周濠

白鳥古墳にともなう周濠は、調査区の南半で検出された(図版2下)。

周濠部分はややくぼんでおり、表土が50~60cmの厚さであった。人為的に埋められた表土の下からは、やや黒ずんだ暗灰色砂質土があらわれ、法持寺が移転してくる以前の旧表土と考えられた。濠内には、犬猫の墓を含む大小の攪乱壇が多数掘られており、一部は濠底の地山砂層に至っている。また、調査区南端の6EGr.では、瓦を含む大型攪乱があり、周濠を破壊していた。

旧表土の下の濠内埋土は、淡茶褐色や橙褐色を呈する砂質土が主であり、基本的層序は図8のようになる。層序は予測したよりも複雑であった。旧表土直下は、淡茶褐色(第7層)や灰茶褐色(第3層)の砂質土である。第1層の下の第9・10層までは、茶褐色の強い色調を呈し、若干の埴輪片、山茶碗片などを含む。第3層および第9層は後世の掘りこみの埋土と思われる。濠の中央部の最下層には、約20~50cmの厚さで橙褐色砂シルト質土層が堆積する。この土は軟質であり、濠底に自然な状態で埋ったものと思われる。

周濠の墳丘側にあたる調査区南西端では、黄灰褐色粘質土(第19層)がみられ、墳丘盛土の一部と考えられた。一方、墳丘の反対側(外側)にあたる肩では、最初第4~6層を地山と考え、その上面までを濠の範囲と考えていた。掘削がすすむにつれ、これらの層の土は地山とは異なることがわかってきた。後述するように、周濠の外側の肩付近には、中世期の溝や土壇が掘られており、削平や埋め戻しが為されたことが考えられる(図8)。第4~6層については、人為的に埋められた可能性が高い。

周濠は、墳丘の北側で幅広く、東側ではやや幅を減じて南に続くようである(図7)。したがって周濠としては、ややアンバランスな形に見える。調査区西寄りの周濠の肩が、中世の遺構により改変されていると考えれば、この付近の周濠の形は築造時と比べ若干広くなっているとも考えられる。現状では、調査区西寄りで幅約11m、東で約9mを測る。

深さについては、現地表(北側の地表面と同じ)から約1.2mを測る。埋土やその堆積状態からみて、水が滲えられていた形跡はなく、空濠だったと思われる。

今回はじめて白鳥古墳の周濠部分を発掘調査する機会を得たわけであるが、北東の一面を調査したにすぎず、周濠の形を検討するには他の部分での確認が不可欠であろう。

(2) 中世遺構

周濠内 周濠内埋土を掘削すると、その上層から埴輪片に混って12~14世紀頃の山茶碗

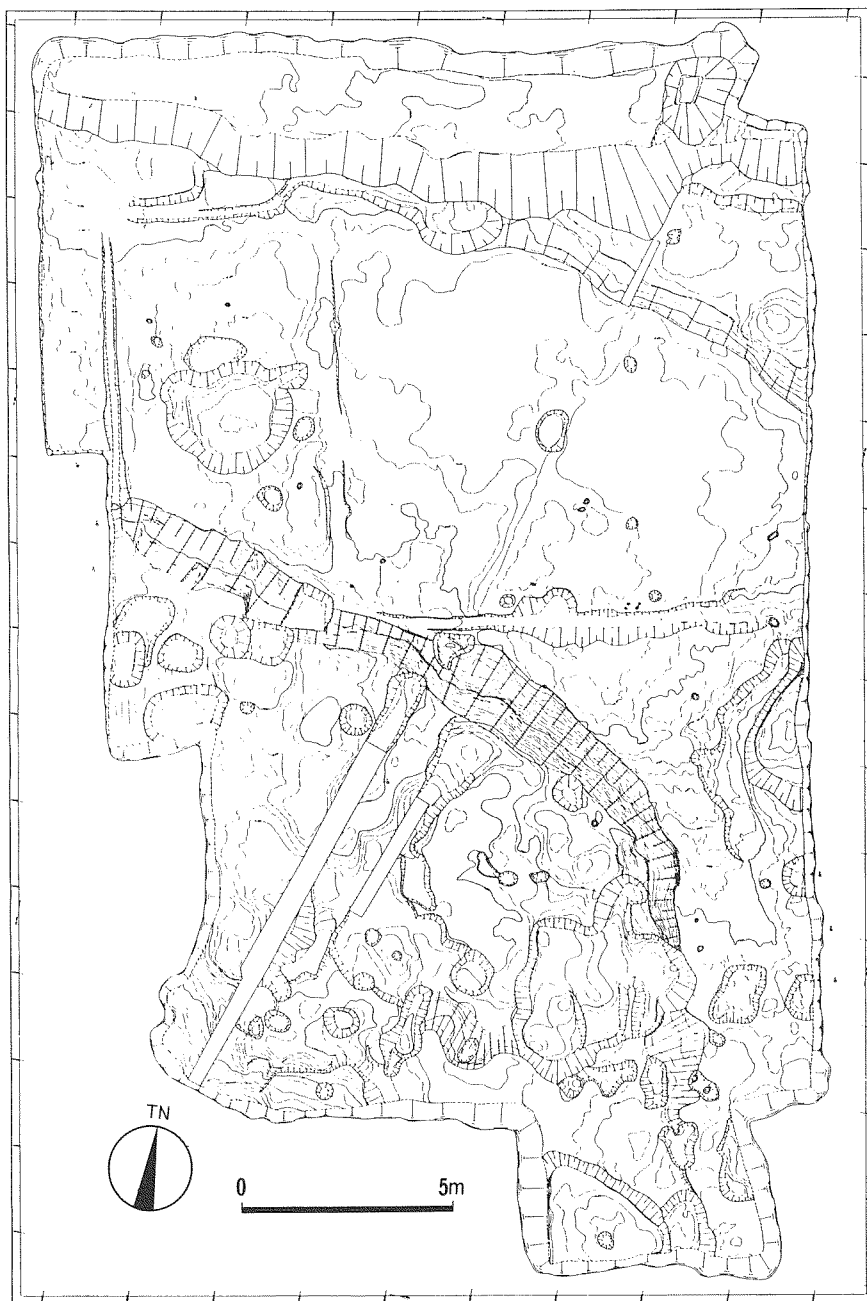
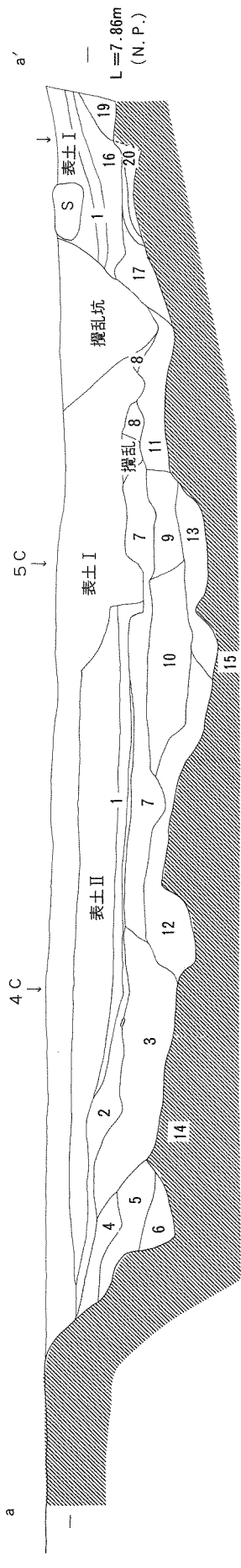
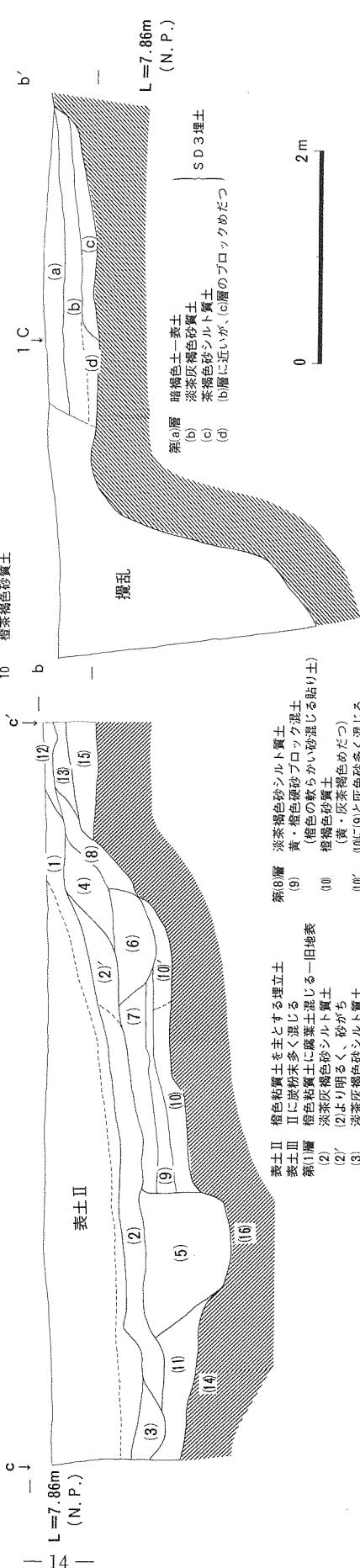


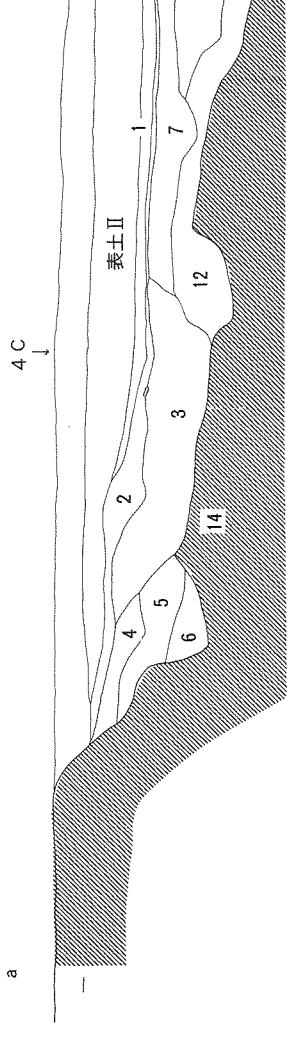
図7 遺構平面図



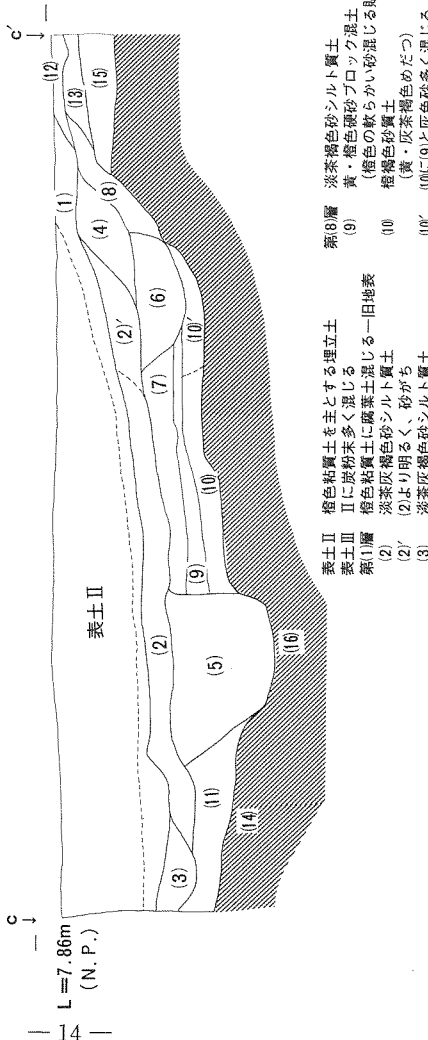
- 第11層 灰茶褐色砂シルト質土
1cm大地山砂ブロックめだつ
- 第10層 暗灰褐色土
暗灰褐色土を主とする埋立土
暗灰褐色土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第9層 暗灰褐色土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第8層 暗灰褐色土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第7層 暗灰褐色土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第6層 暗灰褐色土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第5層 暗灰褐色土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第4層 暗灰褐色土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第3層 暗灰褐色土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第2層 暗灰褐色土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第1層 暗灰褐色土
暗灰褐色土を主とする埋立土



- 第11層 灰茶褐色砂シルト質土
1cm大地山砂ブロックめだつ
- 第10層 暗灰褐色土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第9層 暗灰褐色土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第8層 暗灰褐色土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第7層 暗灰褐色土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第6層 暗灰褐色土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第5層 暗灰褐色土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第4層 暗灰褐色土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第3層 暗灰褐色土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第2層 暗灰褐色土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第1層 暗灰褐色土
暗灰褐色土を主とする埋立土



- 第8層 灰茶褐色砂シルト質土
黄・褐色礫砂ブロック混土
(褐色の軟らかい砂混じる粘り土)
- 第7層 灰茶褐色砂シルト質土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第6層 灰茶褐色砂シルト質土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第5層 灰茶褐色砂シルト質土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第4層 灰茶褐色砂シルト質土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第3層 灰茶褐色砂シルト質土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第2層 灰茶褐色砂シルト質土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第1層 灰茶褐色砂シルト質土
暗灰褐色土を主とする埋立土



- 第8層 灰茶褐色砂シルト質土
黄・褐色礫砂ブロック混土
(褐色の軟らかい砂混じる粘り土)
- 第7層 灰茶褐色砂シルト質土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第6層 灰茶褐色砂シルト質土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第5層 灰茶褐色砂シルト質土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第4層 灰茶褐色砂シルト質土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第3層 灰茶褐色砂シルト質土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第2層 灰茶褐色砂シルト質土
暗灰褐色土を主とする埋立土
- 第1層 灰茶褐色砂シルト質土
暗灰褐色土を主とする埋立土

図8 土層断面図 (Scale = 1/60)

片が出土するのが注目された。また、周濠内には、現代攪乱を含む多数の掘りこみがみられ、その中に中世遺構と確認できるものがあった。掘りこみは一部を除けば不定形なものが多く、土坑（SK）として21基を数えた。これらの遺構は、濠底に堆積した橙褐色砂シルト質土層（図8、第12層）に掘りこまれ、深いものは地山の黄灰色砂質土または青灰色砂礫土層へ達している。埋土は砂質であり、色調は暗灰褐色・橙褐色・黄灰色などがある。

こうした濠内の掘りこみのうち数基から、山茶碗などの中世遺物の出土をみた（SK3・4・6・9・21、SD1・2）。うちSK3・4・6およびSD1・2については、遺物の出土状態もよく、土坑の形状もはっきりしており、中世遺構としてまちがいないものと思われた。以下個別の遺構について説明する。

SK3（図10、図版3）

周濠内西端の4BGr.で検出された。平面は隅丸の長方形を呈し、南側の一部が攪乱により壊されている。南北120cm（残存部）、東西が100cm、深さ75cmを測る。埋土は茶灰褐色砂質土である。

土坑は黄色または橙色の硬く締った砂質土層から掘りこまれていた。この層は後で西側の壁の層序を観察したところ、人為的に盛り固めた土であることが判った（図8、第9層）。

土坑の底部直上から、2個の山茶碗が出土した（図10、図版5）。山茶碗は2個とも輪花の施された完形品である。1個は口縁を上に向け、斜めに傾いた状態であり、もう1個はその上に少し重なるようにして出土した。これらの山茶碗は11世紀末頃のものと考えられる。

SK4（図11、図版5）

4CGr.周濠の肩から南にむかって落ちこむ斜面で検出された。埋土は一見地山と思える黄橙色を呈し、周囲の地山より砂質が強く軟かいことから遺構と判明した。

SK4は、ほぼ長方形を呈し、長軸は真北に対し約12°30′北東に傾いている。SK3の長軸とほぼ同方向である。南北110cm、東西100cm、深さは北側の検出面から33cmを測る。土坑の北半部は地山に掘りこまれ、南半は周濠の肩付近に堆積した黄白色砂質土を肩にしていた。そのため南半部は周濠の完掘後、消失してしまった（図11）。

土坑の北西隅付近から、山茶碗小皿3点・土師小皿1点が出土した。土坑底からは離れた上部に4点が近接している。また、中央やや東寄り、鉄刀1点が見つかった。鉄刀は切先が南を向き、刃先が斜め下を向いて坑底に接した状態で出土している。

出土した山茶碗小皿から、12世紀代の年代が考えられる。

SK6（図11）

4CGr. SK4から南東へ約80cm離れたところで検出された。埋土は淡茶褐色砂質土であ

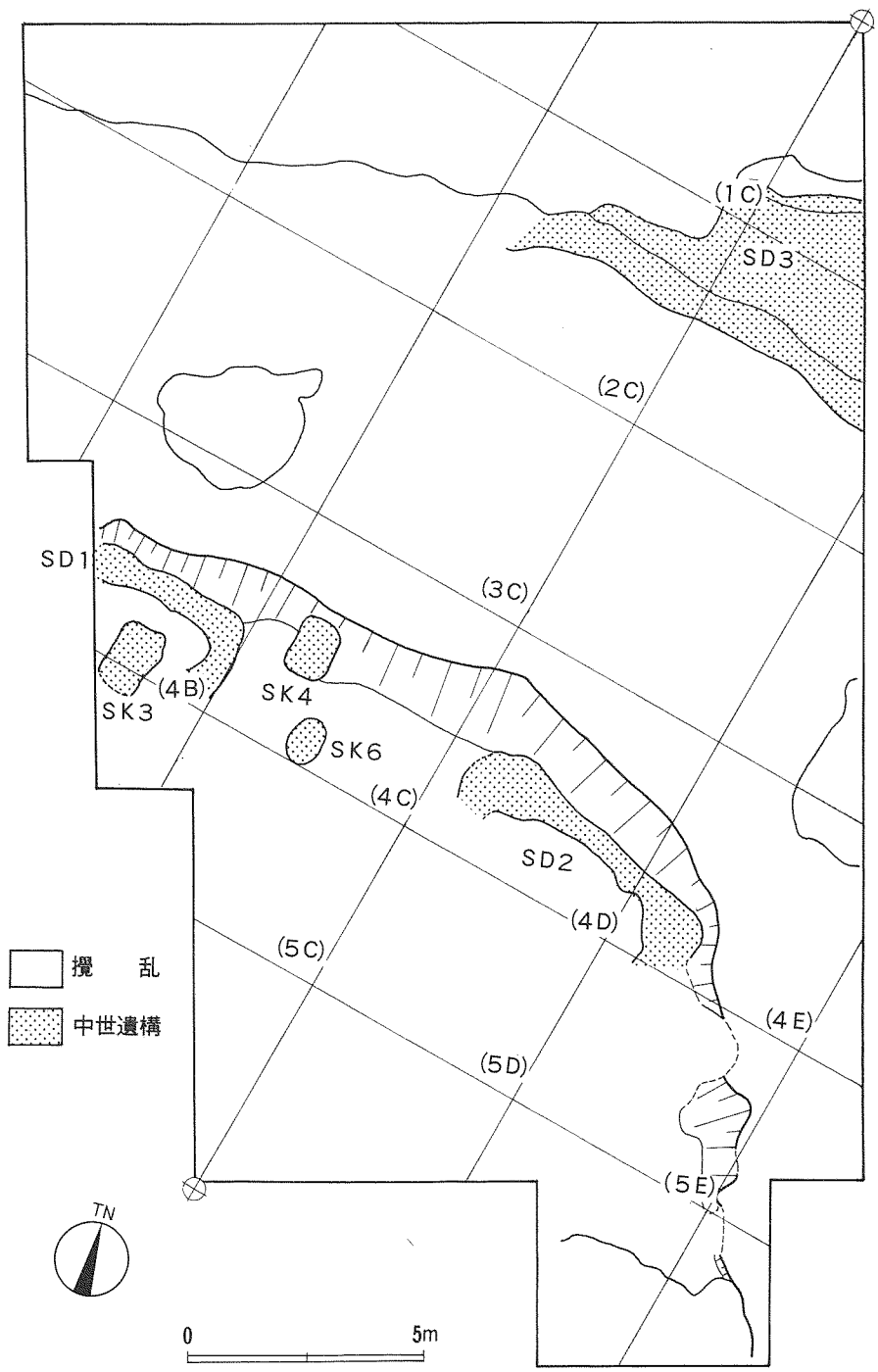


図9 中世遺構分布図 (Scale = 1/160)

7.30m N. P.

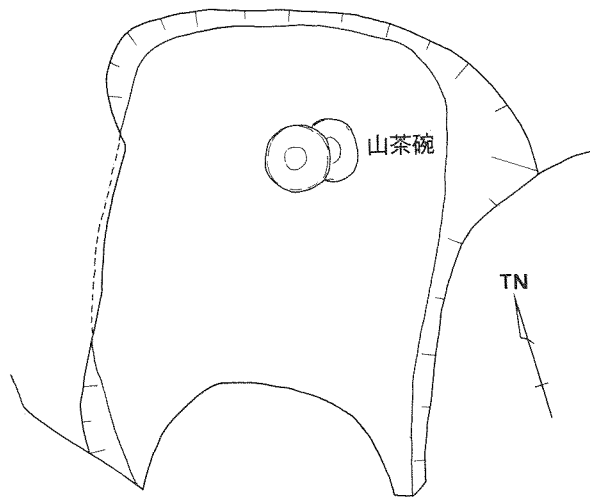
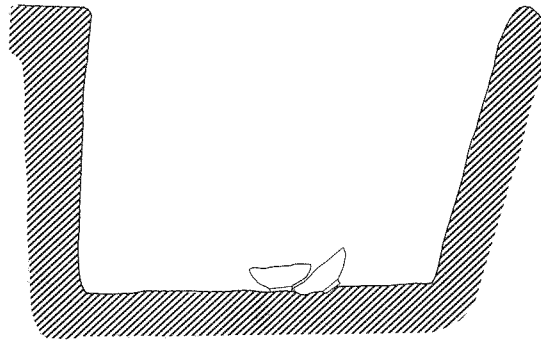


図10 SK3実測図 (Scale = 1/40)

る。SK4の南半部と同様、地山ではなく黄白色砂質土に掘りこまれており、周濠完掘後には消失した。

平面形は南北に長い楕円形であり、長径110cm、短径80cm、深さ15cmを測る。長径はSK3・4とほぼ同方向である。深さについては検出面から測ったものであり、実際はもっと深かったものと思われる。

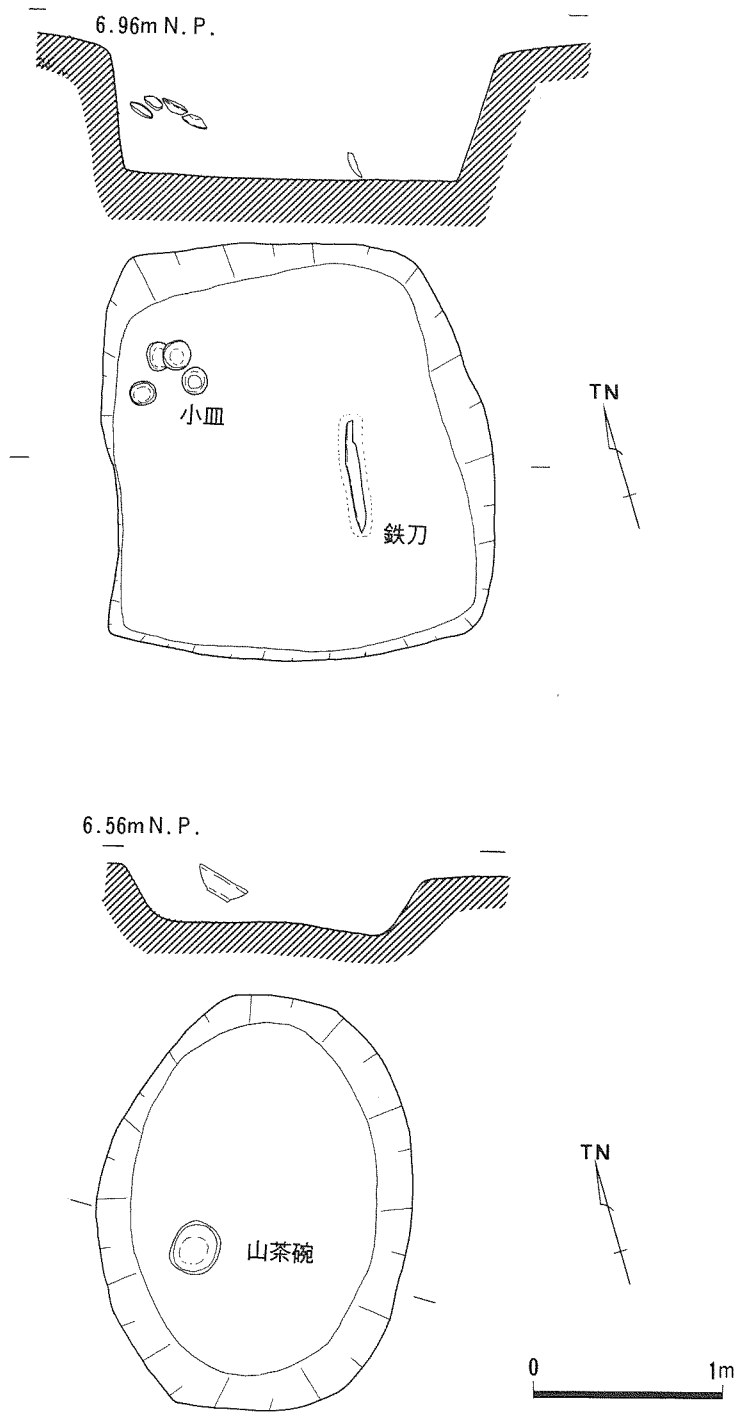


図11 SK4 (上)、SK6 (下) 実測図 (Scale = 1 / 40)

遺物として完形の山茶碗が1点、坛底近くで出土している。口縁を上方に向け、斜めになった状態で埋っていた。山茶碗の時期は、12世紀初めの頃のものと思われる。

SD1 (図13、図版4)

4BGr.周濠の肩から南にむかって落ちこむ斜面の中間で、周濠内を掘削中に検出された。調査区西端から、周濠の北肩に沿って約3.5m東へ延び、東端は鉤状に南西へ曲がっており、屈曲部の先端は攪乱で壊されていた。溝の幅はおおむね60cmを測る。深さは40cm前後であり、レンズ状の断面形を呈する。SD1は、地山でなく周濠埋土の灰茶褐色砂質土および淡茶褐色砂シルト質土層に掘りこまれている。埋土は灰茶褐色砂質土でややシルトを含んでいる。

SD1は周濠の肩から約50cm下方で検出され、上面でだいたい7.5m(N.P.)のレベルを測る。溝内には多量の埴輪片が集積した状態で出土しており、山茶碗などの中世遺物が

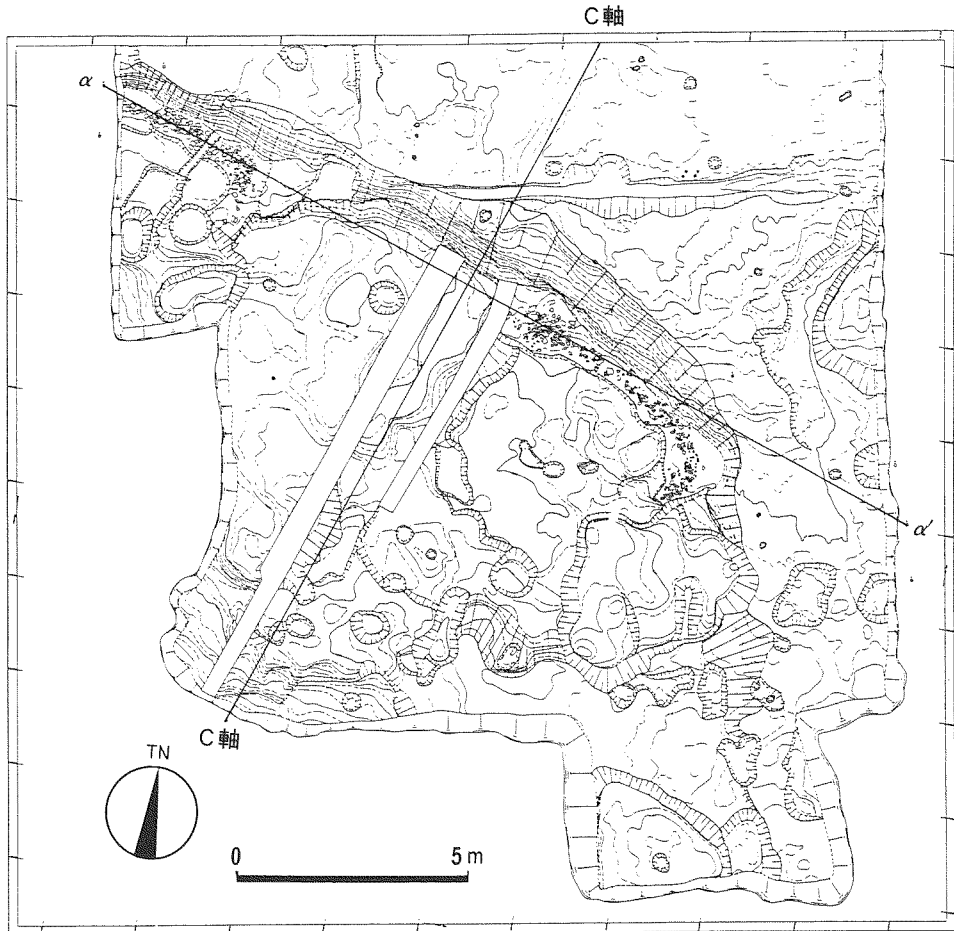


図12 SD1・2 遺物出土状態図の基準設定図



図13 SD1内遺物出土状態図 (Scale = 1 / 30)

量的には少ないが混在している。埴輪は円筒埴輪であり、ほとんどが20cm以下の破片となっている。出土状況から破片として投棄されている可能性が高い。出土した山茶碗の年代は、12世紀前半から12世紀代におさまるものと思われ、SD1もこの時期につくられたものと考えたい。

SD2 (図14、図版7)

4DGr. から4EGr. にかけての、周濠北肩の斜面の濠底近くで検出された。周濠の肩が南へ大きく回りこむ位置にあり、平面図で見るとSD1と並列しているように見える。

溝は両端が鉤状に曲がり、鉤の先端部は攪乱等のため明瞭に検出されなかった。北西の先端部については、サブトレンチで先行して掘削したために、遺構の形を壊してしまう結果となった。サブトレンチを開けた際、13世紀代の二筋壺の破片が出土し、その後付近のSD2埋土を掘削中に同一個体の陶片を発見した。埋土は灰茶褐色砂シルト質土である。

溝は北西から南東へ伸び、その長さは約6.2mを測る。幅は、南側の肩が検出できなかったため一定でないが、保存状態の良いところで1mを測る。深さは約30cmで、レンズ状の断面形を呈する。

SD2は周濠の肩から約70cmの下方で検出され、上面で7.3m (N.P.) のレベルを測る。SD1と同様に、溝内には埴輪片が集積しており、周溝の他の部分に比べ遺物の出土割合が高かった。出土遺物は、円筒埴輪の小片が多く、山茶碗などの中世遺物が混在する。前述のように、北西端付近で完形に復元できる二筋壺が出土している。出土する山茶碗の年代は13世紀初頭から中頃のものであり、遺構の時期もこの頃が考えられる。

周濠外

周濠の北および北東側は、名古屋大学の測量図によれば外堤と思われる高さ0.5m程の高まりがめぐっていることが想定された。しかし、「調査区の概要」で述べたように、法持寺の旧本堂を建築する際に土地を平らにならしたようであり、外堤はすでに削平された可能性が高かった。調査をしてみると、5cmに充たない薄い表土の直下から、明橙色シルト質土の地山があらわれ、一部の攪乱の凹みを除けばほぼ平坦化しているという結果を得た。調査区の北端は、深さ1.5mを越す大規模な攪乱溝があり東西に伸びている。地形的にはこのあたりから北側の道にかけて地山が下がっていくものと思われる。したがって、旧測量図からも勘案して、外堤の幅は8m程度のもので復原できよう。

一方、中世の遺構として、調査区の北東部の1C~2CGr. で検出されたSD3がある。SD3は東西に走行する浅い溝状遺構で、淡茶灰褐色砂質土(図8、b層)、茶褐色砂シルト質土(c層)を埋土とする。最大幅3.2m、深さ52cmを測る。埋土中からは、埴輪の破片の他、14世紀から15世紀代の山茶碗片が出土する。

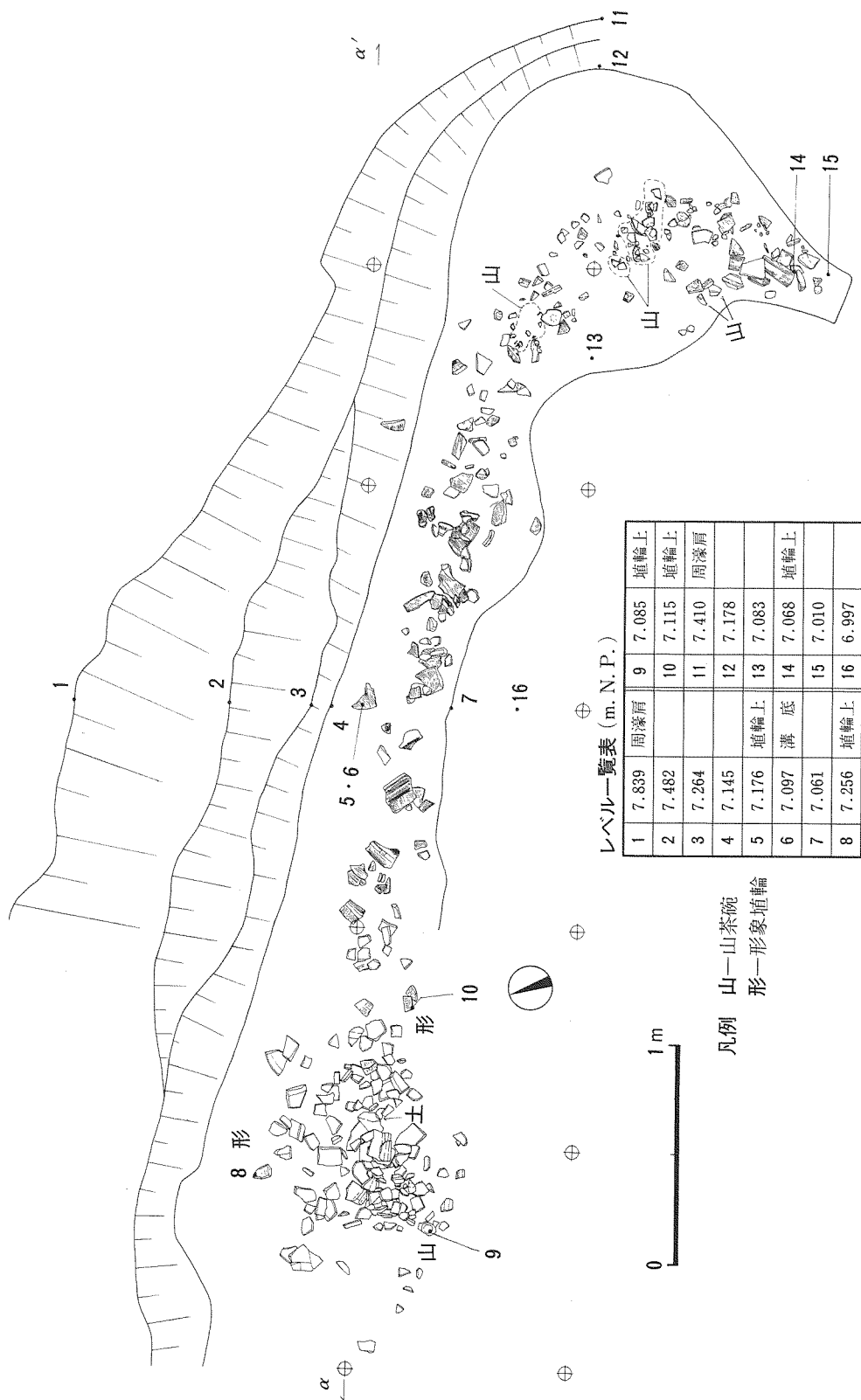


図14 SD2内遺物出土状態図 (Scale = 1 / 30)

遺構に関するまとめとして、とくに周濠内に顕著な中世遺構について触れておきたい。

周濠内につくられた中世遺構は、鉤状に屈曲する浅い溝（SD1・2）と長方形または楕円形の土壇（SK3・4・6）が明らかな遺構として認められる。

SD1とSD2については次のような共通点がある。(1)古墳周濠の肩に沿うように走行する。(2)端部が屈曲する。(3)埴輪片が山茶碗などと混在して大量に出土、の諸点があげられ、埋土・規模などについても類似するところがある。出土する埴輪については、破片が多く、埋まり方にも一定の規則性は観察できなかつた。周濠内の他の部分に比べて、遺物が集中して出土することから考えれば、溝内にまとめて投棄されたとみることもできる。

2本の溝の年代については、出土する山茶碗などから検討すると、SD1が12世紀、SD2が13世紀前半代と、やや時間差がみられる。また、SD1・SD2ともに屈曲した先端部が攪乱等ではっきりせず、本来の形については究明できなかつた。

次に土壇については、SK3・SK4の2例は形や向きに共通点があり、同様の性格を想定できるのではないと思われる。SK3はその位置がSD1の内側にあり、SD1との間の部分には人為的に土が貼られていた。そのためSD1とSK3が関係のある遺構であるとも考えられたが、遺物からみると同時期のものとは考えがたいようである。

こうした周濠内の中世遺構の存在については、白鳥古墳においては今回の調査で初めて明らかになった。これらの遺構の性格については、近辺での類例も知られておらず、現在のところ即断はできない。とはいえ周濠内に遺構が集中していることについては、何らかの意味があると思われる。古墳の墳丘や主体部で中世の遺構や遺物がみつかることがあり、近年の報告が少なくない。向坂鋼二氏は静岡県内の古墳での類例をまとめており、10～12世紀頃に古墳が墓地として「再利用」されていくことを指摘している（参考文献）。今回の調査例でみると土壇については墓である可能性は高いと思われる。ただ土壇の他に、一見して特徴的な2本の溝の存在があり、即断は難しい。結論は、今後の調査や類例の増加に期するとしても、白鳥古墳の周濠部が中世において何らかの形で「再利用」された可能性が高いことを付しておきたい。（木村）

参考文献

向坂鋼二 1985 「古墳の再利用」 『転機』創刊号

IV 遺 物

出土遺物は総量でコンテナケース約15箱を数えるが、その主要な部分は埴輪が占めており、他に古代・中世期の陶器・土師器・瓦・鉄製品等が少なからず検出されている。陶器類の一部を除いた大多数は遺存状態が悪く、特に埴輪などは手の平大以下の小破片ばかりである。出土位置の大半は周濠内で、特に周濠の肩に沿った位置にまとまって検出される傾向が強かった。

1. 古墳時代・埴輪 (図15～21、表1～4、図版11～15)

出土した埴輪には圧倒的多数を占める円筒埴輪の他に、朝顔形埴輪や形象埴輪等も少数ある。いずれも無黒斑であることから、窯焼成による製品であると考えられる。胎土中には白色粒あるいは白色縞の粘土の流れが認められるケースが多くある。焼成は良好な物が多いものの、堅緻な焼き上がりを見るものは割合として少ない。色調は本来の埴輪色（橙褐色）を強く志向する傾向にあり、須恵器的な青灰色を呈するものは割合を少なくしている。別項記載の断夫山古墳の埴輪と比べると、視覚的に訴えるニュアンスを異にしているようである。

円筒埴輪 (図15～19、表1～3、図版11～14)

全形を知り得るものがない為、ここでは各部位ごとに成形・調整技法上の特徴を簡単にまとめておきたい。

口縁部 (1～14) (図15、表1、図版11)

合計64個体分ある。ここでは主として口唇部の調整・形態の在り方で以下の5種に分類できる。

1類 (1～3) 突帯が端部に付けられるものである。合計3点ある。突帯の調整は皆ヨコナデである。幅広で低平なもの(1)と、突出した観の強いもの(2～3)との別がある。

2類 (4・5) 口唇部が比較的強いヨコナデ調整によって丸味をもち、緩く外反するものである。合計2点のみである。内面の上端では口唇部から続くヨコナデ調整によって畝状に凹凸をなす。

3類 (6～8) 口唇部がヨコナデ調整によって平滑になるものである。合計35点あり、最も一般的な形状である。

4類 (8～11) 口唇部がヨコナデ調整によって丸味をもつものである。合計12点ある。3類との差はあまり明確でないものが多い。

5類 (12～14) 口唇部が比較的強いヨコナデ調整によって浅くくぼむものである。合

計12点ある。内1点(14)の外面には赤彩された痕跡がわずかに認められる。

底部 (15~24) (図15~16、表1、図版11~12)

底部片は個体数にして42点を数える。外面端部の調整の違いによって3分類できる。

1類 (15~17) ヨコ方向のヘラ削り調整を行なうものである。底面はヨコハケ (15・16) あるいはヘラ削り (17) によって比較的平らに整えられている。内面端部はヘラ削り調整を行なうもの (15・16) と、そうでないもの (17) とがある。

2類 (18・19) 未調整のままのものである。内面調整はヨコハケあるいはヨコナデのままのもの (18) と、ヘラ削りを加えるもの (19) とがある。

3類 (20~24) ヨコナデ調整のものである。指頭圧痕の顕著な例 (22) や、部分的にヘラ削りを加えるもの (24) もある。底面はスノコ痕を残すもの (20・24) や、ヨコハケまたはヘラ削りを加えるもの (21~23) 等がある。内面端部はヘラ削り調整のものが多い。

突帯の形状 (25~29) (図16、表1、図版12)

ここに代表的なもの5点を挙げた。突帯貼り付け時のヨコナデ調整の精粗によって若干形状を異にする。大きさは幅2cm・高さ1.5cm前後が一般的であるが、(28)のように小振りなものもある。

1類 (25・26) 側面のヨコナデ調整がていねいで平滑なものである。角がとれて丸味をもつものの、略台形を呈する。

2類 (27~29) 比較的突出し、断面形がM字状に近いものである。大小のばらつきをもつ。(29)のように指頭圧痕が加えられて変形するものもある。圧倒的多数がこれに属する。

突帯間の幅 (30~34) (図16~17、表1~2、図版12~34)

突帯間の幅を観察できるのは5点に限られている。8cmから15cmの範囲である。10cm以内が4点と比較的幅の狭いものが目立っている。勿論のこと、どの位置に設定されているのかは不明である。

ハケ目 (35~44) (図17~18、表2、図版13)

ハケ目の密度によって概ね3分類できる。

1類 (36~38) 1cm当り3~4本程度の密度の粗いものである。数は相当に限られる。

2類 (39~44) 1cm当り5~7本程度の密度のものである。最も一般的なものである。

3類 (35) 1cm当り8本を超す密度の細かいものである。1点のみである。

透孔 (45~49) (図18、表2、図版13~14)

比較的遺存状態の良い5点を選んで観察すると、直径5cmを若干上まわる大ききで円形の透孔が想定できる。小破片ばかりである為に設定される位置は不明である。(46)には

内側から突帯にかけて手を懸けた凹凸が顕著に認められる。他のものはヘラ状具による穿孔の後、ナデ調整が加えられている。

傷・サイン (50~60) (図19、表2、図版14)

器壁外面に傷あるいはサインの認められるものが11点ある。偶然にして傷として痕跡を残すものと、意図的なもの(サイン)との区別は難しい。

1類 (50~54、57、60) 棒状あるいはヘラ状具によるヨコ・ナナメ沈線を有するものである。ナナメ沈線は(52・57)の2点のみである。(60)では3条平行の横線が認められる。

2類 (58・59) ヘラ状具による3本一対の沈線を有するものである。

3類 (56) 2条のナナメ沈線が交差するものである。1点のみである。

この他に比較的太目の縄圧痕を胴部外面突帯間に残すもの(55)もある。

赤彩された埴輪 (61~65) (図19、表3、図版14)

赤彩されている円筒埴輪は合計11点(6個体分?)ある。すべて橙色を呈する軟質の円筒埴輪の破片である。内面まで赤彩されているものは認められない。

成形技法 (66~68) (図19、表3、図版14)

通常の場合、粘土紐の積み上げは途中必要の都度乾燥の為の休止を必要としながらも、順次積み上げられ成形される。例外として、(66~68)のように輪積み痕が逆傾する場合があります。粘土紐の積み上げの途中で円筒を転倒させ、その上に改めて積み上げる2分割倒立技法(味美パタン)(文献1)の存在が確認できる。

調整技法

器面調整は外面一次調整にタテハケ、二次調整にヨコハケを用いる。内面調整は指頭によるナデの後ヨコ方向のハケが用いられている。前記した底部調整(ヨコケズリ・ヨコナデ)と外面二次調整のヨコハケ(C種ヨコハケ)(文献2)をもって、本墳出土円筒埴輪の特徴の主要部分を占める。

朝顔形埴輪 (69~75) (図20、表3、図版14)

合計7点ある。いずれも小破片ばかりで頸部から口縁部にかかる部分である。焼成は良好なものが多いものの、須恵質のもの(74)は1点のみである。突帯の付けられる頸部から上の部分は緩く弧を描いて外反する形状を呈する。口唇部は比較的強いヨコナデ調整によって面取りされている。赤彩をとどめる例は認められない。器面調整は外面一次調整にタテハケ、二次調整にヨコハケを用いる。内面調整はヨコナデあるいはヨコハケである。ハケ目の密度は円筒埴輪同様、1cm当たり3本から9本と幅を有する。

形象埴輪 (76~104) (図20~21、表3~4、図版14~15)

表1 埴輪観察表(1)

挿図No.	図版No.	出土地点	種類	部位	整形の特徴	胎土・焼成・色調	ハケ目・本/cm		備考
							外面	内面	
15-1	◇	4 D	円筒	口縁	外: ヨコナデ, 口唇: ヨコナデ 内: ヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含, 良好, 淡橙褐色			突帯
2	◇	表土	◇	◇	外: タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け 時のヨコナデ 口唇: ヨコナデ, 内: ヨコナデのちヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含, 良好, 淡茶褐色	5~7	6~7	突帯
3	◇	4 B	◇	◇	外: ヨコナデ, 口唇: ヨコナデ 内: ヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含, 良好, 淡橙褐色			突帯
4	◇	ゴウ・攪乱	◇	◇	外: タテハケのちヨコハケ, 口唇: ヨコナデ 内: ヨコハケのちヨコナデ	密・白色粒含, 良好, 淡橙 褐色	6~7	6~7	
5	◇	4 D	◇	◇	外: タテハケのちヨコハケ, 口唇: ヨコナデ 内: ヨコハケのちヨコナデ	密・白色粒含, 良好, 淡橙 褐色	6~8	9~10	
6	◇	4 B	◇	◇	外: ヨコハケのち部分的にタテハケ, 口唇: ヨコナデ 内: ヨコハケ及びナメハケ	密・良好, 堅緻, 暗茶褐色	7~8	6~7	
7	◇	4 C	◇	◇	外: タテハケのちヨコハケ, 口唇: ヨコナデ 内: ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含, 良好, 橙褐色	5~6	5~6	
8	◇	4 C	◇	◇	外: タテハケ, 口唇: ヨコナデ 内: ヨコハケのちヨコナデ	密・白色縞含, 良好, 堅緻 灰褐色	7~8	7~8	
9	◇	4 D	◇	◇	外: タテハケのちヨコハケ, 口唇: ヨコナデ 内: タテハケ	密・白色粒及び白色縞含, 良好, 橙褐色	5~6	5~6	
10	◇	攪乱溝	◇	◇	外: ヨコハケ, 口唇: ヨコナデ 内: ヨコハケ	密・白色縞含, 良好・堅緻 青灰色	5~6	5~6	
11	◇	4 B	◇	◇	外: タテハケのちヨコハケ, 口唇: ヨコナデ 内: ヨコハケ及びヨコナデ	密・白色粒含, 良好, 淡黄 褐色	6~7	5~6	
12	◇	ゴウ・攪乱	◇	◇	外: タテハケのちヨコハケ, 口唇: ヨコナデ 内: ヨコハケ	密・白色縞含, 良好, 暗茶 褐色	6~7	6~7	
13	◇	表土	◇	◇	外: ヨコハケ, 口唇: ヨコナデ 内: ヨコハケ	密・白色縞含, 良好, 淡黄 褐色	5~6	7~8	
14	◇	5 E	◇	◇	外: タテハケのちヨコハケ, 口唇: ヨコナデ 内: ヨコハケ	密・良好, 黄褐色	7~8	6~7	外面赤彩
15	◇	4 D	◇	底	外: タテハケのちヨコハケのちへら割り, 底面: ヨコハケ 内: ヨコハケのちへら割り	密・白色縞含, 良好, 淡黄 橙色	7~8	6~7	
16	◇	4 D	◇	◇	外: タテハケのちヨコハケのちへら割り, 底面: ヨコハケ 内: ヨコナデのちへら割り	密・白色縞含, 良好, 堅緻 暗青灰色	7~8		
17	◇	6 D	◇	◇	外: タテハケのちヨコハケのち部分的にタ テハケ・へら割り 底面: へら割り? 内: ヨコハケのちヨコナデ	密・白色粒含, 良好, 淡黄 橙色	6~7	7~8	
18	◇	4 B	◇	◇	外: タテハケのちヨコハケ, 底面: へら割り? 内: ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含, 良好, 淡橙褐色	5~7	6~7	
19	◇	表土	◇	◇	外: タテハケのちヨコナデ, 底面: ケズりのちナデ 内: ヨコナデのちへら割り	密・白色縞含, 良好・堅緻 淡青灰色	7~8		
20	◇	4 D	◇	◇	外: タテハケのちヨコハケのちヨコナデ, 底面: スノコ状 内: ヨコナデのち指頭整形のちへら割り	密・白色粒含, 良好, 淡茶 褐色	6~7		
21	◇	表土	◇	◇	外: タテハケのちヨコハケのちヨコナデ, 底面: ヨコハケ 内: ヨコナデのちヨコハケのちへら割り	密・良好, 淡橙褐色	8~9	7~8	
22	◇	表土	◇	◇	外: タテハケのちヨコハケのちヨコナデ, 底面: へら割り, 内: ヨコハケのちへら割り	密・白色粒及び白色縞含, 良好, 淡茶褐色	7~8	6~7	
16-23	◇	攪乱溝	◇	◇	外: タテハケのちヨコハケのち部分的に タテハケ, 底面: ヨコハケ, 内: ヨコナデのち本口による割り	密・白色粒及び白色縞含, 良好, 淡茶褐色	8~9		
24	12	4 B	◇	◇	外: タテハケのちヨコハケのちへら割り, 底面: スノコ状 内: タテハケのちヨコナデのちへら割り	密・白色粒及び白色縞含, 良好・堅緻, 暗茶褐色	6~7	8~9	
25	◇	4 D	◇	胴	外: タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け 時のヨコナデ 内: ナメハケ及びヨコハケ	密・白色粒含, 良好, 淡橙 褐色	6~8	6~7	
26	◇	5 E	◇	◇	外: ヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内: 指頭整形及びヨコナデ	密・白色粒含, 良好・堅緻 暗茶褐色	—		外面全体に自然釉
27	◇	4 B	◇	◇	外: タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け 時のヨコナデ 内: タテハケのちヨコハケ	密・白色縞含, 良好・堅緻 淡青灰色	7~8		
28	◇	4 C	◇	◇	外: タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け 時のヨコナデ 内: ヨコハケ及びヨコナデ	密・白色縞含, 良好・堅緻 淡灰褐色	7~8	5~6	透孔
29	◇	4 B	◇	◇	外: タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け 時のヨコナデ及び指頭整形, 内: ヨコナデ及び指頭整形	密・白色縞含, 良好・堅緻 淡黄褐色	5~7		
30	◇	4B・SD2	◇	◇	外: タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け 時のヨコナデ 内: ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含, 良好・堅緻, 淡青灰色	6~7	5~6	突帯ハガレ

表2 植輪観察表(2)

挿図No.	図版No.	出土地点	種類	部位	整形の特徴	胎土・焼成・免調	ハケ目・本/cm		備考
							外面	内面	
17—31	12	4 D	円筒	胴	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：タテ及びヨコナデ及び指頭整形	密・白色粒及び白色綿含、良好、淡黄褐色	6~7	6~7	透孔
32	〃	4B・SD2	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：タテハケのち一部ヨコハケ	密・白色粒及び白色綿含、良好・堅緻、淡青灰色	7~8	7~8	外面全体に自然釉
33	13	4B・SD2	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケのちナメハケ	密・白色粒及び白色綿含、良好・堅緻、暗茶褐色	7~8	7	
34	〃	4B・SD2	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：タテハケのちヨコハケ	密・白色粒及び白色綿含、良好・堅緻、淡青灰色	6~7	6~7	
35	〃	4 D	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケ	密・白色粒及び白色綿含、不良・軟、淡黄褐色	8~9	6~7	
36	〃	4 D	〃	〃	外：タテハケ 内：ヨコナデ	密・白色綿含、良好、橙褐色	3~4		透孔
37	〃	攪乱溝	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコナデのちナメハケ	密・白色粒及び白色綿含、良好、淡黄褐色	4~7	4~5	
38	〃	表土	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコナデのち部分的なタテナデ	やや粗・白色粒及び白色綿含、やや不良・軟、淡黄褐色	4~5		
18—39	〃	4 D	〃	〃	外：タテハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコナデのちヨコハケのち部分的なタテナデ	密・白色粒及び白色綿含、良好、暗茶褐色	6~7	7~8	
40	〃	4 C	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケ	密・白色綿含、やや不良・やや軟、淡橙褐色	6~7	7~8	透孔
41	〃	4 C	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケのちヨコナデ	密・白色綿含、良好・堅緻、淡黄灰色	5~6	5~6	
42	〃	4 D	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：指頭整形及びナデ	密・白色粒及び白色綿含、良好、淡青灰色	6~7		透孔
43	〃	4 B	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケのちヨコナデ	密・白色綿含、やや不良・やや軟、淡黄褐色	6~7	7~8	
44	〃	4 D	〃	〃	外：ヨコハケのちジグザグのタテハケ 内：ヨコハケのちヨコナデ	密・白色綿含、良好、淡黄褐色	5~6	7~8	突帯ハガレ
45	〃	ゴウ・攪乱	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケのちヨコナデ	密・白色粒含、良好・堅緻、淡茶褐色	5~6	6~7	透孔、外面一部自然釉
46	〃	4 B	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ナメハケのちヨコハケ	密・白色粒及び白色綿含、良好・堅緻、淡青灰色	7~8	6~8	透孔
47	〃	4 D	〃	〃	外：タテハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコナデのちタテナデのちヨコハケ	密・白色粒及び白色綿含、良好、淡黄褐色	6~7	7~8	透孔
48	14	4 E	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケのちナメハケ	密・白色綿含、良好・堅緻、暗茶褐色	3~4	3~4	透孔
49	〃	ゴウ・攪乱	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケのち一部ヨコナデ	密・白色粒含、良好・堅緻、淡青灰色	5~6	5~6	透孔
19—50	〃	4 C	〃	〃	外：タテハケのちヨコナデ2・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケのちタテナデ	密・白色綿含、良好、淡橙褐色	6~7	7~8	キズ?
51	〃	2 C	〃	〃	外：タテハケのちヨコナデ1・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケのち一部ヨコナデ	密・白色粒及び白色綿含、良好、淡橙褐色	6~7	5~6	キズ?
52	〃	4E~4D・攪乱	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケのち沈線1 内：ヨコナデ	密・白色綿含、良好・堅緻、暗茶褐色	7~8		キズ?
53	〃	ゴウ・攪乱	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケのち沈線1 内：ヨコハケ	やや粗・白色粒及び白色綿含、良好、淡橙褐色	6~9	7~8	サイン?
54	〃	5 E	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケのち沈線1 内：ヨコハケ	密・白色綿含、やや不良・やや軟、淡黄褐色	5~6	5~6	キズ?、透孔
55	〃	4B・SD2	〃	〃	外：タテハケのち縄瓦重、突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケのちタテハケのち部分的にヨコナデ	密・白色綿含、良好・堅緻、淡青灰色	6~7	7~8	キズ?
56	〃	4 D	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケのちX字状の沈線2 内：ヨコハケ	密・白色綿含、やや不良・やや軟、淡黄褐色	6~7	6~7	サイン?
57	〃	4B・SD2	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケのち幅広沈線1 内：ヨコハケのちヨコナデ	やや粗・白色粒及び白色綿含、良好、淡橙褐色	7~9	8~9	サイン?
58	〃	4 C	〃	〃	外：タテハケのち沈線3・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケ及びヨコナデ	やや粗・白色粒及び白色綿含、不良・軟、淡橙褐色	7~8		サイン?、透孔
59	〃	4 B	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケのち沈線3・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケ及びヨコナデ	密・白色粒含、良好、橙褐色	7~8	5~6	サイン?、透孔
60	〃	4 D	〃	〃	外：タテハケのちヨコナデ3、口唇：ヨコナデ 内：ヨコハケのちヨコナデ	密・白色粒及び白色綿含、良好、淡橙褐色	7~8	7~8	サイン?

表3 埴輪観察表(3)

挿図No	図版No	出土地点	種類	種類	整形の特徴	胎土・焼成・色調	ハケ目・本/cm		備考
							外面	内面	
19-61	14	4D・SK3	円筒	胴	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケのちヨコナデ	やや粗・白色縞含、良好、淡橙褐色	6~7	6~7	外面赤彩
62	〃	4D・SK3	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含、やや不良・軟、淡黄褐色	6~6	5~6	外面赤彩
63	〃	5D	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケ	やや粗・白色粒及び白色縞含、良好、淡黄褐色	7~8	6~7	突帯ハガレ部分に赤彩
64	〃	4D	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ナデ?	密・白色粒含、やや不良・軟、淡橙褐色	6~7		外面赤彩、内面マメツ
65	〃	4D	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ナデ?	密・白色粒含、やや不良・軟、淡橙褐色	5~7		外面赤彩、64と同一個体?
66	〃	6D	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケのち部分的にタテナデ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケのちヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含、良好、淡黄灰色	6~7	6~7	倒立、透孔
67	〃	5E	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含、良好、淡茶褐色	5~6		倒立
68	〃	2D	〃	底	外：タテハケのちヨコナデ、底面：ヨコナデ 内：ヨコハケのちヘラ削り	密・白色縞含、良好、明茶褐色	6~7	8~9	倒立
20-69	〃	4D	朝顔	口縁	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含、淡橙褐色	6~7	8~9	
70	〃	4E	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケのち部分的なタテハケ、口唇：ヨコナデ 内：ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含、良好、淡黄褐色	5~6	5~6	
71	〃	6C	〃	頸	外：ヨコナデ及びヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含、良好、淡黄褐色	5~6	5~6	
72	〃	ゴウ・攪乱	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含、良好、淡橙褐色	6~8	8~9	
73	〃	6D・攪乱	〃	〃	外：ヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケのちヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含、良好、黄褐色	7~8	7~8	
74	〃	4C	〃	〃	外：ヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケおよびヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含、良好・堅緻、淡黄灰色	7~8	6~7	
75	〃	6C	〃	口縁	外：タテハケのちヨコナデ及びヨコナデ 内：?	密・白色粒及び白色縞含、不良・軟、淡黄褐色	3~4		
76	〃	表採	蓋?	笠?	外：タテハケ及びヨコハケ 内：ヨコハケ	密、良好、暗褐色	5~7	6~7	
77	〃	4B~5B	動物?	脚	外：タテハケのち部分的にタテナデ 内：棒状具によるタテナデ	密・白色粒及び白色縞含、良好、淡橙褐色	6~7		外面一部ハガレ
78	15	5E	?	胴	外：ヨコハケのちヨコナデ 内：ヨコハケのち指頭整形	密・白色粒及び白色縞含、良好、淡黄褐色	9~10	8~9	
79	〃	5E	?	〃	外：タテハケのちヨコハケのちヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含、良好、淡黄褐色	7~8		外面一部に化粧土
80	〃	5E	?	胴	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含、良好、茶褐色	6~10	7~8	外面一部に化粧土
81	〃	4E	?	口縁	外：ヨコハケ、口唇：ヨコハケ 内：タテハケ	密・白色粒及び白色縞含、良好、淡黄褐色	7~8	7~8	全体に化粧土
82	〃	ゴウ・攪乱	?	胴	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含、良好、黄褐色	5~6		内外面一部に化粧土
83	〃	4E	?	口縁	外：?、口唇：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや粗、良好、明橙褐色			
84	〃	5D	?	胴	外：タテハケ 内：ナメハケ	やや粗・白色粒及び白色縞含、やや不良・やや軟、淡橙褐色	5~6	6~7	外面マメツ
85	〃	4D	楯?	〃	外：タテハケ 内：ナメハケ	密・白色粒及び白色縞含、やや不良・やや軟、橙褐色	4~5	—	全体にマメツ
86	〃	ゴウ・攪乱	〃	〃	外：タテハケ・ナメハケのちタテハケ 側縁：ヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含、良好、淡黄褐色	4~5		鱗
87	〃	ゴウ・攪乱	〃	〃	外：タテハケ 内：ナデ	密・白色粒及び白色縞含、良好、淡黄褐色	5~6		鱗、外面わずかに赤彩
88	〃	4D	〃	〃	外：タテハケ・鱗部貼り付け時のナデ 内：ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含、やや不良・軟、淡黄褐色	3~4	3~4	鱗、外面わずかに赤彩
89	〃	5E	〃	〃	外：タテハケ・ナメハケのちタテハケ・鱗部貼り付け時のナデ、側縁：ヨコナデ 内：ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含、良好、淡橙褐色	3~4	3~4	鱗、外面わずかに赤彩
90	〃	4D	〃	〃	外：タテハケ・鱗部貼り付け時のナデ 内：ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含、良好、淡黄褐色	3~4	3~4	鱗、内外面わずかに赤彩

表4 埴輪観察表(4)

挿図No	図版No	出土地点	種類	部位	整形の特徴	胎土・焼成・色調	ハケ目・本/cm		備考
							外面	内面	
21-91	15	4 D	楯?	底	外: タテハケのちヨコナデ、 底面: ヨコナデ? 内: ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含、 淡黄橙色	3~4	3~4	楯の基部? 91・ 93・94同一個体?
92	〃	4 D	〃	胴	外: タテハケ 内: ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含、 良好、淡黄褐色	3~4	3~4	楯の基部?
93	〃	4 D	〃	〃	外: タテハケ 内: ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含、 やや不良、やや軟、淡黄褐色	3~4	3~4	楯の基部?
94	〃	4 D	〃	〃	外: タテハケ 内: ヨコハケ	やや粗・白色粒及び白色縞 含、良好、黄褐色	3~4	3~4	楯の基部?
95	〃	4 D	〃	〃	外: タテハケ 内: ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含、 良好、淡橙褐色	3~4	3~4	楯の基部?
96	〃	5 E	?	底	外: タテハケのちヨコハケのちヘラ削り、 底面: ヘラ削り 内: ヨコハケのちヘラ削り	やや粗・白色粒及び白色縞 含、良好・堅緻、暗茶褐色	3~4	3~4	
97	〃	ゴウ・攪乱	〃	胴	外: タテハケのちヨコハケ・ヨコナデ 内: ヨコハケ	やや粗・白色粒及び白色縞 含、良好・堅緻、淡黄灰色	3~4	3~4	
98	〃	ゴウ・攪乱	〃	〃	外: タテハケのちヨコハケ・ヨコナデ 内: ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含、 良好・堅緻、淡黄褐色	3~4	3~4	
99	〃	5 E・攪乱	〃	〃	外: タテハケのちヨコハケ 内: ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含、 良好・堅緻、暗茶褐色	3~4	3~4	
100	〃	4 D	〃	〃	外: タテハケのちヨコハケ 内: ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞及び スサ含、良好、淡橙褐色	3~4	3~4	
101	〃	4 E	〃	〃	外: タテハケ・突帯貼り付け時の ヨコナデ 内: ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含、 良好、淡黄褐色	3~4	3~4	
102	〃	4 B	〃	〃	外: タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け 時のヨコナデ 内: ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含、 良好、茶褐色	3~4	3~4	
103	〃	4 D	楯?	〃	外: タテハケのちヨコハケ 内: ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含、 良好、淡黄橙色	3~4	3~4	楯の基部?
104	〃	4 D	〃	〃	外: タテハケのちヨコハケ・棒状具による 沈織1 内: ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含、 良好、淡黄褐色	3~4	3~4	楯の基部?

いずれも小破片ばかりである為にその形状を明確にすることができない。円筒埴輪と朝顔形埴輪の範疇からはずれる要素を持ったものをここに挙げた。

(76) は蓋の笠部に該当するであろうか。内外面共にハケ調整である。(77) は動物の脚部に相当するであろうか。外面調整はタテハケの後タテ方向のナデで、内面は棒状具によるタテ方向のナデである。(78~82) は内外面の一部に茶褐色の化粧土(0.5~2mm大の砂粒を少量含む。)が上塗りされており、さらには3cmを越す高さの突帯を有する。形状不明の埴輪である。少なくとも2個体分を数える。(83・84) も形状不明である。(85~90) の6点は楯の鱗部に相当するであろうか。側縁部のナデ調整を除いて内外面共にハケ調整である。ハケ目の密度は1cm当たり3~5本と粗いものばかりである。また、赤彩痕をとどめるもの(87~90)が多く、(90)などは内外面共に認められる。(91~95) は楯の円筒部に相当すると考えられるものである。単一方向(外面タテ、内面ヨコ)の粗いハケ(3~4本/cm)調整に共通点が認められ、さらには(91)の推定径が約20cmと通常の円筒埴輪にくらべ極端に細いものである。破片にして23点、数個体分を数える。(96~104) は円筒埴輪と同様の器面調整がなされるものの、1cm当たり3~4本と粗いハケ目で、推定径が約20cmと楯形埴輪と同程度の太さである。何らかの形象埴輪の円筒部に相当する可能性が強い。破片にして30点、5・6個体分に相当するかと考えられる。

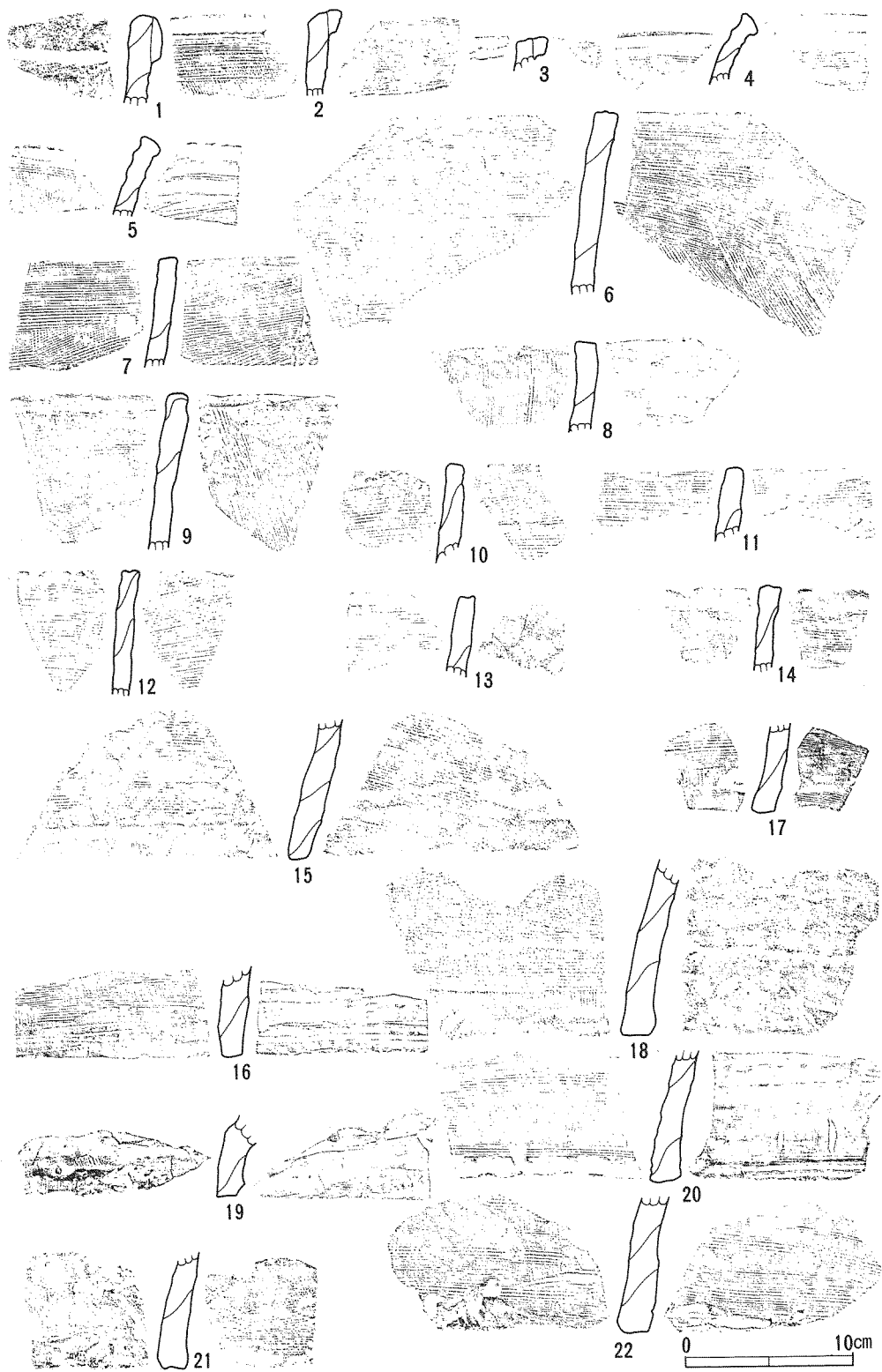


图15 埴輪実測図(1)

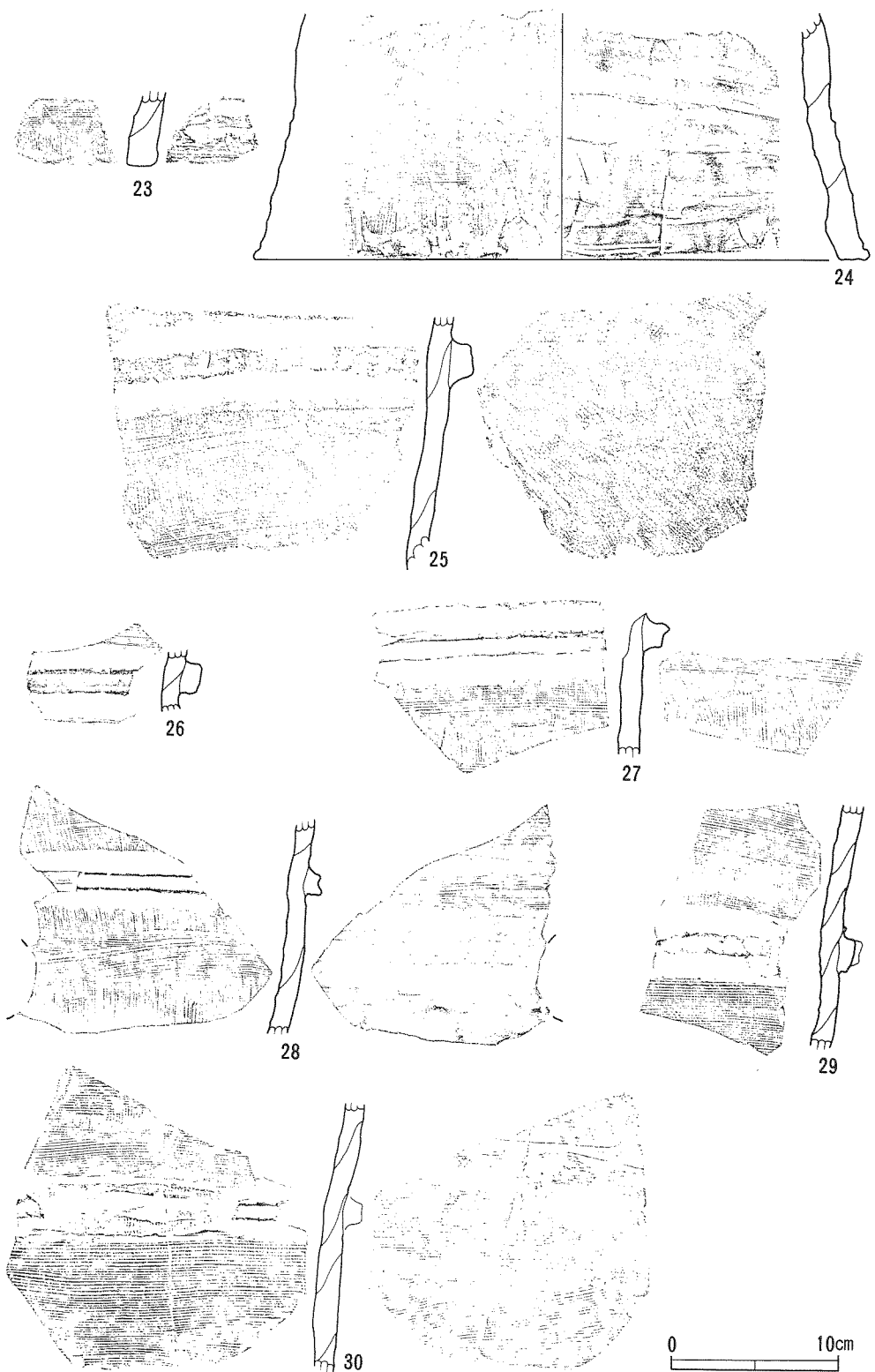


图16 埴輪実測图(2)

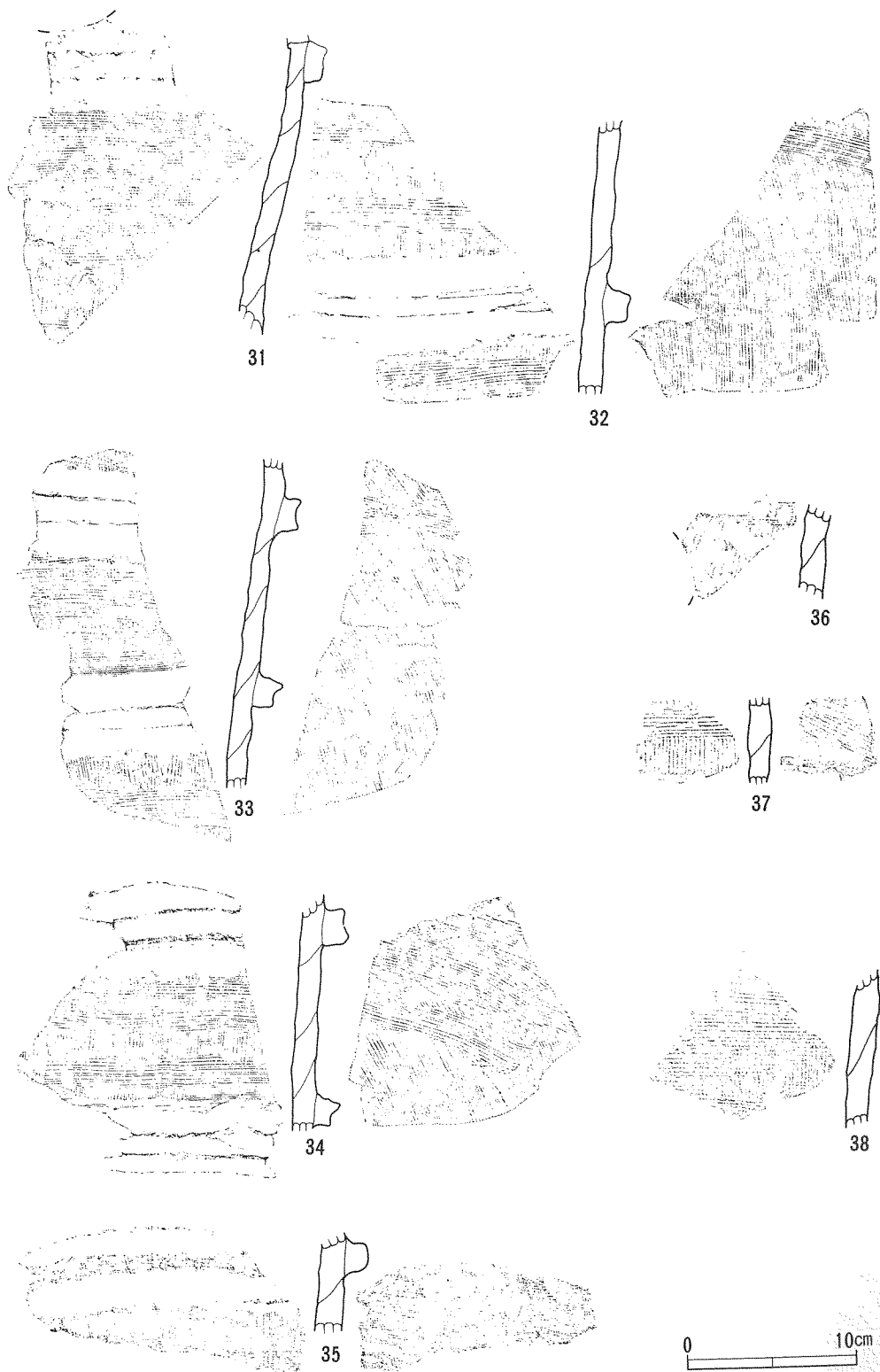


图17 埴輪実測図(3)

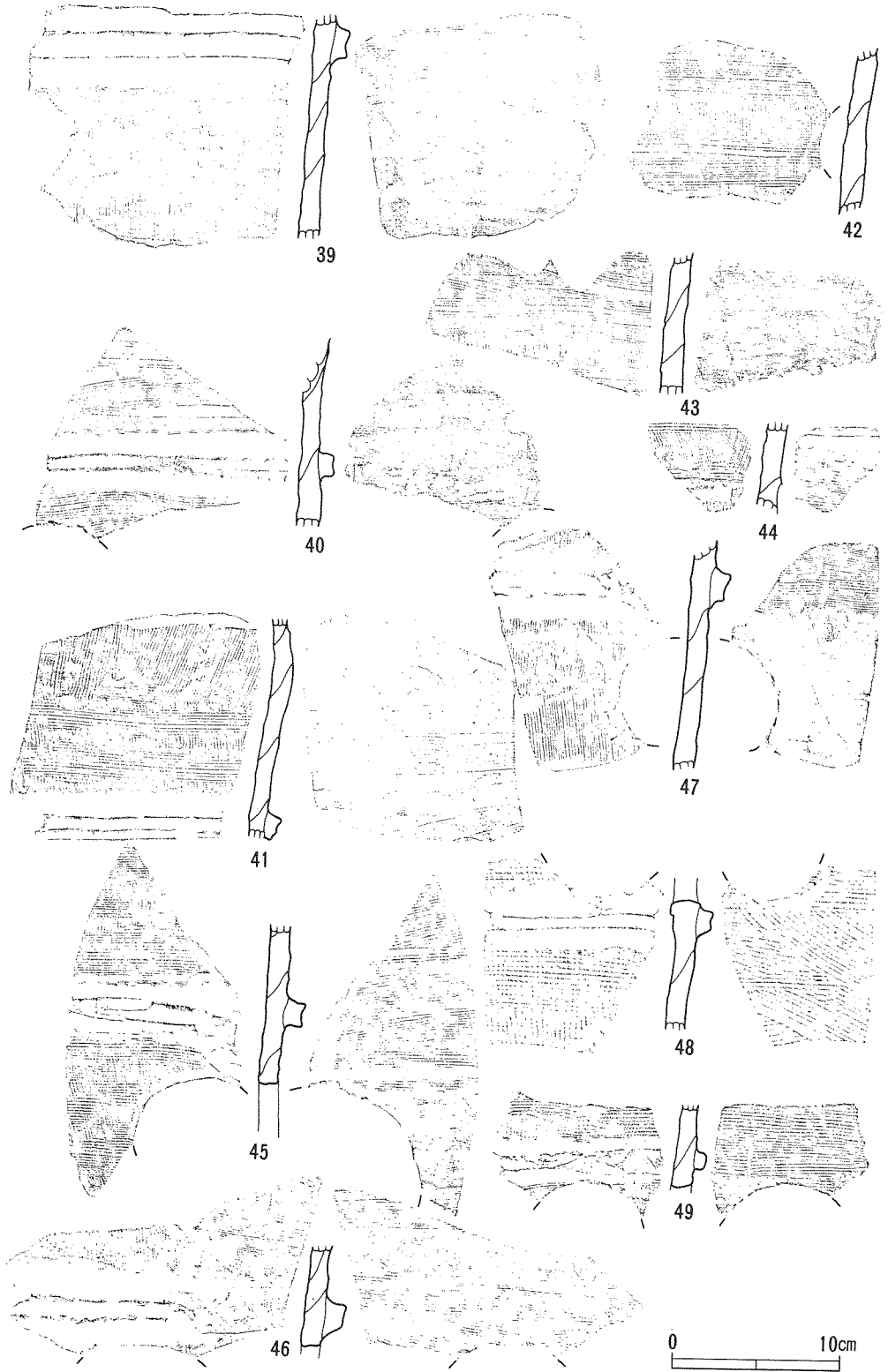


图18 埴輪実測图(4)

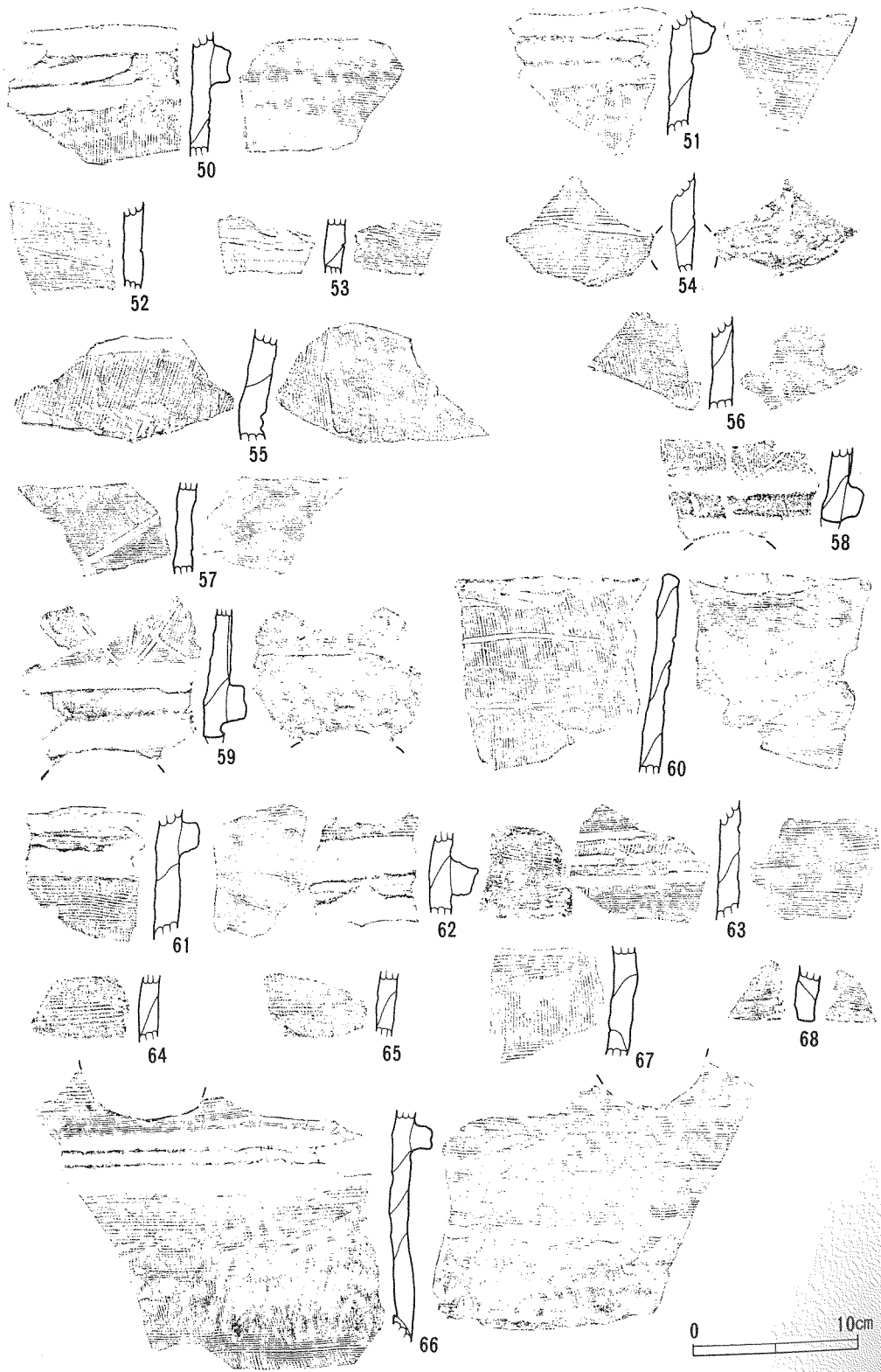


图19 埴輪実測图(5)

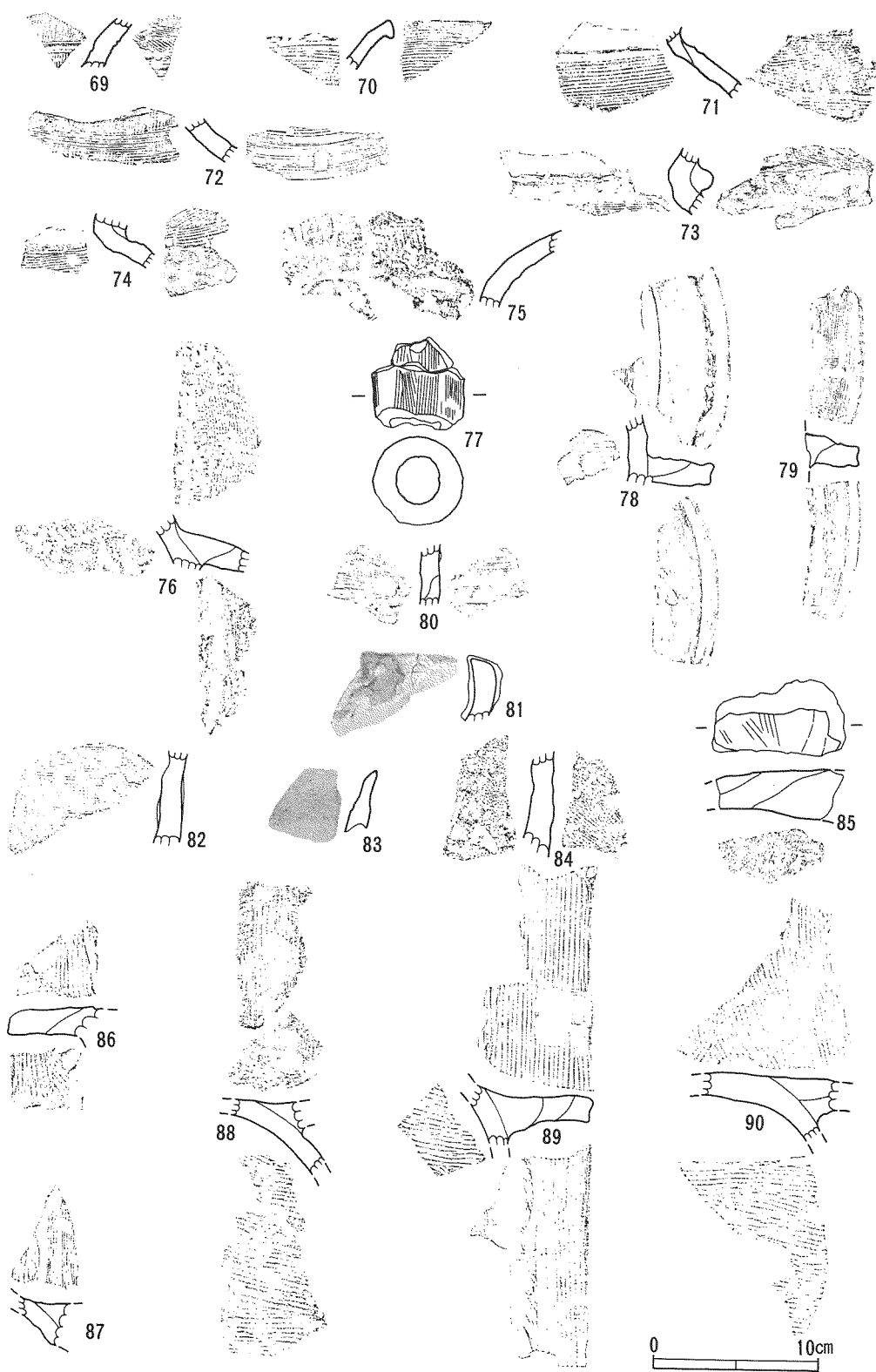


图20 植輪実測图(6)

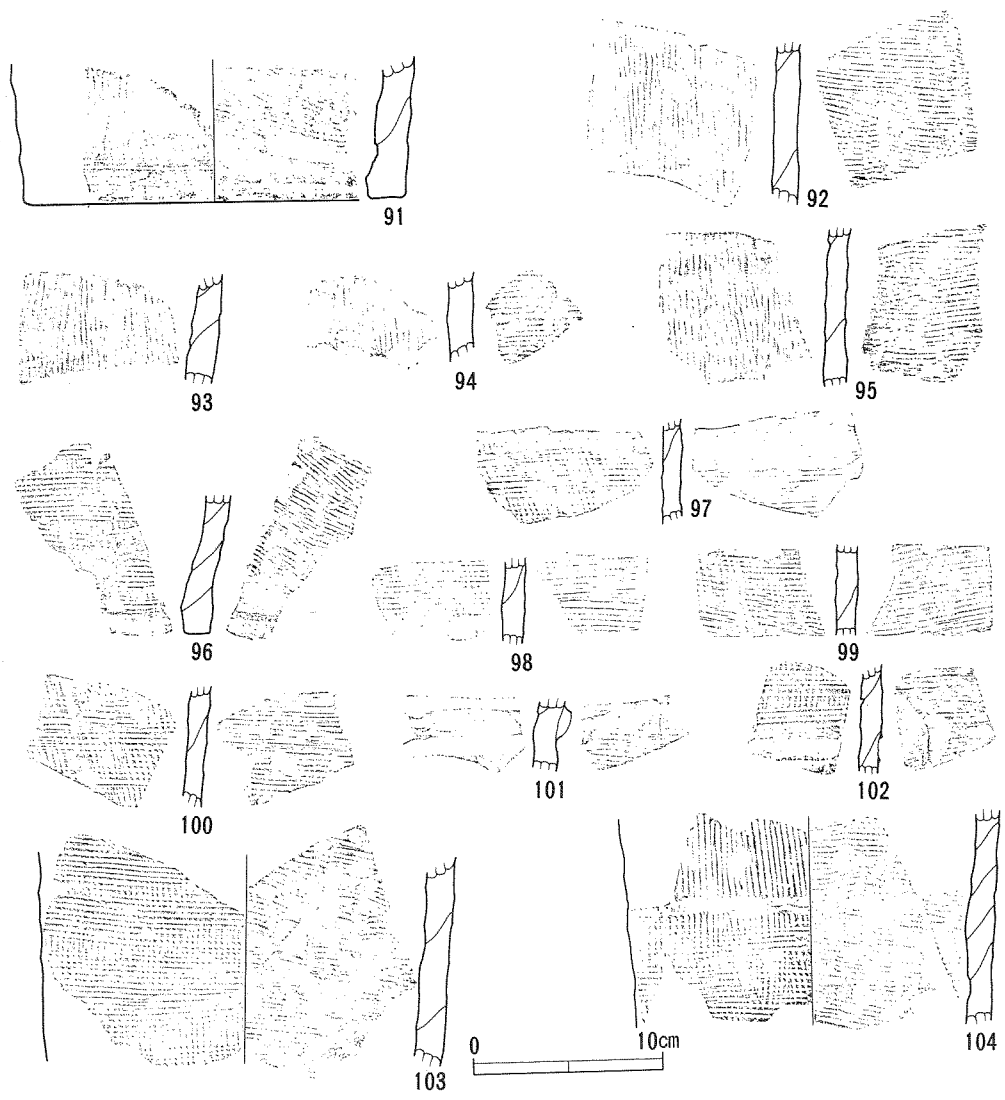


図21 埴輪実測図(7)

本墳出土の埴輪については、過去三渡俊一郎氏による資料紹介（文献3）と、先に行なわれた第Ⅰ次調査分の報告（文献4）等があり、今次のものを加えると徐々に理解の度を増してきていると思われる。しかしながら、形象埴輪については資料数に制約があったり、比較的資料数の豊富な円筒埴輪といえども小破片に限られている現状にある。これを踏まえた上で、本墳出土埴輪の諸特徴を簡単に整理しておくことにする。

円筒埴輪の器面調整は先に触れたように、外面一次調整にタテハケ、二次調整にヨコハケ（C種ヨコハケ）が用いられ、底部調整はヨコナデ・ヨコケズリのもので一般的である。これは赤塚次郎氏の「尾張Ⅱ期・オワリ志向A」（文献1）や、川西宏幸氏の「尾張第Ⅴ期」と内容を同じくしており、名古屋台地を中心とした尾張地域全体に普及・顕現化する

調整技法でもある。I次調査の際に認められた底部タタキ技法（3点）や静止ヘラ削り技法（1点）に該当する例は今回の調査では出土することがなかった。あくまでも稀少例の内に留まるものであろうか。胴部突帯間にサインの認められる例は少数といえども例を増してきている。特に3本一対の沈線で構成される特徴的な文様は、別項記載の断夫山古墳例中にも若干認められるところであり、注意される。また、粘土紐の接合痕が上下間で逆傾する2分割倒立技法（味美パターン）の用いられた資料も少なくとも4点を数えることになり、断夫山古墳で採集された大型の円筒埴輪例が示すように、大型品に通有の成形技法であると言えそうである。赤塚次郎氏はこれを指標として「尾張Ⅱ期・後半」（文献5）の時期を仮設している。同様例は本墳をはじめ先に例示した断夫山古墳や、味美二子山古墳、味美御旅所古墳等で確認されている（文献1）にすぎない現状にあるものの、今後の資料の追加が十分に予測される。

本墳出土の形象埴輪には現在までのところ、冑・楯・蓋・動物等と思しきものがあるものの、小破片ばかりである為に不明な点が多い。冑形埴輪と思われるもの以外は、いずれも外面調整に円筒埴輪とは一見して区別できる粗いハケが用いられていることに特徴的である。同様の類例は現在までのところ、断夫山古墳の壺？形埴輪（別項記載）と、昭和61年調査されたばかりの東区・東二葉町遺跡出土の楯？形埴輪（概報近刊の予定）の2点を数えるのみであるが、近い将来には同様例を見る機会が増えるものと思われる。

埴輪の胎土中には多くの場合白色粒あるいは白色縞状の粘土の流れが認められ、焼成が比較的良好なものが多いものの、須恵器的な硬質のものは相対的に量を少なくしている。また、色調も橙色を呈するものが青灰色のものを上回っている。これらの諸特徴をもってすぐさま生産地を特定しようとするは無理の多い事と思われるが、従来つとに言われてきた東山古窯跡群の名を挙げるよりも、尾張旭市卓ヶ洞・城山地区（文献6）のほうがより蓋然性が高いであろう。（野澤）

引用・参考文献

- 1 赤塚次郎 1983 「尾張としてはにわ製作」 『考古学の広場』第1号
- 2 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」 『考古学雑誌』第64巻第2号
- 3 三渡俊一郎 1983 「名古屋市熱田白鳥・断夫山古墳の前後関係について」 『古代学研究』99
- 4 名古屋市教育委員会 1985 『熱田区・白鳥古墳』
- 5 赤塚次郎 1986 「造墓への憧憬」 『考古学の広場』第3号
- 6 赤塚次郎 1985 「文字が刻まれた埴輪」 『愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅲ

2. 古墳時代・その他 (図22、図版15)

埴輪以外で古墳時代のものと考えられるものは、4CGr.の濠内から出土した2点の土製品のみである。ともに黄褐色を呈し、胎土には直径1mm未満の砂粒を含むなど、埴輪片と思えるほど酷似している。しかし、土製品の各部分は完存しており何かの破片であることは否定される。(105)は長辺4.7cm、短辺3.6cm、厚さ1.4cmを測る扁平な直方体である。表面及び側面はナデ仕上げされ、裏面にはやや深いハケメが残る。(106)は長辺4.0cm、短辺2.1cm、厚さ0.9cmで、外面はいずれもナデ仕上げである。表面には指圧痕のような浅いくぼみが残る。

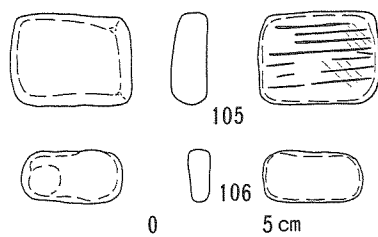


図22 土製品実測図

(竹内)

3. 古代・中世の遺物 (図23~24、表5~9、図版16~19)

土塚SK3出土遺物 (1・2)

山茶碗 碗 (1・2) 大形の碗で1は四輪花、2は三輪花である。どちらも無釉で胎土は緻密で砂粒を含んでいない。水簸していると思われる。11世紀末の東山窯産である。土塚底より1を2の中に重ね合わせた状態で出土した。

土塚SK4出土遺物 (3~7)

山茶碗 小皿 (3~5) 口径8.0cm、底径5.0cm、器高2.0cm前後で口縁端部を面取りするもの(3・5)と丸く仕上げるもの(4)がある。底部は回転糸切り痕を残すが、4は指ナデをする。いずれも完形で12世紀代の猿投窯産である。

土師皿 (6) 表面は黄白色であるが断面は黒色をしている。全体に摩滅が激しい。

鉄刀 (7) 平棟、平造、片関の直刀で身部に木質が付着している。

土塚SK6出土遺物 (8)

山茶碗 碗 (8) 大形の碗で体部は丸みを持ち、口縁部で外反する。初期の形態を持っている。12世紀初頭の東山窯産である。

土塚SK9出土遺物 (9・10)

山茶碗 碗 (9) 体部は直線的で口縁に至り外反する。13世紀前半代の瀬戸系産である。

土錘 (10) 土師質の管状土錘で両端部を欠損する。摩滅が激しい。

土塚SK21出土遺物 (11)

山茶碗 碗 (11) 底部破片。高台はしっかりと付けられている。底部に回転糸切り痕が残る。12世紀前半の猿投窯産である。

溝SD1出土遺物 (12~21)

山茶碗 碗 (12・13) 12の高台は三角高台で丁寧に付けられている。底部に回転糸切り

痕が残る。内面に重ね焼きの時の高台片が付着する。12世紀前半代の東山窯産である。13は底部小片。高台は低くつぶれているが丁寧に付けられている。

山茶碗 小皿 (14~16) 14の底部はナデ調整により回転糸切り痕を消している。16の体部は薄手で口縁部が肥厚する。いずれも12世紀代の猿投窯産である。

片口鉢 (17~20) 17、20は口縁部小片で12~13世紀代のもの。18は底部小片で高さ2cm程の三角高台が付く。12世紀前半代の猿投窯産である。19は口縁部小片で12~13世紀代の常滑窯産である。

瓦 (21) 丸瓦の細片である。

溝SD2出土遺物 (22~29)

山茶碗 碗 (22~25) 22は無高台で均質手山茶碗。13世紀初頭の瀬戸系産である。23は13世紀中頃の瀬戸系産である。出土時は破碎していたがほぼ完形となった。24は底部片で12世紀代の猿投窯産である。

片口鉢 (26) 口縁部小片で溝SD1出土の片口鉢19と胎土、色調とも似る。12世紀前半代の猿投窯産である。

二筋壺 (27) 肩部はあまり張らず丸みをもつ。胴部に二段の横位沈線(単線)をめぐらす。出土時は破碎していたが完形に復元できた。12世紀後半代の東山窯産である。

土師皿 (28・29) 28は口径15.0cmをはかる中形の皿である。表面は摩滅している。

溝SD3出土遺物 (30~40)

山茶碗 碗 (30~35) 30の体部は直線的で口縁端部を面取りする。底部は回転糸切りの後、ヘラ状の物で付けた痕跡(木目痕)が残る。13世紀前半代の瀬戸系産である。残りは底部の破片である。31はしっかりと高台が付けられ、ナデ調整により糸切り痕を消している。12世紀代の東山窯産である。32、33は高台の付け方が粗雑になっている。

甕 (36) 口縁部の小片で14世紀末~15世紀代の常滑産である。

三足鉢 (37) 底部小片で14世紀代の瀬戸産である。

羽釜 (38) 胴部小片で外面に平行タタキ目が残る。内面当て具痕をナデ消す。14世紀代か。

壺(瓶) (39) 小片で12世紀代。

摺鉢 (40) 内面のおろし目は10本1単位。15世紀代の美濃窯産である。

周濠出土遺物 (41~71)

山茶碗 碗 (41~55) 口縁部から底部まで存するもの1点(41)、底部が完存するもの2点(42・43)で他は底部小片である。41の体部は直線的であるが口縁部は強く外反する。12世紀代。42は厚い底部にしっかりと高台が付く。43の高台はしっかりと付けられている

表5 遺物観察表(1)

図 (図版)	器種	法量 (cm)		胎土・色調	形態・技法の特徴	出土位置
		口径 高台径	器高			
23-1 (16-1)	山茶碗、碗	16.5 7.5	6.1	密。灰色。	腰部の張りは少なく体部は直線に近い。口縁端部四ヶ所に指押えによる輪花をもつ。高台は方形をなし、砂粒痕がつく。体部は内外面ともヨコナデ調整。見込み底部はナデ調整。	4BGr. SK3
23-2 (16-2)	山茶碗、碗	17.1 7.5	5.5	密。灰色。	体部は丸みを帯びゆるやかな曲線で口縁部に至る。口縁端部三ヶ所に指押えによる輪花をもつ。高台は方形に近い三角高台。体部は内外面ともヨコナデ調整。底部はナデ調整。	4BGr. SK3
23-3 (16-8)	山茶碗、小皿	7.7 4.6 (底径)	2.0	密。砂粒多く含む。 明灰色。	底部は回転糸切の後、中央に指ナデをする。	4CGr. SK4
23-4 (16-9)	山茶碗、小皿	8.0 5.4 (底径)	1.9	粗。1mm大の砂粒 多く含む。 明灰色。	体部はヨコナデ調整。内部は3分の2程ナデ調整する。	4CGr. SK4
23-5 (16-10)	山茶碗、小皿	7.9 5.1 (底径)	2.0	粗。1~1.5mm大 の砂粒含む。 明灰色。	体部はヨコナデ調整。底部は回転糸切未調整であるが不明瞭。	4CGr. SK4
23-6 (16-11)	土師器、小皿	8.6 5.0	1.6	密。黄白色。	ナデ調整。	4CGr. SK4
24-7 (17-18-19-20)	鉄製品、鉄刀	— —	—		身大27.4cm、身巾3.4cm、棟巾0.9cm 茎巾 9.9cm、茎巾2.2cmをはかる。	4CGr. SK4
23-8 (16-3)	山茶碗、碗	15.3 7.0	5.6	粗。2~3mm大の 砂粒含む。 灰色。	高台は三角高台で、靱殻痕がつく。体部は内外面ともヨコナデ調整。底部はナデ調整。	4CGr. SK6
23-9 (18-23右)	山茶碗、碗	13.4 5.4	5.0	粗。3~5mm大の 砂粒含む。 灰青色。	高台は低くつぶれ、靱殻痕がつく。体部外面はヨコナデ調整。内面には自然釉付着。見込は指ナデ。底部は回転糸切り後、ヘラ状の物でつけた痕跡(板目痕)が残る。底部完存。	4DGr. SK9
24-10 (17-22)	土錘	— —	—	密。黄褐色。	現存長2.7cm。直径0.8cm。焼成不良。	4DGr. SK9
23-11 (17-23左)	山茶碗、碗	— 7.7	—	密。淡灰色。	見込はヨコナデ調整。底部は回転糸切未調整。体部内面に自然釉付着。高台に靱殻痕がつく。	5DGr. SK21
23-12 (18-24左)	山茶碗、碗	— 7.7	—	粗。1~3mm大の 砂粒多い。灰色。	体部内面にコテ痕。見込はナデ調整後指ナデ。底部は回転糸切り未調整。体部内面に自然釉付着。高台に靱殻痕がつく。底部完存。	4BGr. SD1 ①群
23-13 (18-24中)	山茶碗、碗	— 8.0	—	やや粗。白灰色。	体部外面はヨコナデ調整。見込はヨコナデ調整。布痕がつく。底部は糸切痕を消す。	4BGr. SD1 ②群
23-14 (17-12)	山茶碗、小皿	8.0 3.9 (底径)	2.0	密。1mm大の砂粒 少量含む。灰色。	体部はヨコナデ調整。底部はナデ調整	4BGr. SD1 ④群
23-15 (17-13)	山茶碗、小皿	8.4 5.6 (底径)	1.9	密。1mm大の砂粒 含む。灰色。	底部は回転糸切り未調整。	4BGr. SD1 ④群
23-16 (18-30 左下)	山茶碗、小皿	8.6 5.3 (底径)	1.6	密。灰色。	体部はヨコナデ調整。見込はナデ調整後、指ナデ。底部は回転糸切り未調整	4BGr. SD1 ④群
24-17 (19-31右)	片口鉢	— —	—	密。橙白色。	口縁部を指で押え片口をつくる。体部上半はヨコナデ調整、下半は横位ヘラケズリ未調整。焼成やや不良。	4BGr. SD1 ①群
24-18 (19-32右)	片口鉢	— —	—	粗。1mm大の砂粒 多く含む。灰色。	体部内面に自然釉付着。 高台は三角高台。	4BGr. SD1 ③群

表6 遺物観察表(2)

図 (図版)	器種	法量 (cm)		胎土・色調	形態・技法の特徴	出土位置
		口径 高台径	器高			
24-19 (19-31中)	片口鉢	— —	—	粗。2mm大の砂粒 多く含む。灰褐色。 断面灰黄色。	口縁端部に沈線。外面ヨコナデ調整。 内面には自然釉付着。	4BGr. SD1 ⑥群
20 (19-31左)	片口鉢	— —	—	密。1mm大の砂粒 少量含む。黄白色。	体部は内外面ともヨコナデ調整。	4BGr. SD1 ④群
21 (—)	瓦	— —	—	やや粗。1mm大の 砂粒多く含む。 ?	丸瓦。凹面はけずり。側面はナデ。端 面はけずり。	4BGr. SD1
23-22 (16-4)	山茶碗、碗	13.2 6.6 (底径)	5.0	密。砂粒含む。 灰青色。	体部は直線的で、口縁端部は尖り気味。 体部はヨコナデ調整。底部は回転糸切 未調整。約2分の1残存。	4EGr. SD2 ①群
23-23 (16-5)	山茶碗、碗	13.3 5.4	5.0	密。1mm大の砂粒 多く含む。 灰色。	体部は直線的で、口縁部は肥厚気味。 体部はヨコナデ調整。見込に指ナデ。 底部は回転糸切りの後、ナデ調整。 高台に靱殻痕多い。	4EGr. SD2 ①群
23-24 (18-24右)	山茶碗、碗	— 7.0	—	密。1mm大の砂粒 多く含む。淡青灰 色。	見込はヨコナデ調整の後、指ナデ。底 部は回転糸切り後、ヨコナデ調整。高 台はしっかりと付けられている。靱殻 痕多い。底部完存。	4EGr. SD2 ②群
23-25 (—)	山茶碗、碗	— 6.2	—	やや粗。灰色。	体部外面はヨコナデ調整。見込は仕上 げナデ調整。体部との痕にコテ痕。内 面に自然釉付着。底部は仕上げナデ調 整。高台に靱殻痕つく。	4EGr. SD2 ①群
24-26 (19-32左)	片口鉢	— —	—	粗。1mm大の砂粒 多く含む。灰色。	体部上半ヨコナデ調整、下半は横位ヘ ラケズリ未調整。	4EGr. SD2 ①群
24-27 (16-7)	二筋壺	10.4 8.5 (底径)	19.7	密。灰褐色。	口縁端部はやや外上方へ向き段をつくり 内面に凹線がめぐる。体部に二段の 横位沈線(単線)がめぐる。体部最下 部は横位ヘラケズリの後、ヨコナデ調 整。体部下半は、縦位のヘラケズリの 後、ヨコナデ調整。部分的に口縁部か ら底部にかけて自然釉付着。	4EGr. SD2
23-28 (—)	土師器、中皿	15.0 10.6	2.1	密。黄白色。断面 灰青色。	ナデ調整。手づくね。	4DGr. SD2
23-29 (—)	土師器、小皿	— 3.8 (底径)	—	密。橙色。		4DGr. SD2 ③群
23-30 (16-6)	山茶碗、碗	12.4 5.4	6.0	密。灰青色。	体部はヨコナデ調整。見込に指ナデ。 高台に靱殻痕多い。3分の2残存する が高台は3分の1がはがれている。	2DGr. SD3
23-31 (18-25左下)	山茶碗、碗	— 7.2	—	密。0.5mm以下の 砂粒混じる。灰色。	見込はナデ調整の後、指ナデ。底部は 薄手。高台に靱殻痕つく。	2DGr. SD3
23-32 (18-25右上)	山茶碗、碗	— 8.0	—	密。0.5mm以下の 砂粒混じる。淡白 灰色。	見込はヨコナデ調整の後、ナデ調整。 底部はナデ調整。高台に靱殻痕つく。	2DGr. SD3
23-33 (18-25右下)	山茶碗、碗	— 7.4	—	密。淡灰色。	底部は回転糸切り未調整。	2DGr. SD3
23-34 (—)	山茶碗、碗	— 7.0	—	粗。2~3mm大の 砂粒多く含む。灰 色。	体部は内外面ともヨコナデ調整。高台 に靱殻痕つく。	2DGr. SD3
23-35 (18-25左上)	山茶碗、碗	— 8.3	—	密。灰色。	見込はナデ調整。底部は回転糸切り未 調整。高台はしっかりと付く。	2DGr. SD3
24-36 (19-38右上)	甕	— —	—	密。1mm大の砂粒 含む。赤褐色。 断面灰青色。	内外面ヨコナデ調整。	2CGr. SD3
37 (19-37左下)	三足鉢	— —	—	密。灰青色。	体部外面ヘラケズリ未調整。内面ヨコ ナデ調整。底部糸切り未調整。	2DGr. SD3

表7 遺物観察表(3)

図 (図版)	品 種	法 量 (cm)		胎土・色調	形態・技法の特徴	出土位置
		口 径 高台径	器 高			
38 (19-37右上)	羽釜	— —	—	粗。1mm大の砂粒多く含む。外面灰青色。内面淡黄橙色。	外面は平行タキ未調整。 内面はナデ調整。	2DGr. SD3
39 (19-37右下)	壺(瓶)	— —	—	密。1mm大の砂粒少量混じる。 灰青色。	肩部小片。外面に自然釉付着。内面はヨコナデ調整。	2DGr. SD3
40 (19-38左下)	摺鉢	— —	—	密。褐色。断面黄白色。	体部は内外面ともヨコナデ調整。底部は回転糸切り未調整。	2DGr. SD3
23-41 (18-26右上)	山茶碗、碗	14.7 7.7	5.4	密。淡灰青色。	体部はヨコナデ調整。部分的に縦位ナデがはいる。底部は回転糸切り未調整。口縁端部に自然釉付着。	6DGr. 濠内
23-42 (18-27左下)	山茶碗、碗	— 7.8	—	密。1mm大の砂粒少量含む。	見込はヨコナデ調整。高台に靱殻痕多い。	4DGr. 濠内
23-43 (18-26左下)	山茶碗、碗	— 8.9	—	密。淡灰青色。	見込はナデ調整後、指ナデ。高台に靱殻痕多い。	6DGr. 濠内
23-44 (18-28左下)	山茶碗、碗	— 8.0	—	密。灰青色。	体部は内外面ともヨコナデ調整。高台は三角高台。精良なつくり。	5EGr. 濠内
23-45 (18-28中上)	山茶碗、碗	— 8.0	—	密。0.5mm以下の砂粒やや多い。 灰白色。	見込はヨコナデ調整。底部は回転糸切り未調整。しっかりした三角高台が付く。靱殻痕つく。	4ラインセクション第5層 濠内
23-46 (18-27左上)	山茶碗、碗	— 8.8	—	粗。砂粒のふき出しやや多い。 灰青色。	見込はナデ調整。 高台に靱殻痕つく。	4CGr. 濠内
23-47 (18-27右下)	山茶碗、碗	— 7.6	—	密。黄白色。	見込はヨコナデ調整。底部は回転糸切り未調整。高台に靱殻痕つく。	4DGr. 濠内
23-48 (18-27右上)	山茶碗、碗	— 8.0	—	密。1mm大白色砂粒混じる。赤褐色。	見込はヨコナデ調整。底部はナデ調整。高台に靱殻痕つく。	4EGr. 濠内
23-49 (18-28右上)	山茶碗、碗	— 9.1	—	粗。暗灰色。	砂粒のふき出し激しい。	5CGr. 濠内
23-50 (18-26右下)	山茶碗、碗	— 7.7	—	密。淡灰白色。	見込はヨコナデ調整後、指ナデ。底部はナデ調整。厚い底部。高台は低くつぶれているがしっかりと付けられている。靱殻痕つく。底部約2分の1残存。	6DGr. 濠内
23-51 (18-28左上)	山茶碗、碗	— 7.6	—	密。微細な黒色砂粒含む。	体部内面にコテ痕。見込はナデ調整。底部は回転糸切り未調整。高台に靱殻痕つく。	中央セクション 濠内
23-52 (18-28中下)	山茶碗、碗	— 8.0	—	密。淡灰色。	見込はナデ調整。しっかりした高台が付く。靱殻痕多い。体部内面に自然釉付着。	4ラインセクション第2層 濠内
23-53 (18-26左上)	山茶碗、碗	— 6.8	—	密。0.1mm大の黒色砂粒多い。 淡灰色。	体部内面にコテ痕。見込はナデ調整後、指ナデ。底部はナデ調整。しっかりした高台が付く。靱殻痕、砂粒痕つく。	6DGr. 濠内
23-54 (—)	山茶碗、碗	— 7.2	—	粗。1mm大の砂粒混じる。灰色。	見込は仕上げナデ調整。体部との境にコテ痕。底部は仕上げナデ調整。高台に靱殻痕つく。	6DGr. 濠内
23-55 (—)	山茶碗、碗	— 6.2	—	やや粗。0.5~1mm大の黒雲母多い。 灰色。	見込は仕上げナデ調整。底部は仕上げナデ調整。高台に靱殻痕つく。	濠内
24-56 (18-30右下)	山茶碗、小皿	8.6 3.8	1.9	粗。砂粒多く含む。 黄灰色。	体部はヨコナデ調整。底部につぶれた高台が付く。	4CGr. 濠内
24-57 (17-14)	山茶碗、小皿	8.4 5.6 (底径)	1.8	やや粗。微細な砂粒含む。灰黄色。	体部はヨコナデ調整。底部は回転糸切り未調整。	4DGr. 濠内
24-58 (17-15)	山茶碗、小皿	9.4 6.2 (底径)	1.8	粗。1~2mm大の砂粒多く含む。灰黄色。	体部はヨコナデ調整。	4DGr. 濠内

表8 遺物観察表(4)

図 (図版)	器種	法量 (cm)		胎土・色調	形態・技法の特徴	出土位置
		口径 高台径	器高			
24-59 (17-16)	山茶碗、小皿	7.7 4.9 (底径)	1.9	密。淡灰色。	体部はヨコナデ調整。見込はヨコナデ調整。底部は回転糸切り未調整。口縁端部外面に一部分自然釉付着。完形。	6DGr. 濠内
24-60 (18-30右上)	山茶碗、小皿	8.4 5.4 (底径)	2.0	粗。砂粒のふき出し多い。灰色。	底部は回転糸切り未調整。内面は自然釉付着。	5EGr. 濠内
24-61 (18-30左上)	山茶碗、小皿	8.4 3.7	1.8	粗。灰色。	内面に自然釉付着。	4CGr. 濠内
24-62 (19-33)	三筋壺	12.8 —	—	密。2mm大の砂粒多い。橙灰色。	胴部に複線の横位沈線がめぐる。	5D、5E Gr. 濠内
24-63 (19-36左)	有筋壺	— —	—	密。外面暗褐色。内面淡橙褐色。	胴部に複線の横位沈線がめぐる。下半部は縦位ヘラケズリの後、ナデ調整。内面ヨコナデ調整。	6DGr. 濠内
64 (19-36右)	有筋壺	— —	—	密。1mm大の砂粒混じる。橙色。	複線の横位沈線がめぐる。	4DGr. 濠内
65 (—)	壺(瓶)	— —	—	密。1~2mm大の砂粒少量混じる。外面茶色。内面淡橙白色。	内面に輪積み痕残る。	5DGr. 濠内
66 (19-34中下)	壺(瓶)	— —	—	密。内外面淡緑色。断面灰色。	小片。内外面に施釉。	中央セクション 5CGr. 第7層
24-67 (17-21)	陶丸	— —	—	密。灰白色。	直径 1.9cm。重さ約 9g。	4BGr. 濠内
24-68 (—)	土師器、小皿	— 4.4 (底径)	—	密。淡黄白色。	表面摩滅。	4DGr. 濠内
24-69 (—)	土師器、鉢?	— 7.1 (底径)	—	やや粗。1mm大の砂粒少量含む。淡橙白色。	外面ヘラケズリの後、ナデ調整。内面ナデ調整。	5DGr. 濠内
70 (—)	瓦	— —	—	密。0.5~1mm大の砂粒含む。灰色。	平瓦。凸面はけずり。凹面は縄叩き目。側面、端面はけずり。	4DGr. 濠内
71 (—)	瓦	— —	—	密。灰白色。	平瓦。厚さ2.7cm。凸面は縄叩き目。凹面は布目痕。	6DGr. 濠内
24-72 (18-29右上)	山茶碗、碗	14.0 7.4	5.0	密。1mm以下の砂粒少量混じる。灰色。	体部は内外面ともヨコナデ調整。見込はナデ調整の後、指ナデ。高台はしっかりと付けられている。靱殻痕多い。	濠内表土
24-73 (19-34右下)	山茶碗、碗	— 7.2	—	密。灰色。	見込はヨコナデ調整の後、ナデ調整。底部は回転糸切り未調整。高台に靱殻痕つく。	濠内旧表土
24-74 (18-29右下)	山茶碗、碗	— 6.1	—	密。淡灰色。	体部内面にコテ痕。見込はナデ調整。底部は回転糸切り未調整。高台に靱殻痕つく。体部内面に自然釉付着。	調査区北 掘乱溝。
75 (18-29左下)	山茶碗、碗	— 6.6	—	密。3mm大の白色砂粒少量含む。灰色。	見込はナデ調整。底部は回転糸切り未調整。高台に靱殻痕。	調査区北東 部表土
76 (18-29左上)	山茶碗、碗	— 7.0	—	密。灰白色。	見込はナデ調整の後、指ナデ。底部はナデ調整。高台に靱殻痕。	濠内旧表土
77 (18-28右下)	山茶碗、碗	— 8.0	—	密。黒色砂粒少量含む。灰色。	腰部はわん曲するが、体部は直線的。見込はナデ調整後、指ナデ。底部は回転糸切り未調整。内面に高台片が付着。高台に靱殻痕つく。	4E. 5D Gr. 掘乱
78 (19-35)	三筋壺	— —	—	密。0.5~1mm大の砂粒多く含む。褐色。	胴部下半は縦位ヘラケズリ後、ナデ調整。内面は輪積み後指ナデ。	濠内旧表土
79 (19-34右上)	摺鉢	— —	—	密。淡褐色。	外面ヨコナデ調整。内面ヨコナデ調整後おろし目を入れる	10 Gr. 表土
80 (19-34中上)	摺鉢	— —	—	密。淡褐色。断面黄色。	内面ヨコナデ調整後おろし目を入れる。底部回転糸切り未調整。	濠内掘乱

表9 遺物観察表(5)

図 (図版)	器種	法量 (cm)		胎土・色調	形態・技法の特徴	出土位置
		口径 高台径	器高			
81 (19-34左上)	摺鉢	— —	—	やや粗。0.5mm大の砂粒多く含む。褐色。	調整不明瞭。おろし目の数もはっきりしない。	調査区北東部表土
82 (19-34左下)	三足鉢	— —	—	密、灰色。	外面ヘラケズリ未調整。内外面に自然釉付着。	表土
83 (17-17)	土師器、小皿	7.9 4.0 (底径)	1.7	やや粗。0.5mm大砂粒多い。淡橙褐色。	手づくね。体部内面中程に段をもつ。	表土
84 (—)	土師器、小皿	9.0 4.8 (底径)	1.2	密。橙色。	手づくね。体部内外面ナデ調整。	旧表土
85 (—)	須恵器 坏身	— —	—	密。灰色。		表採
86 (—)	須恵器 坏蓋	— —	—	密。灰色。		北側攪乱溝

ものの低くつぶれている。42、43はいずれも12世紀前半代。44は三角高台である。12世紀初頭。すべて猿投窯産と思われる。特に42、43は鳴海地区と思われる。

山茶碗 小皿 (56~61) 54は痕跡程度の高台をもつ。56は口縁部を面取りする。いずれも12世紀代の猿投窯産である。

有筋壺 (62~64) 62は三筋壺で口縁部、胴部片で破碎した状態で出土した。胴部に複線の横位沈線がめぐる。13世紀初頭の東山窯産か。63、64は胴部に複線の横位沈線がめぐる。12~13世紀代の常滑窯産である。

壺(瓶) (65・66) 65は肩部小片。66は14世紀代の瀬戸窯産である。

陶丸 (67) 完形。

土師皿 (68) 小片。

土師器 (69) 底部片である。

瓦 (70・71) 平瓦小片。70は凹面に布目痕。71は凸面に縄目痕、凹面に布目痕が残る。

表土・旧表土・攪乱層出土遺物 (72~84)

山茶碗 碗 (72~77) 72は体部は直線的で口縁部も気持ち外反気味。12世紀後半代。73は高台は低いが丁寧に付けている。12世紀前半代。74~77も12世紀代と思われる。いずれも猿投窯産である。

三筋壺 (78) 胴部片で単線の横位沈線が3条めぐる。12~13世紀代の常滑窯産である。

摺鉢 (79~81) 79はおろし目9本1単位。80はおろし目5本1単位。いずれも14~15世紀代の常滑窯産である。

三足鉢 (82) 14~15世紀の瀬戸窯産である。

土師皿 (83・84) 84は口縁端部を面取りする。

須恵器 (85・86) 85は坏身の高台小片、86は坏蓋小片である。

(伊藤)

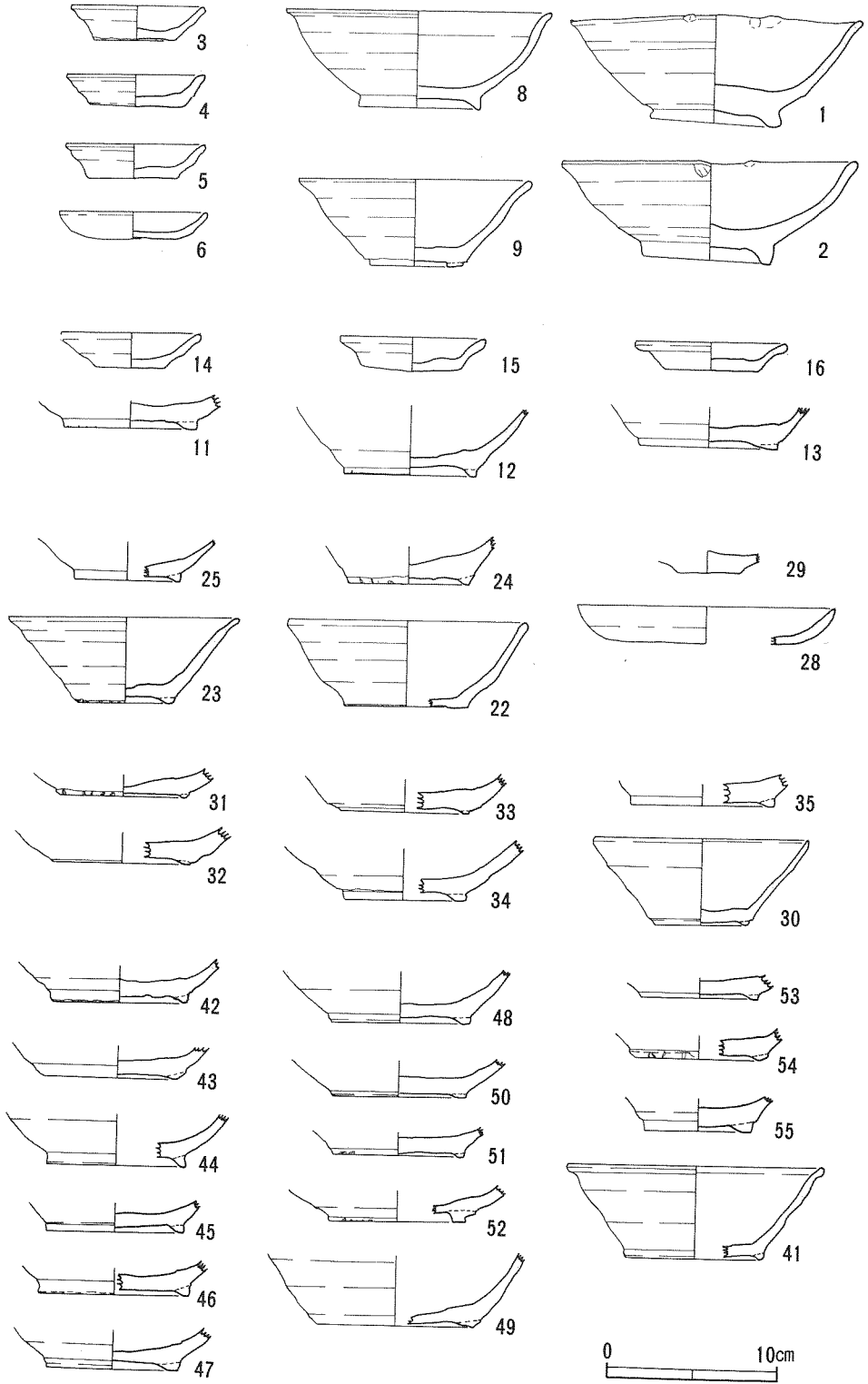


图23 遗物实测图(1)

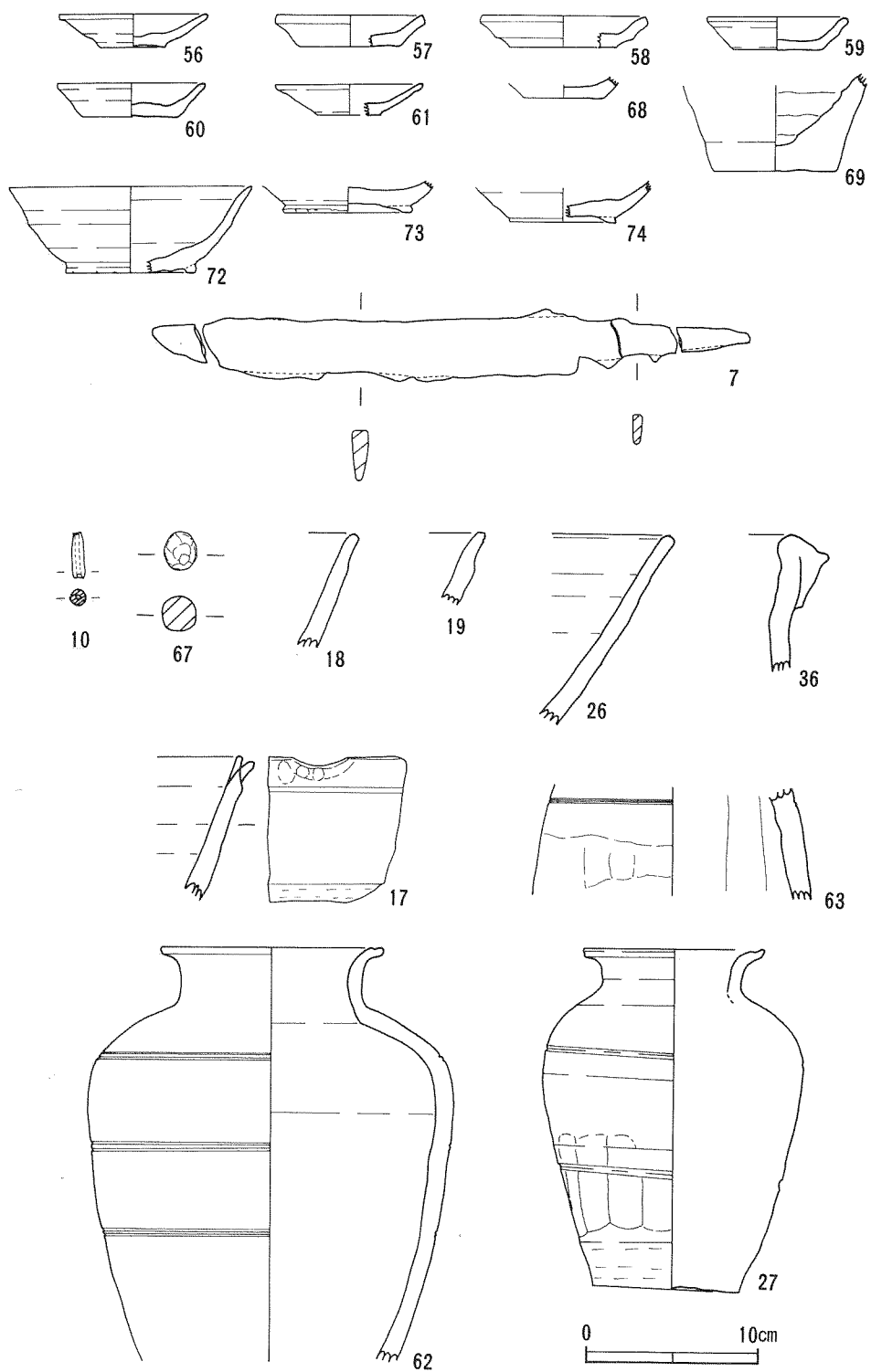


图24 遗物实测图(2)

V 参考資料

1. 古記録にみる石室内出土遺物について

白鳥古墳の埋葬施設は、現在までに発掘調査されたことはない。しかし、江戸時代末期、自然災害による偶然の機会に、埋葬施設が露呈し、石室と副葬品の存在が確かめられている。石室からは、須恵器・馬具・装身具・武器等が出土し、記録に留められた後、再び埋め戻されている。記録として詳細な写図が残され、おおよその寸法が付記されている。こうした古写図については、三渡俊一郎氏が昭和58年に紹介と論考を行っている^(註2)。本編では、写図に遺された副葬品の姿を紹介し、白鳥古墳を考える上での一助としたい。

石室が存在したのは後円部で、天保8(1837)年8月14日、暴風雨のため吹き倒された樹木の根跡から露呈したと記されている。岡田敬の記載によれば、①長持形、②四面石垣組、③5枚の蓋石で覆う、との記述があり、長さ3.6m、幅1.2～1.5m、高さ1.5～1.8mを測るとする^(註3)。

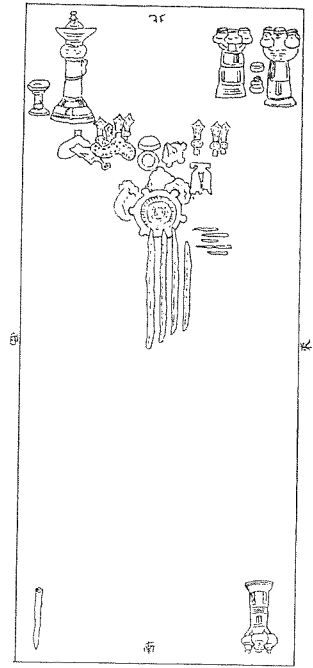


図25 法持寺所蔵石室写図

副葬品には、須恵器・馬具・装身具・武器等がある。石室写図(図25)をみると、鈴

須恵器

No.	器種	数量	口径 (cm)	高さ (cm)	
1	筒形器台	1	23.8 (7寸2分)	52.8 (1尺6寸)	鳥形裝飾
2	有蓋壺・蓋	1		8.3 (2寸5分)	鳥形鈕
3	〃・壺	1	9.9 (3寸)	21.5 (6寸5分)	
4	無蓋高坏	2	13.2 (4寸)	12.5 (3寸8分)	透孔3個
5	脚付四連壺	2	各 8.9 (2寸7分)		長方形透孔、2段
6	壺付蓋(?)	1	11.5 (口周1尺1寸)	11.6 (3寸5分)	子持壺の親壺の蓋か
7	蓋	7	9.6 (2寸9分)	3.3 (1寸)	
8	脚付子持埴	2	親 9.9 (3寸) 子 5.0 (1寸5分)	46.2 (1尺4寸)	長方形透孔、2段

表10 写図・遺物一覧表(1)

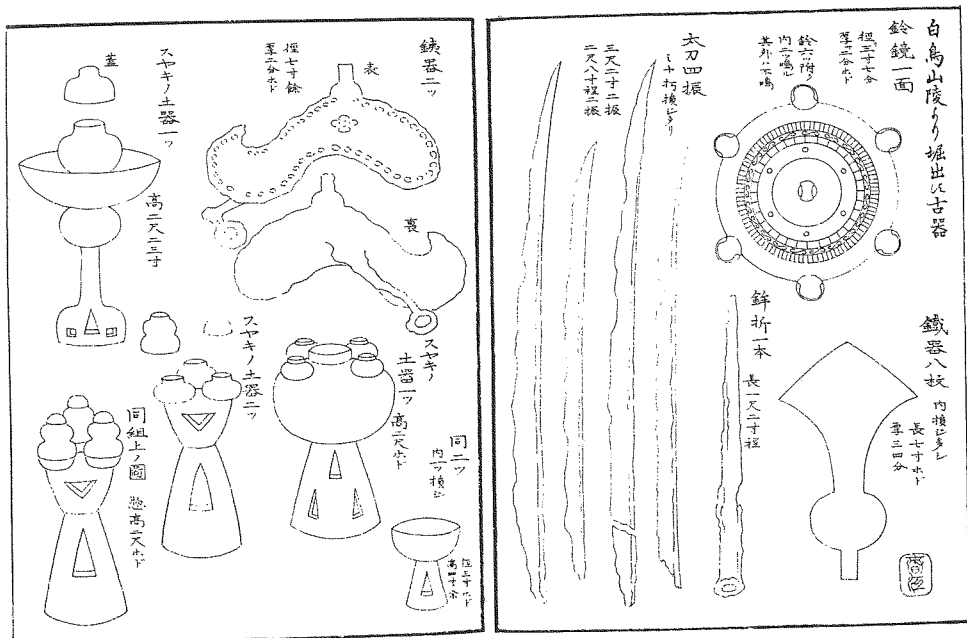


図26 岡田敬写図

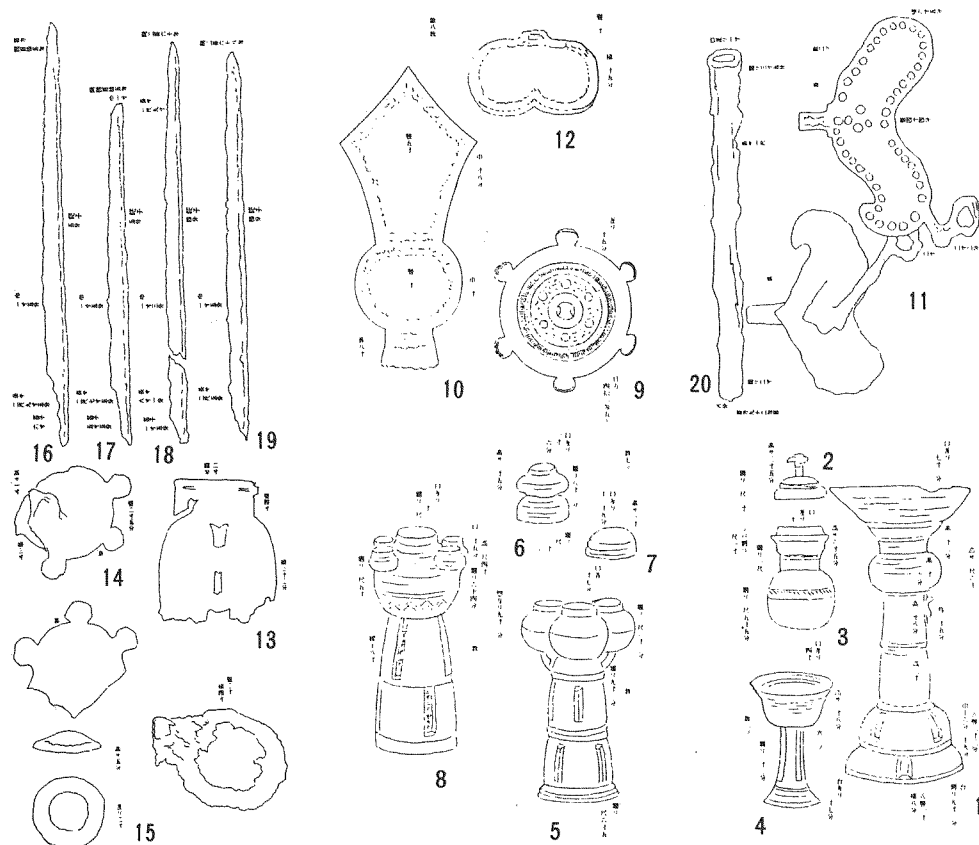


図27 法持寺所蔵写図

鏡・装身具・馬具・武器類

No.	種類	数量	大きさ (cm)
9	六 鈴 鏡	1	直径11.6 (3寸5分)
10	劍 菱 形 杏 葉	8	全長26.4 (8寸) 最大幅12.54 (3寸8分)
11	f 字 形 鏡 板	2	全長21.5 (6寸5分) 最大幅14.5 (4寸4分)
12	鏡 板(?)	1	全長11.6 (3寸5分) 最大幅 3.3 (1寸)
13	双魚形腰佩(?)	1	残存長13.2 (4寸) 最大幅10.9 (3寸3分)
14	雲 珠(?)	1	直径 9.9 (3寸) 長さ 3.3 (1寸)
15	不 明	1	直径 6.6 (2寸) 高さ 1.7 (5分)
16	直 刀	1	長さ 117.2 (2尺9寸5分+6寸) 茎 刃部幅 5.0 (1寸5分)
17	〃	1	〃 108.9 (2尺7寸5分+5寸5分) 茎 〃 5.0 (1寸5分)
18	〃	1	〃 94.4 (2尺7寸1分+1寸5分) 茎 〃 4.3 (1寸3分)
19	〃	1	〃 67.7 (2尺5分) 〃 5.0 (1寸5分)
20	鉄 銚(?)	1	長さ 33 (1尺) 茎口径 3.3 (1寸)

(註)

1. 複数ある器種の寸法は、代表する1例のみについて記されている。
2. 尺の換算は
1寸=3.3cm
1尺=33cmとする

表11 写図・遺物一覧表(2)

鏡・馬具類・鉄刀が石室中央部北寄りに、器台や装飾須恵器類と鉄銚(?)が四隅から出土しているのが判る。写図のうち法持寺所蔵のものは、彩色されており、図があるのみで説明文はついていない。^(註4) 個々の遺物について、かなり詳細なスケッチがあり、おおよその寸法が付記されている。とくに六鈴鏡や装飾須恵器類は、よく観察されている。

副葬品の示す年代観は、おおむね5世紀後半から6世紀前半の間で抑えられると思われる。詳細にスケッチされた装飾須恵器の類をみる限り、6世紀初頭と考えるのが妥当であろうか。古写図であるため、細部の検討には無理があるが、埋葬施設の発掘調査が行われていない現在では貴重な記録といえよう。

(木村)

註1 法持寺所蔵のもの他、岡田敬、羽田敬雄、植松茂岳らの記事・写図がある。

註2 三渡俊一郎 1983 「名古屋市熱田白鳥・断夫山古墳の前後関係について」『古代学研究』99

註3 岡田敬 嘉永6(1853)年 『尾張名所図会附録』(愛知県郷土資料刊行会 昭和48年復刻)

註4 高木鉞蔵 1941 「法持寺蔵白鳥御陵出土品写生帖」および高坂稔積 1941 「法持寺蔵白鳥御陵出土品写生帖模写」『尾張の遺跡と遺物』第27号

2. 館収蔵の埴輪

最近になって当資料館に寄贈あるいは発掘収蔵された埴輪のうち、未報告の物を選んで

この機会に簡単に紹介しておきたい。本報文中の白鳥古墳出土埴輪と地理・時間的に近接し、なおかつ製作技法等の対照も容易となる内容である為、尾張地域の埴輪を理解する上で便宜を計れるものと思う。

(1) 断夫山古墳 (図29~32、表12~14) 熱田区旗屋町1014 (文献1)

断夫山古墳は熱田台地の南端近くの西縁に位置する東海地方最大規模の前方後円墳である。墳丘の規模は全長 151m、後円部は直径80m・高さ13m、前方部は幅116m・高さ16mを測る。墳丘西側のくびれ部に造り出しを有し、周濠の存在が想定されている。墳丘後円部には所々に段が認められ、三段築成が想定されているようであり、河原石による葺石もかつて露出していたと言う。昭和の初め頃には後円部南西の一段目に円筒埴輪が巡り、くびれ部にも露出していたと言う。

今回本書に掲載することのできた埴輪は

(1) のみが寄贈品で、提供者の言われるには、昭和55年頃に造り出し部のやや上方

で(図28参照)直立した状態で露出していたという。なお、すぐそばには赤彩された埴輪もあったとのことである。(2~63)の埴輪と(64~65)の須恵器は、昭和61年11月に赤塚次郎氏の御協力を得て館職員が現地に赴き採集してきた物の一部である。これは、前記提供者がかつて本墳で拾い集めたものを改めて一括投棄したものであることが判明している。

採集遺物の大多数は円筒埴輪で占められており、口縁部で50点(47個体分)、総数でコンテナケース約2箱を数える。他には朝顔形埴輪5点(少なくとも2個体以上)、形象埴輪2点、須恵器2点等がある。いずれも黒斑が認められないことから窯焼成によるものと考えられる。

円筒埴輪 (図29~32、表12~13)

全形を伺い知ることのできるものは唯一1点(1)のみである為、これを除いたものは各部位ごとに整形技法上の特徴を主として簡単に紹介しておきたい。

(1)の円筒埴輪は残存しているのが突帯6条までと口縁部の一部であり、胴部中央から上部の大半を欠失している。推定高約 116cm、底部の長径約40cmを測り、上部に向かう



図28 断夫山古墳埴輪出土位置図

につれ徐々に広がり、口縁部では推定で長径約62cmになるものと思われる。器壁の厚さは多少の凹凸がある為に、1.0～1.5cmと幅をもち、粘土紐の輪積みは平均して数cmごとのようである。胴部第3段を境にして輪積痕が上下逆傾している。2分割倒立技法（味美ボタン）（文献2）の典型例である。横断面形が楕円で片面が淡茶褐色と生焼け気味であることから、窯内での焼成時に焼け歪んだものと考えられる。突帯は全部で8条を数えることが推定され、突帯間の幅は10cm前後と比較的狭く設定されている。その形状はヨコナデ調整によって中央を若干くぼませるものの、厚みの薄い（約1cm）比較的整った台形を呈する。透孔は第2段と第4段に2個一対で180度相対して円形に穿たれている。第6段にもあったものと思われる。器面の調整は口唇部と底面はヨコハケ、外面は一次調整にタテハケ、二次調整にヨコハケを基調とする。部分的には二次調整の後にタテハケ（第1・6段）や、ナナメナデ（口縁部に5～7mm幅1条、第5段に3～6mm幅1条）、タテナデ列（第4段に1～2cm間隔で幅5～7mm）等の施される場合がある。突帯第2条から第3段までは平行タタキ（条間1～2mm）が各調整過程で顕著に認められる。輪積痕の逆傾する第3段では、一次調整の前後及び二次調整後の各過程で部分的に平行タタキが施される為にほぼ全面にタタキ痕を認める。第2段では二次調整後に行なわれ、一部突帯第2条にまで及んでいる。基部端部では約2cmの幅でヨコナデ調整が認められる。突帯第1条と第3条の間には5重の細燃紐痕を残す。上から見て右回転に巻き付けられている。内面調整はヨコハケとヨコナデを基調としているが、部分的にヨコハケの後タテハケを用いる箇所もある。口縁部と第1・2段の内面である。突帯第1条から第4条の間では指頭成形痕を良くとどめており、細かい凹凸が激しい。ハケ目の密度は1cm当り5～7本で統一されている。

口縁部（2～20）（図29～30、表12）

合計49点、46個体分ある。ここでは主として口唇部の調整・形態の在り方で以下の6種に分類できる。

1類（2～4） 低平な突帯が端部に付けられるものである。合計3点ある。突帯の調整にヨコナデ（2）とハケ目調整（3）の別がある。（3）の突帯の下端では棒状具によるヨコナデが加えられており、事更に境を明確にしている。

2類（5～6） 強いヨコナデ調整によって先端が尖るものである。合計2点のみである。（5）では粘土のはみ出しが認められる。

3類（7～8） 緩く外反するものである。合計2点のみである。2点とも口唇部の調整はヨコナデを用いるが、（7）の場合は極端に強く、中央がくぼみ外側にはみ出す形となっている。ハケ目の密度も相当細かく、1cm当り8～20本を数える。

4類（9～11） 口唇部が比較的強いヨコナデ調整によって浅くくぼむものである。合

計13点ある。

5類 (12~14・16~20) 口唇部がヨコナデ (12~14・16) あるいはヨコハケ調整 (18~20) によって平滑になるものである。合計17点ある。

6類 (15・17) 口唇部がヨコナデ調整によって丸味をもつものである。合計10点ある。5類との差はあまり明確でないものが多い。

突帯の形状 (21~32) (図30~31、表12~13)

ここに代表的なもの12点を挙げた。突帯貼り付け時のヨコナデ調整の強弱によって若干形状を異にする。大きさは幅2cm・高さ1cm前後が一般的であるが、(26・27)のように極端に小さいものも含まれている。

1類 (21) 低平で断面形が長方形を呈するものである。1点のみ認められる。

2類 (22~25・28・31・32) 比較的突出し、断面形がM字状に近いものである。最も一般的な形状である。中には(28)のように、上下端を極端に強くヨコナデ調整する為によりかなり変形するものもある。

3類 (26・27・29・30) 比較的low平で、断面形は側面で若干くぼむものの、台形を呈するものである。

ハケ目 (21~35) (図30~31、表12~13)

ハケ目の密度によって概ね3分類できる。

1類 (28~35) 1cm当り3~4本程度の密度の粗いものである。数は相当に限られる。

2類 (21・22・24・26・27) 1cm当り5~7本程度の密度のものである。最も一般的なものである。

3類 (23・25) 1cm当り8本を超す密度の細かいものである。最も数の少ないものである。

透孔 (27・36~39・43・48・49・52) (図30~31、表12~13)

透孔の残存しているのは9点のみである。小破片ばかりである為により設定される位置は明確でないものの、その形状は円形を呈するようである。唯一(39)のみは隅丸の方形に近い形状を呈するようである。これは単に透孔を穿つ際、偶然ヘラ削りの方向が直線的に動いたにすぎず、その後の整形が略されたものと考えられる。

傷・サイン (40~50) (図31、表13)

器壁外面に傷あるいはサインの認められるものが11点ある。偶然にして傷として痕跡を残すものと、意図的なもの(サイン)との区別は難しい。

1類 (40~43) 棒状具による比較的幅広(3~5mm)の横線を有するものである。

2類 (44・48) ヘラ状具による3本一対の沈線を有するものである。

3類 (45~47・49・50) 棒状具による弧状の沈線を有するものである。

この他に平織の布目圧痕を突帯上に偶然残すもの (28) が1点ある。

赤彩された円筒埴輪 (51~55) (図31、表13)

赤彩されている円筒埴輪は合計43点ある。その内で硬質のものは4点のみで、圧倒的に軟質の場合が多い。内面まで赤彩されているものは2点認められる。

成形技法 (56・57) (図32、表13)

通常の場合、粘土紐の積み上げは途中必要の都度乾燥の為の休止を必要としながらも、順次積み上げられ成形される。例外として、(56・57)のように輪積み痕が逆傾する場合があります。粘土紐の積み上げの途中で円筒を転倒させ、その上に改めて積み上げる2分割倒立技法 (味美パタン) (文献2) が確認できる場合がある。

調整技法 (58・59) (図32、表13)

器面調整は外面一次調整にタテハケ、二次調整にヨコハケを用いるものが一般的である。少数例ではあるが、(58・59)のように二次調整後に平行タタキ (条間1~2mm) が施される場合がある。その場合、内面の当て具痕はヨコナデあるいはヨコハケ調整によって綺麗に掻き消されているようである。底部調整は底部片が1点としてない為に確認できない。内面調整はヨコ方向のハケあるいは指頭によるナデが用いられている。

朝顔形埴輪 (60・61) (図32、表13~14)

合計5点ある。少なくとも2個体分を数える。いずれも口縁部の破片で、外面に赤彩が認められる。全体の形状は小破片である為に明確にし難いものの、口縁部の形状は緩く弧を描いて外反するようである。焼成は皆軟質のものばかりである。器面調整は口唇部にヨコナデ、外面一次調整にタテハケ、二次調整にヨコハケ、内面にヨコハケが用いられる。

形象埴輪 (62・63) (図32、表14)

2点のみ採集されている。(62)は壺形埴輪の突帯部分であろうか。外面調整は突帯の側面のみヨコナデで、他はハケが用いられ、胴部と突帯の境界には最終調整としてヨコナデが用いられる。内面は指頭によるヨコナデのみが認められる。焼成は堅緻である。(63)は小型の楕形埴輪の側縁部片と思われる。ヘラ描き沈線による綾杉文が描出されている。全体に摩滅しており調整等は不明である。焼成は軟質である。

須恵器 (64・65) (図32、表14)

2点のみ採集されている。(64)は甕の胴部片であろうか。外面調整は平行タタキ (条間1.5~2mm) の後、弧状の細条線1条が加えられている。内面はヨコナデ調整である。

(65)は透孔を穿った脚台部の破片である。外面にはクシ描波状文 (8~9本/cm) の後、縦位の平行沈線 (5mm間隔) が施されている。内面はヨコナデ調整である。

表12 遺物観察表(1)

挿図No.	遺跡名	出土地点	種類	部位	整形の特徴	胎土・焼成・色調	備考
29-1	断夫山古墳	図参照	円筒	口縁から胴部中央にかけて欠失	外：タテハケのちヨコハケのちタテキ及びナメハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ・ヨコハケ・底面：ヨコハケ・内：ヨコナデあるいはナメハケ	密・白色粒及び白色縞含，良好・堅緻・片面やや不良・やや軟，暗灰褐色・片面淡茶褐色	横断面楕円突帯・透孔・タテキ・倒立
30-2	〃	表採	〃	口縁	外：ヨコナデ及びヨコハケ，口唇：ヨコナデ内：ヨコハケ	密・白色粒含，良好，淡黄褐色	突帯
3	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ，突帯下端：棒状具によるヨコナデ 口唇：タテハケ，内：ヨコハケ	密・白色粒含，良好，淡橙褐色	突帯
4	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケ？ 口唇：ヨコナデ？ 内：ヨコナデ？	密・白色粒含，やや不良・軟，淡黄褐色	突帯，全体にマメツ
5	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケ，口唇：ヨコナデ 内：ヨコハケ	やや粗・白色粒含，良好，淡灰色	
6	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケ，口唇：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや粗・白色粒含，良好，淡黄褐色	
7	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ，口唇：ヨコナデ 内：ヨコハケ	密・白色縞含，良好・堅緻，暗灰褐色	
8	〃	〃	〃	〃	外：タテハケ，口唇：ヨコナデ 内：ヨコハケ及びヨコナデ	やや粗・白色粒含，良好，淡灰褐色	
9	〃	〃	〃	〃	外：タテハケ，口唇：ヨコナデ 内：ヨコハケ	やや粗，良好・堅緻，暗灰色	
10	〃	〃	〃	〃	外：ナメハケのちヨコハケ，口唇：ヨコナデ 内：ナメハケのちヨコナデ	密・白色粒含，良好・堅緻，淡灰白色	
11	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ，口唇：ヨコナデ 内：ヨコハケ	密・良好・堅緻，淡灰色	
12	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ，口唇：ヨコナデ 内：ヨコハケ	やや粗・白色粒含，良好，淡黄褐色	
13	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ，口唇：ヨコナデ 内：ヨコハケ	密・白色粒含，良好・堅緻，淡黄灰色	
14	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ，口唇：ヨコナデ 内：ヨコハケ	やや粗・白色粒含，不良・軟，淡黄褐色	
15	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ，口唇：ヨコナデ 内：ナメハケのちヨコハケのち部分的にナメハケ	やや粗，やや不良・やや軟，淡灰褐色	口唇部マメツ
16	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ，口唇：ヨコナデ 内：ヨコハケ	密・良好・堅緻，暗灰褐色	
17	〃	〃	〃	〃	外：タテハケ，口唇：ヨコナデ 内：ナメハケ	密，良好・堅緻，灰褐色	
18	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ，キズあるいは棒状具による沈穢！ 口唇：ヨコハケ 内：ヨコハケ	やや粗，良好・堅緻，暗茶褐色	
19	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケ，口唇：ヨコハケ 内：ヨコナデ	密・白色粒含，良好，淡黄褐色	
20	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ，口唇：ヨコハケ 内：ヨコナデ	密・良好，淡黄褐色	
21	〃	〃	〃	胴	外：ヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケ	粗・白色縞含，良好，淡黄褐色	
22	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：指頭整形及びヨコハケ	やや粗・白色縞含，	
23	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコナデ	密・白色縞含，良好，淡橙褐色	
24	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケのち部分的にタテハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケのちタテナデ	やや粗・白色粒含，良好，淡青灰色	
25	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケのちヨコナデ	密・白色縞含，良好・堅緻，青灰色	
26	〃	〃	〃	〃	外：タテハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：？	密・白色粒及び白色縞含，やや不良・軟，淡橙褐色	全体にマメツ
27	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：？	密・白色粒及び白色縞含，やや不良・軟，淡橙褐色	全体にマメツ，透孔
31-28	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコナデ	密・白色縞含，良好，黄褐色	突帯に布目疔痕
29	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコナデ及びタテナデ	やや粗，良好・堅緻，暗灰色	
30	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコナデ及びタテナデ	粗，良好，淡黄褐色	

表13 遺物観察表(2)

挿図No.	遺跡名	出土地点	種類	部位	整形の特徴	胎土・焼成・色調	備考
31—31	断夫山古墳	表探	円筒	胴	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコナデ及びヨコハケ	粗，良好，淡黄褐色	
32	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケのちヨコナデ	密・白色縞含，良好・堅緻，暗褐色	31と同一個体
33	〃	〃	〃	〃	外：タテハケ 内：ヨコナデ？	密・白色縞含，良好・堅緻，淡灰褐色	
34	〃	〃	〃	〃	外：タテハケ 内：ヨコナデ	やや粗，良好・堅緻，暗灰褐色	
35	〃	〃	〃	〃	外：タテハケ 内：ヨコナデ	やや粗，良好・堅緻，暗灰色	
36	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケのち部分的にタテハケ 内：ヨコハケ	密・白色縞含，不良・軟，暗黄褐色	透孔
37	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケ	やや粗，良好，淡黄褐色	透孔
38	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：タテナデ	密・良好，淡黄褐色	透孔
39	〃	〃	〃	〃	外：タテハケ 内：タテハケ及びヨコナデ	密・良好，淡灰褐色	透孔
40	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ，沈線2 内：ヨコナデ及びヨコハケ	密・良好・堅緻，淡灰褐色	サイン？
41	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ，沈線1 内：ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含，良好，淡茶褐色	サイン？
42	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ，沈線3 内：ヨコハケ及びヨコナデ	粗，やや不良・軟，淡黄褐色	キズ？
43	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ，沈線2 内：ヨコハケ及びヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含，良好，堅緻，暗褐色	サイン？
44	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ，沈線3 内：ヨコハケ及びヨコナデ	密，良好・堅緻，淡黄灰色	サイン？
45	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ，沈線1 内：ヨコハケ	密・良好・堅緻，暗灰色	サイン？
46	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ，沈線1 内：ヨコハケ及びヨコナデ	やや粗・白色粒及び白色縞含，良好，淡茶褐色	サイン？
47	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ，沈線1 内：ヨコハケ	密・良好，乳白色	サイン？
48	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ，沈線3 内：ヨコナデ？	密，良好・堅緻，淡灰褐色	サイン？，透孔
49	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ，沈線1 内：ヨコハケ	密・白色縞含，良好，淡橙褐色	サイン？，透孔
50	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ，沈線1 内：ヨコハケ	密・良好，乳白色	サイン？，透孔
51	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケ	密・良好，淡黄褐色	外面赤彩
52	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケ及びヨコナデ	密，良好，淡黄褐色	外面赤彩，透孔
53	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含，やや不良・軟，淡黄褐色	外面赤彩
54	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ及びヨコナデ	密・白色粒含，良好・堅緻，淡赤褐色	外面赤彩
55	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケのち部分的にタテハケ 内：ヨコハケ	密・やや不良・軟，淡赤褐色	外面赤彩
32—56	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ナナメナデ	密・白色縞含，良好・堅緻，淡黄褐色	倒立
57	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコナデ	密・白色粒含，良好，淡黄褐色	倒立
58	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケのちタタキ 内：ヨコハケ及びヨコナデ	密・白色縞含，良好・堅緻，淡茶褐色	タタキ
59	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケのちタタキ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含，良好，淡黄褐色	タタキ
60	〃	〃	朝顔	口縁	外：タテハケのちヨコハケ，口唇：ヨコナデ 内：ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含，やや不良・軟，淡茶褐色	外面赤彩

表14 遺物観察表(3)

挿図No.	遺跡名	出土地点	種類	部位	整形の特徴	胎土・焼成・色調	備考
32-61	断夫山古墳	表採	朝顔	口縁	外：タテハケのちヨコハケ、口唇：ヨコナデ 内：ヨコハケ	密・やや不良・軟、淡茶褐色	外面赤彩
62	〃	〃	壺	胴	外：タテハケのちヨコハケのちタテハケ、ヨコナデ、ヨコハケ 内：ヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含、良好・堅緻、淡灰褐色	全体にマメツ
63	〃	〃	桶	〃	外：？、ヘラ描沈線による綾彩文 内：？	密・やや不良・軟、淡黄褐色	全体にマメツ
64	〃	〃	須臾器	〃	外：タタキ、沈線1 内：ヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含、良好・堅緻、灰色	
65	〃	〃	〃	〃	外：クシ描波文の後、縦位の平行沈線 内：ヨコナデ	密・良好・堅緻、暗灰色	方形の透孔
66	高蔵遺跡	包含層	円筒	〃	外：タテハケのちヨコハケのちタタキのちタテクシ 内：放射状の当具痕のちヨコナデ	密・白色縞含、良好・堅緻、暗青灰色	外面一部自然釉
67	田紫川遺跡	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコナデ	密・白色縞含、良好・堅緻、淡黄褐色	
68	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコナデ	密・白色縞含、良好・堅緻、淡茶褐色	
69	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色縞含、良好・堅緻、青灰色	
70	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・不良・軟、淡黄褐色	70~72 同一個体？
71	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコナデ	密・不良・軟、淡黄褐色	
72	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコナデ	密・不良・軟、淡黄褐色	

2. 高蔵遺跡 (図32、表14) 熱田区夜寒町70番地 (文献3・4)

弥生時代前期から鎌倉時代に至るまでの遺物を混在する包含層中で検出されている。6点の円筒埴輪の胴部片が出土しているが、内1点報告洩れがあったので、この場を借りて報告する。

外面調整は一次調整にタテハケ (7~8本/cm)、二次調整にヨコハケ (6~7本/cm) を用い、その後平行タタキ (条間1~2mm) を加える。さらにはタテクシの後ヨコクシによる条線 (条間2~3mm) を施す。内面は指頭によるヨコナデが十分でない為に凹凸が著しく、放射状の当て具痕を残す。焼成は堅緻で、外面の一部に自然釉が付着している。

3. 旧紫川遺跡 (図32、表14) 中区大須一丁目若宮大通 (文献5)

弥生時代後期から鎌倉時代に至るまでの遺物を混在する包含層中で検出されている。

6点の円筒埴輪の胴部片が出土している。外面調整は一次調整にタテハケ、二次調整にヨコハケを用いる。内面はヨコナデあるいはヨコハケ調整である。突帯はM字のつぶれた形状を呈し、幅1.5cm・高さ0.5cm前後の大きさである。(野澤)

文献1 愛知県教育委員会 1974 『重要遺跡指定促進調査報告』

2 赤塚次郎 1983 「尾張としてはにわ製作」 『考古学の広場』第1号

3 名古屋市教育委員会 1983 『昭和57年度埋蔵文化財発掘調査概要報告書』

4 名古屋市教育委員会 1985 『熱田区・白鳥古墳』

5 名古屋市教育委員会 1986 『旧名古屋城下町遺構発掘調査概要報告書(V)』

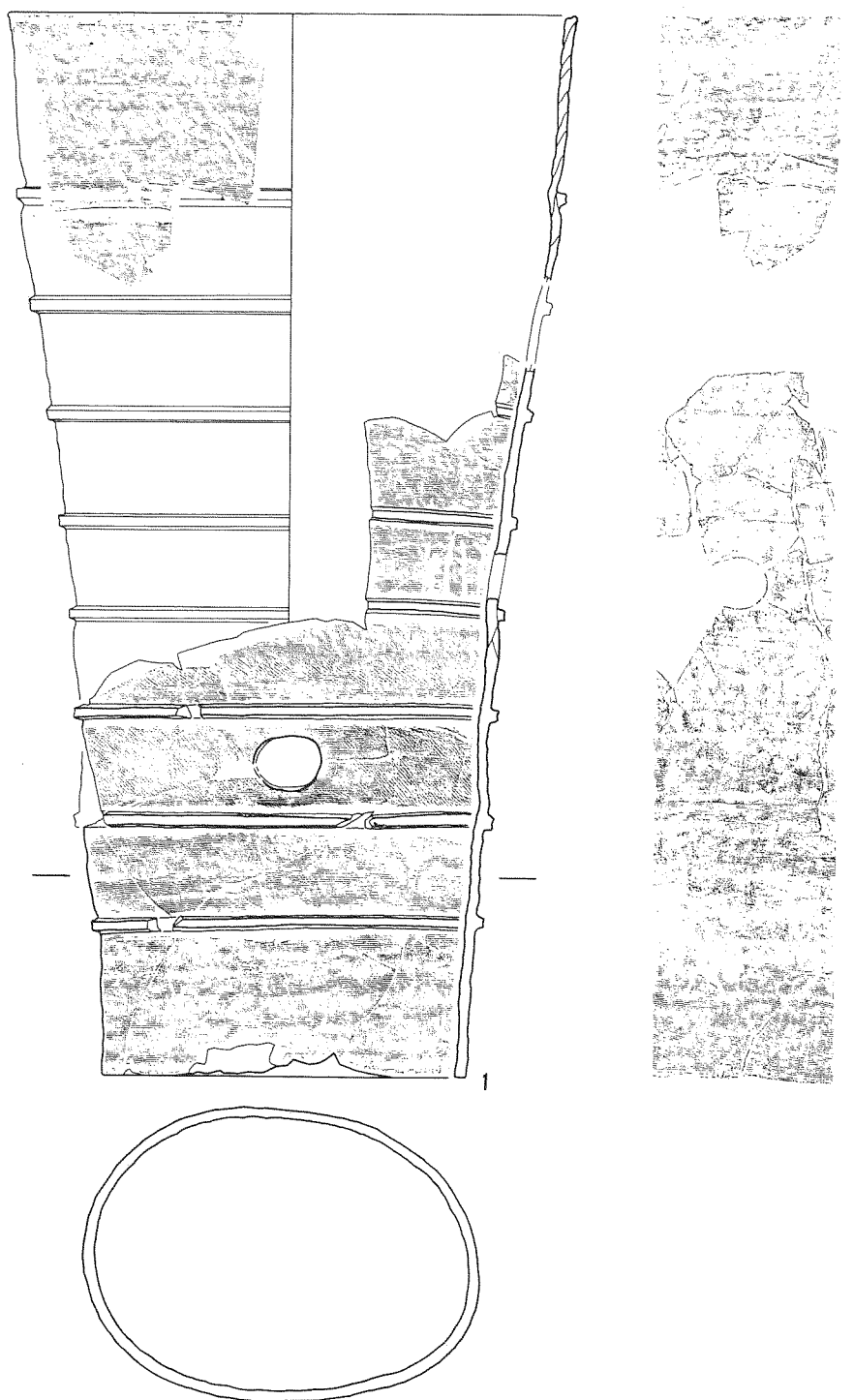


图29 遺物実測図(1)

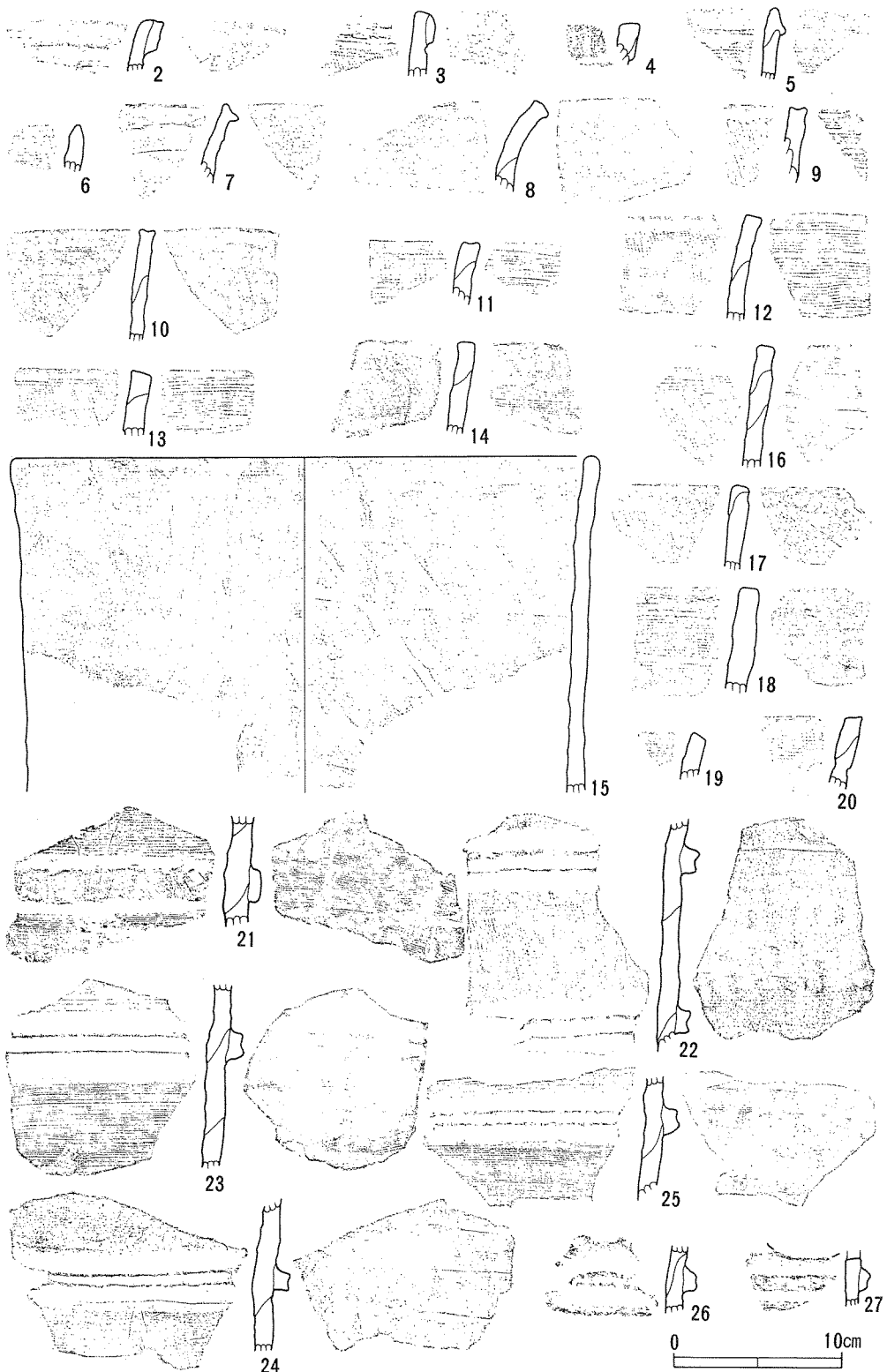


图30 遗物实测图(2)

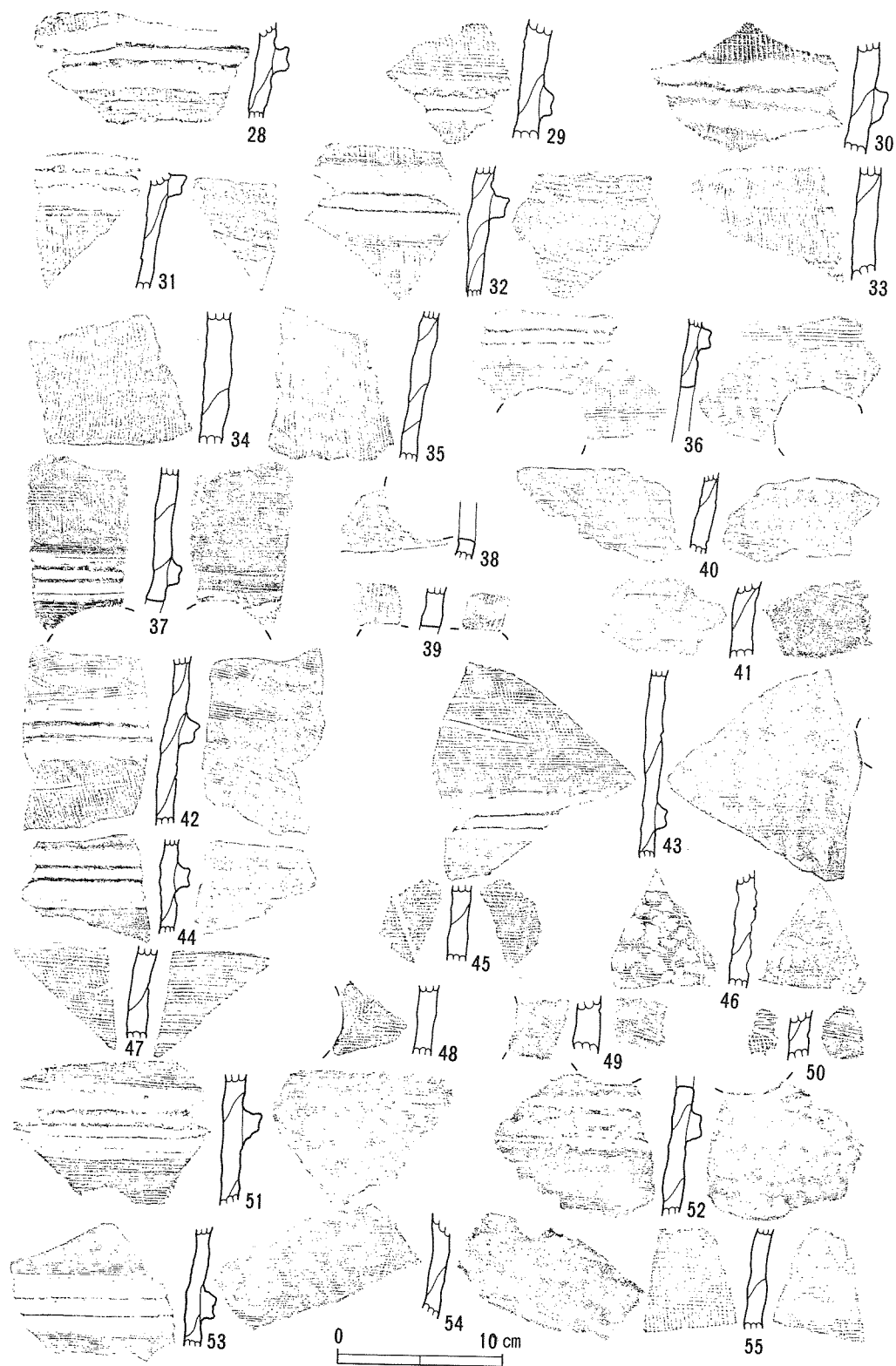


图31 遗物实测图(3)

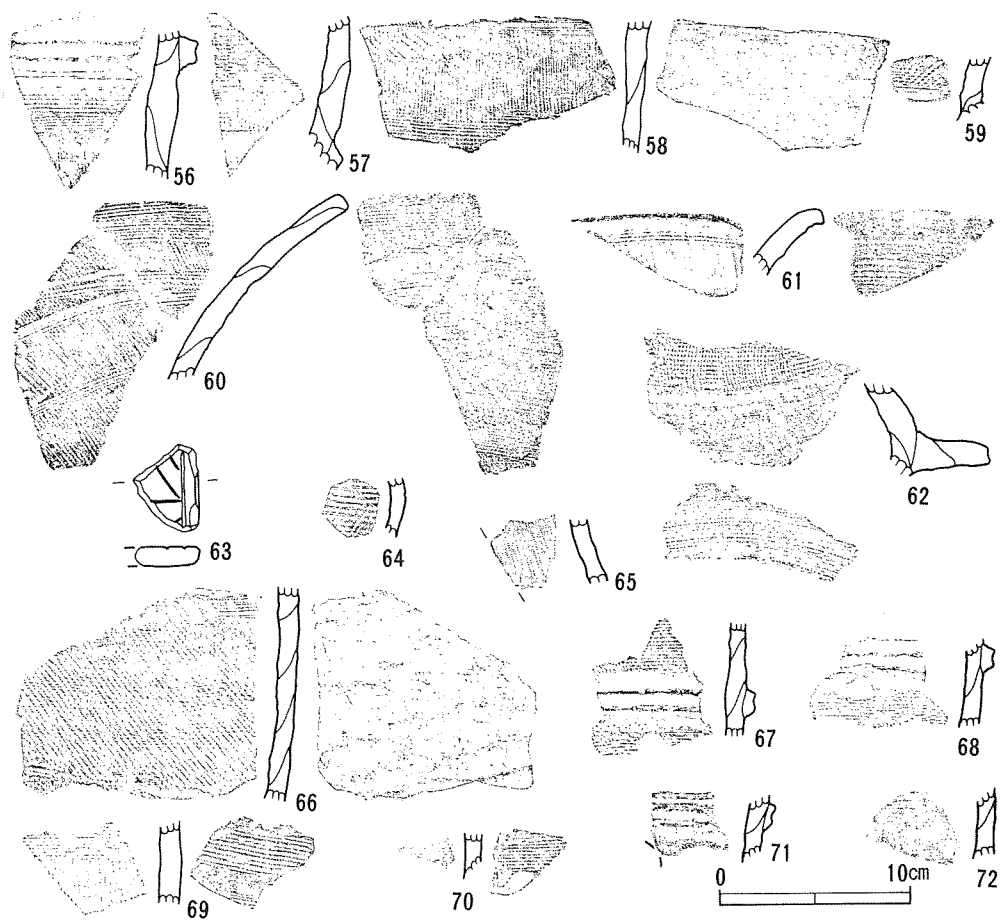


图32 遗物实测图(4)

VI ま と め

現在、名古屋台地で知られる古墳数は約40基あり、前方後円墳として現存するものが6基ある。今日まで古墳が残ってきた場所は、神社境内地等の場合が多く、そのため戦後の土木工事等による破壊から免れてきたわけで、その反面発掘調査例は数少ない。また、古墳の分布についても、名古屋城下町として発展してきた市街地から、既に削平されたものが新規発見される可能性もあって、十分な資料となりえていない。こうした事情の中で、名古屋台地の古墳研究は、断片的な資料の蓄積によって検討されてきたと言えよう。

白鳥古墳については、『尾張志』や『尾張名所図会附録』等の記載内容が重要な資料となっている。その内容は、天保8年(1837)の台風で後円部の大木が倒れて石室が露出した際に、白鳥山法持寺が副葬品の採集とその筆写をした後に、副葬品を再び埋め戻したというものである。^(註1) 筆写された絵図によれば、石室より轡・杏葉・雲珠などの馬具や器台・高坏などの須恵器が出土している。その遺物内容から、本墳の築造時期は、6世紀前半頃と推定されてきた。^(註2) 今回の調査は、外堤部と思われる区域の一部であり、築造時期などを判断できる資料の出土が期待された。しかし、内容は前述されたとおりで、多数の埴輪片が出土するにとどまり、従来の知見を修正できるような資料は発見されなかった。資料整理の結果から、本墳に関する視点を簡単に述べてまとめとする。

今回の出土埴輪は、円筒埴輪片が大多数で、形象埴輪片が少量であった。その色調は、青灰色のもの(須恵質)が少なく、橙褐色のもの(土師質)が圧倒的に多い。近隣の断夫山古墳から青灰色で焼成度の良い埴輪が出土しているのに反して、本墳からの出土例が少ないことは注目すべき点であろう。すなわち、本墳の埴輪は、別稿の埴輪の胎土分析や成形及び調整方法の記載で指摘されるように、その生産地が東山古窯址群以外の地域で焼成されるものが含まれている可能性が生じた。一方、断夫山古墳の埴輪は、東海地方で早い段階に須恵器生産を開始した東山古窯址群の第10号窯で焼かれたものと考えられ、^(註3) 断夫山古墳の被葬者はその須恵器生産集団を統轄した者と推定されている。現時点で両古墳の埴輪の有り方は、単なる視覚的に相異するというにとどまらず、両古墳の築造時期の差あるいは被葬者の政治力の差などを暗示していると考えられる。

東山古窯址群の築窯と名古屋台地上の古墳築造の成立過程の関わりを理解するにあたり伊藤秋男氏が仮説を提示されている。伊藤氏は、大須二子山古墳出土資料の再検討を行ない、大須二子山古墳の築造時期を5世紀末以前(5世紀後葉の中頃まで遡りうるかもしれない)とし、副葬品の内容などから「その被葬者をもって、須恵器の部民制生産を統轄するため畿内政権によって入植せしめられた新来の畿内勢力者として性格づけることができ」

「次代の断夫山古墳に象徴される尾張氏による尾張の統合と熱田神宮の造営が完成する背景と継起は、すでに大須二子山古墳が築造される、その歴史的事象のなかに介在していた」と推定される。^(註4)この指摘は、断夫山古墳の築造に象徴される歴史的事象と、断夫山古墳築造期に前後する白鳥古墳の成立を考える上で、興味深いと思われる。これら三つの古墳の成立に係わって、大須二子山古墳から断夫山古墳の築造時期に見られる歴史的事象と、本古墳の成立が断夫山古墳の成立と密接な関係にあることを補強する考え方と言える。

さて、本墳の埴輪片の出土状態は、中世の遺構等により改変され築造時の状態をほとんどどめていないが、周濠部の外側斜面寄りに集中していた。その状態から二点が推察される。一つは、埴輪片が周濠部の外側斜面寄りに集中することから、既削平部に外堤部が築造されて埴輪列が存在した可能性があること、一つは、中世遺構内にも埴輪片が含まれることから、周濠部内に中世の墓が造られた可能性があることである。

前者は、外堤部の存在を名古屋大学による測量調査図から推測できるとどまり、埴輪の基部が埋まる事例はないが、第Ⅰ次調査区の平坦部にまで埴輪片が散布していたことを考慮しての推察である。また、第Ⅰ次調査区の東側部及び今回調査区の北側部にかけて、後円部の形状に類似するかのような溝が検出されている。この溝は、墳丘裾部から約20m程の間隔を保ち、幅約6m、深約3m（第Ⅰ次調査の検出時）で、墓石を含む攪乱土層が堆積していた。溝斜面の古墳側の堆積層からは埴輪片が出土しているため、外堤部での埴輪列の存在を傍証すると思われた。なお、この溝については、古墳と関連あるものとは判断できなかった。

後者は、SD1及びSD2の溝に鈎状部分があることを考慮しての推察である。いずれの溝からも、埴輪片とともに12～13世紀代の遺物が出土している。SK3・4・6が、11世紀末から12世紀前半の遺物を出土する土壇墓である可能性が高い。溝と土壇との出土遺物に時期差があるものの、これらの溝は中世の方形墓の一部であったとも考えられる。

最後に、2回の調査を通じて成果を得られた本墳が、調査後に一部破壊されるという事態が生じたことを述べなければならない。調査後、法持寺の改築工事が進む段階で、本墳の後円部及び前方部の一部が、工事施工業者によって破壊されてしまった。市及び県教育委員会の担当者が、昭和62年2月に事情聴取したところ、昭和61年12月頃に下請業者が作業場を確保するために墳丘部の土取りをしたということであった。やむなく、施工者及び施工責任者に厳重な注意をした後、文化財保護法第57条の2第1項に基づく届出と始末書を提出させる指導をし、現地の測量調査を3月に実施した。測量の結果、墳丘部の二段築造の下段部分東側の大半が破壊されたことが判明した。また、土取り部分の周辺で、橙褐色の埴輪片が多数採集された。

本墳は、断夫山古墳とともに指定文化財となり得る重要な遺跡であり、その形状が損われたことは、極めて残念なことである。これまで、白鳥山法持寺によって守られてきた白鳥古墳が、時代の相異とはいえ奇しくも、法持寺の改築工事に伴って一部破壊された次第である。

(山田)

註1 岡田啓 1974 『尾張名所図会附録』

註2 澄田正一 1970 「尾張と熱田神宮」 『古代の日本 6 中部』

高坂稔積 1941 「法持寺蔵白鳥御陵出土品写生帖模写」 『尾張の遺跡と遺物』 第27号

註3 檜崎彰一 1966 『猿投窯』 平凡社

註4 伊藤秋男 1978 「名古屋市大須二子山古墳調査報告」 『小林知生教授退職記念考古学論文集』

註5 断夫山古墳は昭和62年7月に国指定記念物（史跡）となっている。

付載 名古屋市周辺の窯跡出土須恵器・埴輪、
古墳出土埴輪の蛍光X線分析

奈良教育大学 三 辻 利 一

付載 名古屋市周辺の窯跡出土須恵器・埴輪、 古墳出土埴輪の蛍光X線分析

奈良教育大学 三 辻 利 一

1) はじめに

粘土を高温（～1350℃）で焼成しても化学特性に変動がないことは粘土の焼成実験によって明らかにされた。このことは土器を分析して得られる化学特性は素材粘土の化学特性であることを意味する。この実験事実から胎土分析による土器の産地推定の研究は出発する。粘土の化学特性は母岩の化学特性に支配される。したがって、岩石に地域差があるように、土器にも地域差があるはずである。この推定を実証するためには、全国各地の土器を分析してみなければならない。このような研究を行うためには、まず、生産地がはっきりわかった土器が必要である。この点で窯跡出土の須恵器片が絶好の分析対象となった。筆者らは過去十数年間にわたって、全国各地の800基を越える窯跡出土須恵器片の分析データを出した。その結果、一基の窯跡から出土する須恵器は分析値にはばらつきはあるものの、一定の化学特性をもつこと、また、明らかに須恵器胎土には地域差があること、それも、地質構造に関連した地域差があることがわかった。これらの研究結果は胎土分析によって須恵器の伝播を追跡することが可能であることを示した。

本項では須恵器伝播の研究の基礎データとして、名古屋市周辺の窯跡出土須恵器片を分析し、その化学特性を明示する。

一方、埴輪も胎土分析によって、その伝播を追跡する研究が進められている。埴輪は生産遺跡である窯跡も残っているが、須恵器のようにすべてが窯で焼成したとは限らない。したがって、生産地が明確でない場合もあり、須恵器に比べて産地推定は難しい。筆者らは大阪府下には三島古墳群、百舌鳥古墳群、古市古墳群の3大古墳群があり、これらの中にそれぞれ埴輪を焼成した窯跡が残っていることに着目し、大阪府下での埴輪伝播に関する研究を開始した。それによると、埴輪も必ずしもすべてが地元産ではなく、古墳群間でも流通があったことがわかった。同様な研究は各地で進めるべきである。そして、埴輪の生産と流通の問題を解明することによって、埴輪を古代史研究の材料に生かし得ると考えた。今回は名古屋市周辺の20基ばかりの古墳から出土した埴輪の分析結果も併わせて報告する。

2) 分析試料（図33～36、表15～22）

分析の対象とした試料は、時間的に5世紀後半から6世紀前半という尾張部で最も円筒埴輪が盛行し、かつ地域色を具備する時期とし、空間的には白鳥古墳の所在する名古屋台地を中心として名古屋市域周辺を含めた古墳及び窯跡出土のものと限定した。結果として、総試料数 212点のうち窯跡出土試料が6遺跡37点（内埴輪片24点）と極端に少なく、需給関係を観ようとする場合、相当にバランスを悪くする結果となっている。ここでは以下、分析試料に関する情報を簡単に書き添えるにとどめたい。

窯跡出土試料（図33、表15～16）

1. 下原2号窯（1～3） 春日井市東山町平橋（文献10）

5世紀末から6世紀前半に位置づけられている須恵器との併焼窯である。試料とした3点とも硬質の円筒埴輪片で、外面二次調整にヨコハケ、底部調整にヨコナデを用いる。

2. 下原4号窯（4～8） 春日井市東山町2313-23（文献10）

5世紀末の須恵器との併焼窯である。5点とも円筒埴輪の胴部片で、外面二次調整にヨコハケを用いる。

3. 城山2号窯（9～25） 尾張旭市城山町長池下4502（文献6・10）

5世紀後葉の須恵器との併焼窯である。埴輪の種類には円筒埴輪の他、朝顔形埴輪と形象埴輪各種がある。須恵器片3点の他はすべて円筒埴輪片であり、外面二次調整にヨコハケを用いるものが大半であるが、一部（20）のように1cm当り3～4本という粗いササラ状のナナメハケで調整が終了するものもある。

4. 東山10号窯（26～30） 名古屋市千種区鹿子町1丁目（文献8）

5世紀末から6世紀初頭にかかる須恵器との併焼窯である。円筒埴輪片少数が採集されている。ここでは須恵器片5点を試料とする。

5. 東山11号窯（31～35） 名古屋市千種区清住町2丁目30番地（文献8）

5世紀末の須恵器との併焼窯である。円筒埴輪片少数が採集されている。須恵器片5点を試料とする。

6. 東山54号窯（36～37） 名古屋市千種区御棚町2丁目23番地 水野裕之氏御教示

5世紀末の須恵器との併焼窯であるらしい。円筒埴輪片少数が採集されている。試料とした2点とも円筒埴輪の胴部片で、外面二次調整にヨコハケを用いる。

古墳出土試料（図34～36、表17～22）

1. 城塚古墳（1～4） 岐阜県揖斐郡大野町大字野（文献3・13）

野古墳群中最も南に位置する前方後円墳で、全長75m、後円部直径39m・高さ7m、前方部幅30m・高さ4.3mを測る。明治2年、後円部において幅1m・長さ2.4mの竪穴式石室が露呈し、鏡・刀・鏃・馬具等が出土したと言う。

2. 登越古墳 (5~10) 同上 (文献3・13)

全長83m、後円部直径52m・高さ7.3m、前方部幅42m・高さ5.8mを測る野古墳群中最大規模の前方後円墳である。

3. 南屋敷西古墳 (11~17) 同上 (文献3・13)

全長76m、後円部直径54m・高さ5.4m、前方部幅28m・高さ3mを測る前方後円墳である。

4. 不動古墳 (18~25) 同上 (文献3・13)

全長50m、後円部直径30m・高さ5m、前方部幅15mを測る前方後円墳である。

5. 味美二子山古墳 (26~32) 春日井市二子町2丁目11の56 (文献11・13)

全長94m、後円部直径49m・高さ6.6m、前方部幅64m・高さ7mを測る前方後円墳である。くびれ部の右側に造り出しを有し、墳丘の周りに周濠を備える。

6. 味美御旅所古墳 (33~41) 春日井市二子町2丁目11の2・3 (文献11)

味美二子山古墳の北西際に位置する直径23mの円墳である。

7. 南東山古墳 (42~49) 春日井市勝川町9丁目2034-1 (文献2)

直径40mの円墳で、墳裾に円筒埴輪を巡らし周濠を備える。出土遺物には鳥形裝飾付蓋をはじめとする須恵器各種の他、円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪等がある。

8. 印場大塚古墳 (50~54) 尾張旭市大塚町1丁目13番地の1 (文献5)

直径16m・高さ2mの円墳で、墳丘斜面に葺石を、墳裾に埴輪を巡らせる。発掘調査による出土遺物は円筒埴輪と朝顔形埴輪のみであるが、採集遺物の中に5世紀末に遡る須恵器もある。

9. 長坂4号墳 (55~59) 尾張旭市長坂町南山 (文献9)

直径5m・高さ1mの円墳である。出土遺物には須恵器各種の他、円筒埴輪と朝顔形埴輪がある。

10. 長坂5号墳 (60~61) 同上 (文献9)

直径11m・高さ1mの円墳で、墳裾に埴輪を巡らす。内部施設は木棺直葬が想定されている。出土遺物には須恵器・鉄剣・鉄鏃・円筒埴輪・朝顔形埴輪等がある。埴輪の外面調整はタテあるいはナナメハケで終了するものばかりである。

11. 長坂6号墳 (62~69) 同上 (文献9)

直径10m・高さ2mの円墳で、墳丘の周囲に幅1.4m~2.4mの周濠を巡らす。出土遺物には須恵器・鉄剣・鏝子・円筒埴輪・蓋形埴輪等がある。

12. 守山瓢箪山古墳 (70~84) 名古屋守山区大字守山字東山105 (文献7)

全長63m・前方部幅58mの前方後円墳で、周濠を備える。表採されている遺物には円筒

埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪等がある。1点のみであるが、底部にタタキ技法の認められる円筒埴輪片もある。

13. 池下古墳 (85~94) 名古屋市守山区大字小幡字池下 (文献1)

全長40m、後円部直径25m・高さ3m、前方部幅20m・高さ2.5mを測る前方後円墳で、墳裾に埴輪列、くびれ部に造り出し、石組排水施設、周濠を備える。出土遺物には須恵器・鉄製品・円筒埴輪・朝顔形埴輪・蓋形埴輪等がある。

14. 離れ松2号遺構 (95~104) 名古屋市守山区城土町 (文献1・12)

残存部で東西4.7m・南北1.9mの長さで、深さ0.4mを測る竪穴状の遺構である。出土遺物には須恵器各種と円筒埴輪がある。

15. 離れ松4号遺構 (105~114) 同上 (文献1・12)

幅1m・深さ0.5mの溝を方形(9×9m)に巡らす。方形周溝墓あるいは方墳の基底部と考えられている。溝内から須恵器各種の他、土師器・円筒埴輪・朝顔形埴輪等が出土している。試料とした円筒埴輪の外表面調整はタテあるいはナナメハケの一次調整で終了するものばかりである。

16. 離れ松6号遺構 (115~124) 同上 (文献1・12)

幅1.1~2.5m、深さ0.5mの溝を長方形(10.5×?m)に巡らす。4号遺構と同様の性格を有する遺構と考えられる。溝内から須恵器2個体と朝顔形埴輪2個体の出土が報じられている。試料とした円筒埴輪の外表面調整はタテあるいはナナメハケの一次調整で終了するものばかりである。

17. 離れ松9号遺構 (125~134) 同上 (文献1・12)

幅2m・深さ0.7mの溝が3mの長さで確認されている。4号遺構と同様の性格を有する遺構と考えられる。溝内から須恵器小片1点の他、土師器・円筒埴輪・朝顔形埴輪等が出土している。円筒埴輪の外表面調整はタテ方向のハケで終了するものばかりで、試料としたものも同様である。

18. 断夫山古墳 (135~155) 名古屋市熱田区旗屋町1014 (文献4)

別項参照のこと。試料とした円筒埴輪片は、大半が外面二次調整にヨコハケを用いている。(150・154)の2点のみがタテハケで終了する。

19. 白鳥古墳 (156~175) 名古屋市熱田区白鳥町1丁目

別項参照のこと。試料とした円筒埴輪片は、大半が外面二次調整にヨコハケを用いている。(161)の1点のみがタテハケで終了する。

上記試料を肉眼によって胎土観察をする場合、明快な産地別識別は相当に困難なことが理解される。唯一、尾北窯産のものに特徴とされる白色縞状の粘土の流れを手掛かりとし

表15 分析試料（窯跡1）

挿図No	遺跡名	提供者	種類	部位	整形の特徴	胎土・焼成・色調	備考
33-1	下原2号窯	赤塚次郎	円筒	底	外：タテハケのちヨコハケ、底面：ヘラ削りのちヨコナデ 内：タテハケのちヨコハケのち部分的にタテハケ	密・白色縞含、良好・堅緻、灰褐色	
2	〃	〃	〃	胴	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・砂粒含まず、良好・堅緻、灰褐色	
3	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含、良好・堅緻、灰色	
4	下原4号窯	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色縞含、良好・堅緻、淡黄灰色	
5	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色粒含、良好・堅緻、淡灰褐色	
6	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコナデ	密・良好、淡黄褐色	
7	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコナデ	密・やや不良・軟、黄褐色	
8	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色縞含、良好、淡橙褐色	
9	城山2号窯	〃	〃	底	外：タテハケのちヨコハケ、底面：スノコ痕？ 内：ヨコナデ	密・砂粒含まず、良好・堅緻、淡青灰色	
10	〃	〃	〃	口縁	外：タテハケのちヨコハケ、口唇：ヨコナデ 内：ヨコハケ	密・良好・堅緻、暗灰色	
11	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ、口唇：ヨコナデ 内：ヨコハケ	密・良好・堅緻、淡青紫色	
12	〃	〃	須恵・カメ？	胴	外：タタキ 内：回転ナデ	密・白色粒含、良好・堅緻、淡青灰色	
13	〃	〃	〃	〃	外：タタキ 内：回転ナデ	密・良好・堅緻、淡灰褐色	外面全体に自然釉
14	〃	〃	須恵・灰蓋	突帯	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密・良好・堅緻、暗灰色	
15	〃	〃	円筒	底	外：タテハケのちヨコハケ、底面：スノコ痕？ 内：ヨコナデ	密・良好・堅緻、灰褐色	
16	〃	七原恵史	〃	胴	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含、良好・堅緻、暗青灰色	
17	〃	〃	〃	〃	外：全体にマメツ 内：ヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含、良好、淡茶褐色	
18	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケ及びタテナデ	密・白色粒含、良好・堅緻、青灰色	
19	〃	〃	〃	〃	外：タテハケ 内：タテナデ	密・白色縞含、良好・堅緻、淡青灰色	突帯ハガレ
20	〃	〃	〃	〃	外：ナナメハケ 内：ヨコハケ	密・白色縞含、良好、暗青灰色	ササラ状のハケ
21	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケ及び指頭による整形	密・白色粒含、良好、淡茶褐色	
22	〃	〃	〃	口縁	外：タテハケのちヨコハケ 内：ナナメナデ	密・白色粒及び白色縞、良好、青灰色	
23	〃	〃	〃	胴	外：ヨコナデ及びナナメハケ 内：ナナメナデ及びヨコハケ	密・白色縞含、良好・堅緻、暗灰褐色	
24	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：タテナデ	密・白色縞含、良好・堅緻、淡青灰色	
25	〃	〃	〃	〃	外：タタキ 内：ナデ？	密・白色粒及び白色縞含、良好・堅緻、青灰色	
26	東山10号窯	赤塚次郎	須恵・カメ？	〃	外：タタキ 内：ナデ	密・良好・堅緻、灰白色	外面全体に自然釉
27	〃	〃	〃	〃	外：タタキ 内：ヨコナデ	密・良好・堅緻、暗灰色	外面に窯クソ
28	〃	〃	〃	〃	外：タタキ 内：ヨコナデ	密・良好・堅緻、淡青灰色	
29	〃	〃	〃	〃	外：タタキ 内：ナデ？	密・良好・堅緻、暗灰褐色	内外共全体に自然釉
30	〃	〃	〃	〃	外：タタキ 内：ナデ	密・白色縞含、良好・堅緻、灰褐色	内外共全体に自然釉

表16 分析試料（窯跡2）

挿図No	遺跡名	提供者	種類	部位	整形の特徴	胎土・焼成・色調	備考
33-31	東山1号窯	赤塚次郎	須恵・カメ?	胴	外：ヨコナデ及び平行タタキ 内：ヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含、良好・堅緻、灰褐色	内面全体に自然釉
32	〃	〃	〃	〃	外：タタキ 内：ナデ	密・白色縞含、良好・堅緻、灰褐色	内面に自然釉
33	〃	〃	〃	〃	外：タタキ 内：ナデ?	密・白色縞含、良好・堅緻、灰褐色	内面に自然釉
34	〃	〃	〃	〃	外：タタキ 内：ヨコナデ	密・白色粒含、良好・堅緻、淡灰褐色	外面に自然釉
35	〃	〃	〃	〃	外：? 内：ナデ	密・白色粒及び白色縞含、良好・堅緻、暗灰褐色	外面ハガレ及び自然釉
36	東山54号窯	水野裕之	円筒	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・良好・堅緻、淡青灰色	
37	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ナナメハケ	密・やや不良・軟、淡黄褐色	

て分類を試みれば以下のとおりである。窯跡出土試料の内、白色縞を比較的多く含むのは下原2号窯・下原4号窯・城山2号窯・東山11号窯で、あまり目立たないのは東山10号窯・東山54号窯である。東山11号窯の試料に比較的白色縞が多く認められることは、この分類の指標が単に一般的な傾向としてのみ認識されるべきであることを示している。これを踏まえた上で古墳出土試料を見てみると以下のとおりである。

1類) 白色縞を多く含むもの

味美二子山古墳、南東山古墳、池下古墳、離れ松2号遺構、離れ松4号遺構、離れ松6号遺構、離れ松9号遺構、白鳥古墳

2類) 白色縞を含まないもの

城塚古墳、登越古墳、南屋敷西古墳、不動古墳、味美御旅所古墳、印場大塚古墳、長坂4号墳、長坂5号墳、長坂6号墳、守山瓢箪山古墳、断夫山古墳

次に埴輪の調整技法を指標にして分類すれば以下のとおりである。

A類) オワリ志向A（文献9に準拠する）

下原2号窯、下原4号窯、城山2号窯、東山54号窯、登越古墳、南屋敷西古墳、不動古墳、味美二子山古墳、味美御旅所古墳、南東山古墳、印場大塚古墳、長坂4号墳、長坂6号墳、守山瓢箪山古墳、離れ松2号遺構（100）、離れ松9号遺構（126）、断夫山古墳、白鳥古墳

B類) オワリ志向B

断夫山古墳（150・154）、白鳥古墳（161）

C類) オワリ志向C

城山2号窯（19・20・24）、離れ松2号遺構（95・96・98・103）、離れ松4号遺構（105～113）、離れ松6号遺構（115～121・123・124）、離れ松9号遺構（128・128・129・130～134）

表17 分析試料（古墳1）

挿図No	遺跡名	提供者	種類	部位	整形の特徴	胎土・焼成・色調	備考
34-1	城塚古墳	赤塚次郎	円筒	胴	外：ナデ 内：ナデ	やや粗、やや不良・軟、淡黄褐色	全体にマメツ
2	〃	〃	〃	〃	外：指頭によるナデ 内：ナデ	密・砂粒含まず、良好・堅緻、淡黄褐色	
3	〃	〃	〃	〃	外：？ 内：？	やや粗・少量のスサ含、やや不良・やや軟、橙褐色	全体にマメツ・凹凸多い
4	〃	〃	〃	口縁	外：？ 口唇：ヨコナデ？ 内：？	やや粗、やや不良・やや軟、橙褐色	全体にマメツ・凹凸多い
5	登越古墳	〃	〃	胴	外：ヨコハケ及びびヨコナデ 内：ヨコナデ	密・良好、淡褐色	
6	〃	〃	〃	〃	外：タテハケ 内：ヨコナデ	密・やや不良・軟、淡黄褐色	外面マメツ
7	〃	〃	〃	〃	外：？ 内：？	密・粗砂含、不良・軟、淡橙褐色	全体にマメツ
8	〃	〃	〃	〃	外：？ 内：？	やや粗・白色粒含、良好、淡黄褐色	全体にマメツ
9	〃	〃	〃	〃	外：？ 内：？	密・白色粒含、良好、淡橙褐色	外面マメツ・内面ハガレ
10	〃	〃	〃	〃	外：？	密・白色粒及び白色縞含、良好、淡橙褐色	突帯部のみ残外面マメツ・内面ハガレ
11	南屋敷西古墳	〃	〃	〃	外：？ 内：？	粗・白色粒含、やや不良・軟、淡橙褐色	全体にマメツ
12	〃	〃	〃	〃	外：？ 内：ヨコナデ	粗・白色粒含、やや不良・軟、淡黄褐色	外面マメツ
13	〃	〃	〃	〃	外：ナデ及びヨコハケ 内：ナデ及びヨコハケ	粗・白色粒含、やや不良・軟、淡橙褐色	
14	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコナデ	粗・白色粒含、やや不良・軟、淡橙褐色	
15	〃	〃	〃	〃	外：ナデ？ 内：ヨコハケ	粗・白色粒含、やや不良・軟、淡橙褐色	外面マメツ
16	〃	〃	〃	〃	外：ナデ？ 内：ヨコハケ	粗・白色粒含、やや不良・軟、淡橙褐色	外面マメツ
17	〃	〃	〃	〃	外：ナデ？ 内：ナデ？	粗・白色粒含、やや不良・軟、淡黄褐色	全体にマメツ
18	不動古墳	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコナデ	やや粗・白色縞含、良好・堅緻、暗青灰色	
19	〃	〃	〃	〃	外：？ 内：？	やや粗・白色粒含、やや不良・やや軟、淡黄褐色	全体にマメツ
20	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	やや粗・白色粒含、良好・堅緻、淡灰褐色	
21	〃	〃	〃	〃	外：？・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコナデ	やや粗・白色粒含、良好、淡褐色	
22	〃	〃	〃	〃	外：？	やや粗、やや不良・やや軟、淡黄褐色	全体にマメツ
23	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケのちタテハケ及びヨコナデ、端：ハラケズリ 内：ヨコハラケズリ	やや粗・白色粒及び白色縞含、良好、淡橙褐色	
24	〃	〃	〃	〃	外：？ 内：？	やや粗・白色粒及び白色縞含、良好、淡橙褐色	全体にマメツ
25	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケ 内：ヨコハケ	やや粗、良好、淡橙褐色	
26	味美二子山古墳	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色縞含、良好・堅緻、淡灰褐色	
27	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含、良好・堅緻、暗灰褐色	
28	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色縞含、良好・堅緻、暗褐色	
29	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコナデ	密・良好・堅緻、淡灰色	
30	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色縞含、良好・堅緻、淡灰色	

表18 分析試料（古墳2）

挿図No	遺跡名	提供者	種類	部位	整形の特徴	胎土・焼成・色調	備考
34-31	味美二子山古墳	赤塚次郎	円筒	胴	外：タテハケのちヨコハケ内：ヨコハケ	密、白色粒含、良好・堅緻、暗灰褐色	
32	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ内：ヨコハケ	密・白色縞含、良好・堅緻、暗茶褐色	
33	味美御旅所古墳	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ内：ヨコハケ	密・白色縞含、良好・堅緻、暗茶褐色	
34	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケ内：ヨコハケ	やや粗、良好・堅緻、暗灰褐色	
35	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケ内：ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含、良好・堅緻、暗灰色	
36	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ内：ヨコハケ	密・白色縞含、良好・堅緻、淡灰色	
37	〃	〃	〃	〃	外：タテハケ内：ヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含、良好・堅緻、暗灰色	
38	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ内：ヨコハケ	密、不良・軟、淡黄褐色	
39	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ内：ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含、良好・堅緻、淡灰色	
40	〃	〃	〃	〃	外：ヨコナデ内：ヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含、良好、淡灰褐色	
41	〃	〃	〃	〃	外：ヨコナデ内：ヨコナデ	密・白色粒含、良好・堅緻、暗灰色	内外面共に一部ハガレ
42	南東山古墳	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ内：ヨコハケ	密・白色縞含、良好・堅緻、淡灰色	外面全体に自然釉
43	〃	〃	〃	〃	外：ヨコナデ及びタテハケのちヨコハケ内：ヨコハケ	密・白色縞含、良好・堅緻、淡灰色	
44	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ内：ヨコナデ及び部分的にヨコハケ？	密・白色縞含、良好・堅緻、淡灰色	
45	〃	〃	〃	〃	外：突帯貼り付け時のヨコナデ	密・白色粒含、良好・堅緻、暗灰色	突帯のみ
46	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ内：ナナメハケ	密・白色縞含、良好・堅緻、暗灰色	外面全体に自然釉
47	〃	〃	〃	〃	内：ヨコハケ	密・白色縞含、良好・堅緻、灰色	外面ハガレ
48	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ	密・白色縞含、良好・堅緻、暗灰色	内面ハガレ
49	〃	〃	〃	〃	外：タテハケ内：ヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含、良好・堅緻、暗灰色	
50	印場大塚古墳	七原恵史	〃	〃	外：ナデ？内：ヨコナデ	密・白色縞含、良好・軟、淡橙褐色	外面マメツ、透孔
51	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ内：ヨコナデ	密・白色粒含、良好・軟、淡橙褐色	
52	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ内：ヨコハケ	密・白色粒含、良好、淡橙色	
53	〃	〃	〃	底	外：？、庭面？内：？	密・白色粒含、やや不良・軟、淡黄橙色	全体にマメツ
54	〃	〃	〃	胴	外：タテハケのちヨコハケ内：ヨコハケ？	密・白色粒含、良好、淡橙褐色	内面マメツ
5	長坂4号墳	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ内：ヨコハケ	やや粗・白色粒含、良好・軟、淡黄褐色	全体にマメツ、透孔
56	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケ内：指頭による整形	やや粗・白色粒含、良好・軟、淡黄褐色	
57	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケ内：ナデ？	やや粗・白色粒含、良好・軟、淡黄褐色	全体にマメツ
58	〃	〃	〃	〃	外：？内：？	やや粗・白色粒含、良好・軟、淡橙褐色	全体にマメツ
59	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ内：ヨコナデ	やや粗・白色粒含、良好・軟、淡黄褐色	
60	長坂5号墳	〃	〃	〃	外：タテハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ内：指頭ナデ	密・白色粒含、良好、暗黄褐色	突帯ハガレ

表19 分析試料（古墳3）

挿図No.	遺跡名	提供者	種類	部位	整形の特徴	胎土・焼成・色調	備考
34-61	長坂5号墳	七原恵史	円筒	胴	外：？ 内：？	やや粗，良好，淡橙褐色	全体にマメツ
62	長坂6号墳	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケ及びヨコナデ	密，良好・堅緻，灰褐色	
63	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色粒含，良好・堅緻，暗灰褐色	
64	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ及びヨコナデ	密・白色縞含，良好・堅緻，暗茶褐色	
65	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：？	密・白色粒含，不良・軟，淡黄褐色	内面マメツ・凹凸はげしい
35-66	〃	〃	〃	〃	外：？ 内：？	粗・白色粒含，不良・軟，淡黄褐色	全体にマメツ・凹凸はげしい
67	〃	〃	〃	〃	外：？ 内：？	密・白色縞含，やや不良・軟，淡橙褐色	全体にマメツ
68	〃	〃	〃	〃	外：？ 内：？	粗・白色粒含，やや不良・軟，淡黄褐色	全体にマメツ
69	〃	〃	〃	〃	外：？ 内：？	密・白色縞含，良好，淡橙褐色	
70	守山縣守山古墳	齊藤孝正	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコナデ	密・白色粒含，良好・堅緻，灰色	
71	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色粒含，良好・堅緻，淡灰色	
72	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色粒含，良好・堅緻，淡灰褐色	
73	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含，良好・堅緻，暗灰褐色	
74	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ナメナデ	密・白色粒含，良好・堅緻，暗灰色	
75	〃	名古屋市博物館	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ナデ	密，良好，乳白色	
76	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：タテナデ及びヨコナデ	密，良好，乳灰色	突帯ハガレ
77	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケ 内：ヨコハケ	密，良好，乳白色	
78	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ナメナデ	密，良好，乳白色	
79	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケ 内：ナメナデ	密，良好，乳白色	外面一部ハガレ
80	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケ 内：タテナデ	密，良好，乳白色	内外面共に一部ハガレ
81	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ナデ	密，良好，乳白色	外面一部ハガレ
82	〃	〃	〃	〃	内：ヨコナデ	密，良好，乳白色	外面ハガレ
83	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ	密，良好，淡灰色	外面一部及び内面ハガレ
84	〃	〃	〃	〃	内：ヨコナデ	密，良好，乳白色	外面ハガレ
85	池下古墳	〃	〃	〃	外：タテハケ 内：ナデ？	密，白色粒含，淡橙褐色	全体にマメツ
86	〃	〃	〃	〃	外：？ 内：？	密・白色縞含，良好，淡橙褐色	全体にマメツ
87	〃	〃	〃	〃	外：？ 内：？	密・白色粒及び白色縞含，良好，淡橙褐色	全体にマメツ
88	〃	〃	〃	〃	外：？ 内：？	密・白色縞含，良好，淡橙褐色	全体にマメツ
89	〃	〃	〃	〃	外：タテハケ 内：？	密・白色縞含，良好，淡橙褐色	全体にマメツ
90	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色縞含，	

表20 分析試料 (古墳 4)

挿図No	遺跡名	提供者	種類	部位	整形の特徴	胎土・焼成・色調	備考
35-91	池下古墳	名古屋市博物館	円筒	胴	外:タテハケ 内:ナデ?	密・白色織含, 良好, 淡橙褐色	内面一部ハガレ及びマメツ
92	〃	〃	〃	〃	外:? 内:?	粗, 良好・堅緻, 暗茶褐色	全体にマメツ
93	〃	〃	〃	〃	外:? 内:ヨコハケ?	密・白色織含, 良好, 淡橙褐色	全体にマメツ
94	〃	〃	〃	〃	外:タテハケのちナナメ沈線1 内:ナナメハケ	密・白色織含, 不良・軟, 淡黄褐色	
95	離れ松2号遺構	〃	〃	口縁	外:ナナメハケ, 口唇:ヨコナデ 内:ナデ	やや粗・白色織含, やや不良・軟, 淡黄褐色	
96	〃	〃	〃	胴	外:タテハケ 内:ヨコハケ	密・白色粒含, 良好, 暗橙褐色	外面赤彩
97	〃	〃	円筒	胴	外:? 内:タテナデ	やや粗・白色粒含, やや不良・軟, 淡橙褐色	外面マメツ・突帯ハガレ
98	〃	〃	〃	〃	外:タテハケ 内:ナナメハケ?	やや粗・白色粒含, 良好, 淡橙褐色	内面マメツ
99	〃	〃	〃	口縁	外:ナナメハケ 内:ナデ?	やや粗・白色粒及び白色織含, 良好, 橙褐色	内面マメツ
100	〃	〃	〃	胴	外:タテハケのちヨコハケ 内:ヨコハケのちタテハケ	密・白色粒含, 良好, 淡橙褐色	
101	〃	〃	〃	〃	外:? 内:ヨコハケ	密・白色粒及び白色織含, 良好, 淡橙褐色	外面マメツ・突帯ハガレ
102	〃	〃	〃	〃	外:タテハケのちヨコハケ 内:ヨコハケ	密・白色粒含, 良好, 淡橙褐色	外面マメツ
103	〃	〃	〃	〃	外:ヨコハケ 内:ナデ?	密・白色織含, 良好, 淡黄褐色	内面マメツ
104	〃	〃	〃	〃	内:ナナメハケ	粗・白色粒含, 不良, 淡茶褐色	外面ハガレ
105	離れ松4号遺構	〃	〃	〃	外:タテハケ	密・白色織含, 良好, 淡橙褐色	内面ハガレ
106	〃	〃	〃	〃	外:タテハケ 内:ナデ	密・白色粒含, 良好, 淡黄褐色	
107	〃	〃	〃	〃	外:ナナメハケ 内:ヨコナデ	密・白色粒含, 良好, 淡橙褐色	
108	〃	〃	〃	〃	外:ナナメハケ 内:ヨコナデ	密・白色粒及び白色織含, 良好, 淡橙褐色	
109	〃	〃	〃	口縁	外:ナナメハケ, 口唇:ヨコナデ 内:ヨコナデ?	やや粗・白色粒含, やや不良・軟, 淡橙褐色	内面マメツ
110	〃	〃	〃	胴	外:ナナメハケ 内:ヨコハケ	やや粗, 良好, 橙褐色	
111	〃	〃	〃	〃	外:ナナメハケ 内:ナデ	密・白色粒含, やや不良・軟, 淡黄褐色	
112	〃	〃	〃	〃	外:ナナメハケ 内:?	密・白色粒含, 不良・軟, 淡黄褐色	内面一部ハガレ及びマメツ
113	〃	〃	〃	〃	外:ナナメハケ 内:タテナデ	密・白色粒含, やや不良・軟, 淡黄褐色	
114	〃	〃	〃	口縁	外:突帯貼り付け時のヨコナデ 内:ヨコナデ	密・白色粒含, 良好, 橙褐色	内面一部ハガレ, 透孔
115	離れ松6号遺構	〃	〃	胴	外:ナナメハケ 内:ヨコハケのちナナメハケ	密・白色粒含, やや不良, 淡黄褐色	内面赤彩わずかに残
116	〃	〃	〃	〃	外:ヨコハケ 内:ヨコハケ	やや粗・白色織及びスサ含, 不良・軟, 淡黄褐色	内面赤彩わずかに残
117	〃	〃	〃	〃	外:ナナメハケ 内:ヨコハケ	密・白色織含, 良好, 淡橙褐色	
118	〃	〃	〃	〃	外:ナナメハケ 内:タテナデ	やや粗・白色織含, やや不良・軟, 橙褐色	
119	〃	〃	〃	〃	外:タテハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内:ナデ	密・白色織含, 良好, 橙褐色	突帯ハガレ
120	〃	〃	〃	〃	外:タテハケ 内:ナナメハケ	密・白色粒含, 良好, 淡黄褐色	

表21 分析試料 (古墳5)

挿図No	遺跡名	提供者	種類	部位	整形の特徴	胎土・焼成・色調	備考
35-121	離れ松6号遺構	名古屋市博物館	円筒	胴	外：ナナメハケ 内：ヨコハケ	密・白色粒含，良好，淡黄褐色	突帯ハガレ
122	〃	〃	〃	〃	外：突帯貼り付け時のヨコナデ	密・白色粒含，やや不良・軟，淡橙褐色	外面のみ一部残
123	〃	〃	〃	〃	外：ナナメハケ 内：？	密・白色粒含，やや不良・軟，淡黄褐色	内面マメツ
124	〃	〃	〃	口縁	外：ナナメハケ，口唇：ヨコナデ 内：ヨコハケ	やや粗・白色粒含，やや不良・軟，黄褐色	内面赤彩わずかに残
125	離れ松9号遺構	〃	〃	胴	外：ヨコナデ及び？ 内：ヨコナデ？	やや粗・白色粒含，やや不良・軟，淡橙褐色	全体にマメツ
126	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ナデ	密・白色縞含，良好，淡茶褐色	内外面共に一部ハガレ
127	〃	〃	〃	〃	外：？ 内：指頭整形	やや粗・白色縞含，やや不良・軟，淡橙褐色	
128	〃	〃	〃	〃	外：ヨコナデ及びナナメハケ 内：ヨコナデ？	密・白色粒及び白色縞含，やや不良・軟，淡黄褐色	内面マメツ
129	〃	〃	〃	〃	外：タテハケ及びヨコナデ 内：？	やや粗・白色粒含，やや不良・軟，淡橙褐色	内外面共に一部ハガレ，外面赤彩
130	〃	〃	〃	〃	外：ナナメハケ 内：ヨコハケ	やや粗・白色粒含，やや不良・軟，橙褐色	
131	〃	〃	〃	〃	外：ナナメハケ 内：ナデ？	密・白色粒含，良好，淡黄褐色	内面マメツ，外面赤彩
132	〃	〃	〃	〃	外：ナナメハケ・突帯貼り付け時のヨコナデ 内：ヨコハケ？	粗・白色粒含，やや不良・軟，淡茶褐色	突帯ハガレ
133	〃	〃	〃	〃	外：タテハケ 内：ナナメハケ	密・白色粒含，やや不良・軟，淡黄褐色	
134	〃	〃	〃	〃	外：ヨコナデ及びタテハケ 内：？	粗・白粒含，やや不良・軟，黄褐色	内面凹凸，外面赤彩わずかに残
36-135	断夫山古墳	赤塚次郎	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色縞含，良好，淡黄褐色	
136	〃	見晴台	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色粒含，良好・堅緻，暗灰褐色	
137	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケ 内：ヨコハケ	密・良好・堅緻，淡黄褐色	
138	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケのち部分的にタテハケ 内：ヨコハケ	密・白色粒含，良好・堅緻，暗褐色	
139	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケのち棒状具による沈線1	密・白色縞含，良好・堅緻，淡灰色	
140	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケ 内：ヨコハケ	粗・白色粒含，良好・堅緻，暗灰色	内面一部ハガレ
141	〃	〃	朝顔？	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：タテナデ	粗，良好・堅緻，暗黄褐色	
142	〃	〃	円筒	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色縞含，良好・堅緻，暗灰褐色	
143	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色粒含，良好，黄褐色	
144	〃	〃	〃	〃	外：部分的なタテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ及びヨコナデ	密・白色粒含，良好・堅緻，灰色	内面一部ハガレ
145	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコナデ及びヨコハケ	密・白色粒含，良好，淡黄灰色	
146	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケのち部分的にタテハケ 内：ヨコナデ	密・白色粒含，良好，淡黄褐色	
147	〃	〃	円筒	胴	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色縞含，良好，淡黄褐色	
148	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコナデ	密，良好・堅緻，灰色	
149	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコナデ	密・白色縞含，良好，淡橙褐色	
150	〃	〃	〃	〃	外：タテハケ，沈線3条 内：ヨコナデ	やや粗・白色粒含，良好，暗黄褐色	

表22 分析試料 (古墳6)

挿図No	遺跡名	提供者	種類	部位	整形の特徴	胎土・焼成・色調	備考
36-151	断夫山古墳	見晴台	円筒	胴	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコナデ	密・白色粒含，良好，淡橙褐色	
152	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ及びヨコナデ	密・白色粒含，良好，暗黄褐色	
153	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケ及びヨコナデ 内：ヨコナデ	密，良好，暗橙褐色	
154	〃	〃	〃	〃	外：タテハケ 内：ヨコナデ	密・白色粒含，良好，淡黄褐色	
155	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	やや粗・白色粒含，良好，乳白色	
156	白鳥古墳	〃	〃	〃	外：タテハケ 内：ヨコナデ	密・赤色及び白色粒及び白色縞含，良好，淡橙褐色	
157	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含，良好・黄褐色	
158	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケ 内：ヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含，良好，淡橙褐色	
159	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色縞含，良好・堅緻，暗灰褐色	
160	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ及びヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含，良好，橙褐色	
161	〃	〃	〃	〃	外：タテハケ及びヨコナデ 内：ヨコナデ	密・白色粒含，良好，淡黄褐色	
162	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色粒含，良好・堅緻，淡灰褐色	
163	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコナデのち沈線！	密・白色粒及び白色縞含，良好，淡橙褐色	突帯ハガレ
164	〃	〃	〃	〃	外：タテハケ 内：ヨコハケ	密・白色縞含，良好・堅緻，暗茶褐色	
165	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ及びヨコナデ 内：ヨコナデ	密・白色粒含，良好，淡黄褐色	
166	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ及びヨコナデ	密・白色粒含，良好，淡橙褐色	
167	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含，良好，淡橙褐色	
168	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケ及びヨコナデ 内：ヨコナデ及びタテナデ	密・白色縞含，良好，暗茶褐色	
169	〃	〃	〃	〃	外：ヨコハケ 内：ヨコハケ及びヨコナデ	密・白色粒含，良好，淡橙褐色	
170	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含，良好，淡黄褐色	
171	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケのち部分的にヨコナデ 内：タテハケ及びヨコナデ	密・白色縞含，良好，堅緻，淡青灰色	
172	〃	〃	〃	〃	外：タテハケ 内：ヨコハケ及びナメハケ	密・白色縞含，良好，淡茶褐色	
173	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：タテハケ	密・白色縞含，良好，淡黄褐色	
174	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケ 内：ヨコハケのちヨコナデ	密・白色粒及び白色縞含，良好，堅緻，明灰褐色	
175	〃	〃	〃	〃	外：タテハケのちヨコハケのち部分的にタテハケ 内：ヨコハケ	密・白色粒及び白色縞含，良好，淡黄褐色	

文末ではあるが、貴重な分析試料を御提供頂いた赤塚次郎、斎藤孝正、名古屋市博物館、七原恵史、水野裕之の諸氏に感謝の意を表したい。(本節のみ野澤に文責がある)

引用・参考文献

- 1 久永春男・七原恵史他 1969 『守山の古墳 調査報告二』 名古屋市教育委員会

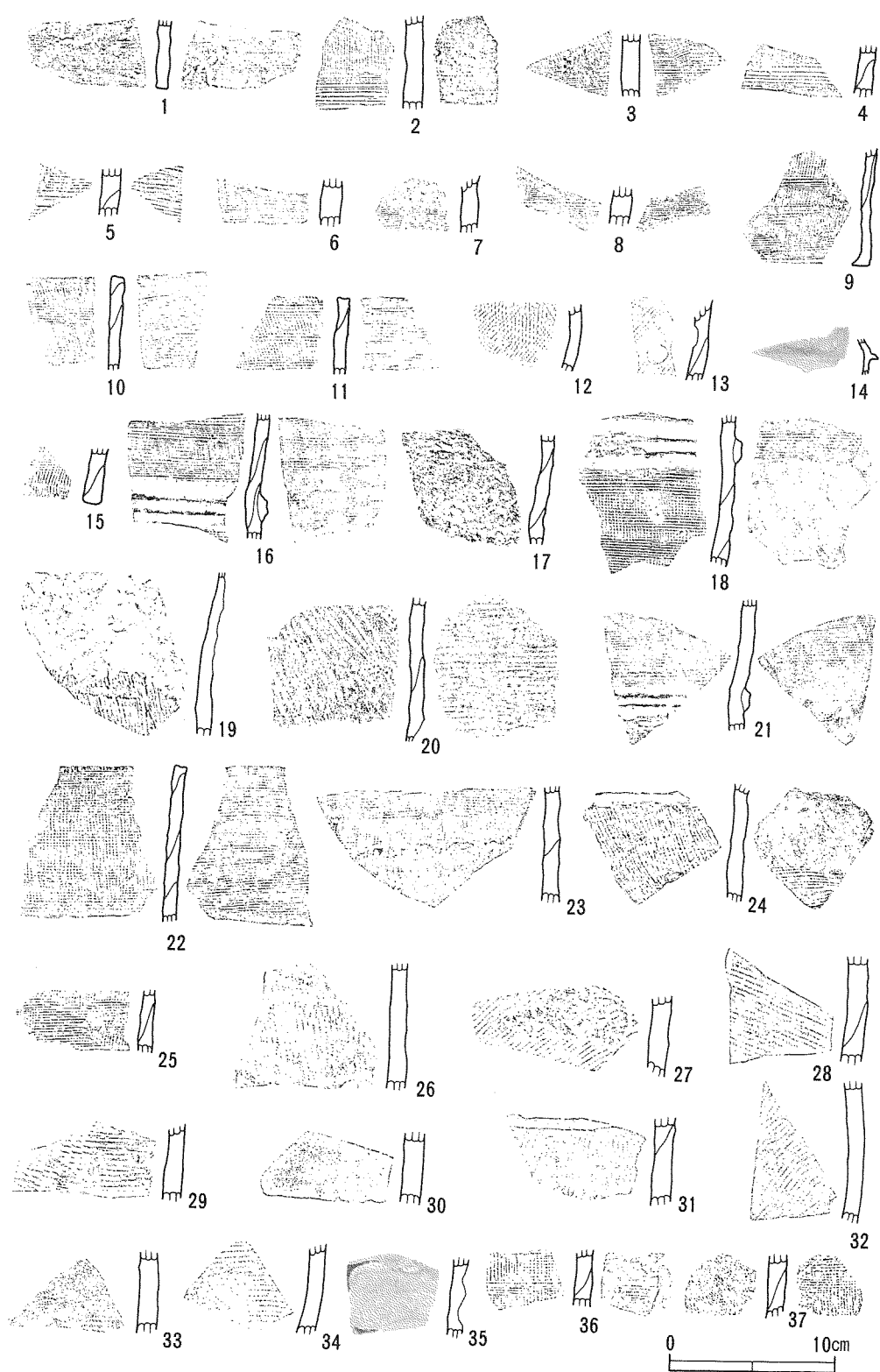


图33 遗物实测图 (窠迹)

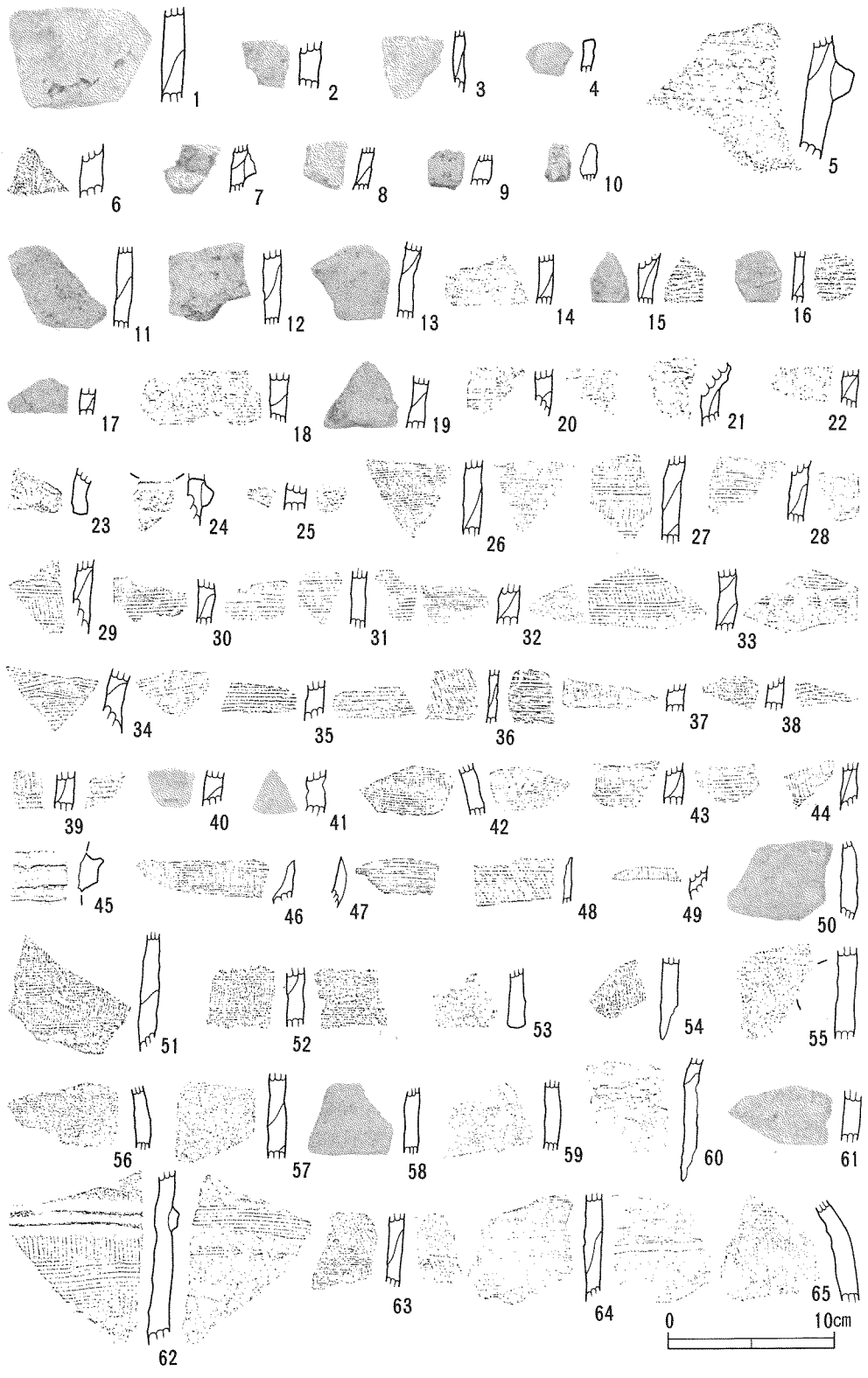


图34 遺物実測図 (古墳 1)



图35 遺物実測図（古墳2）

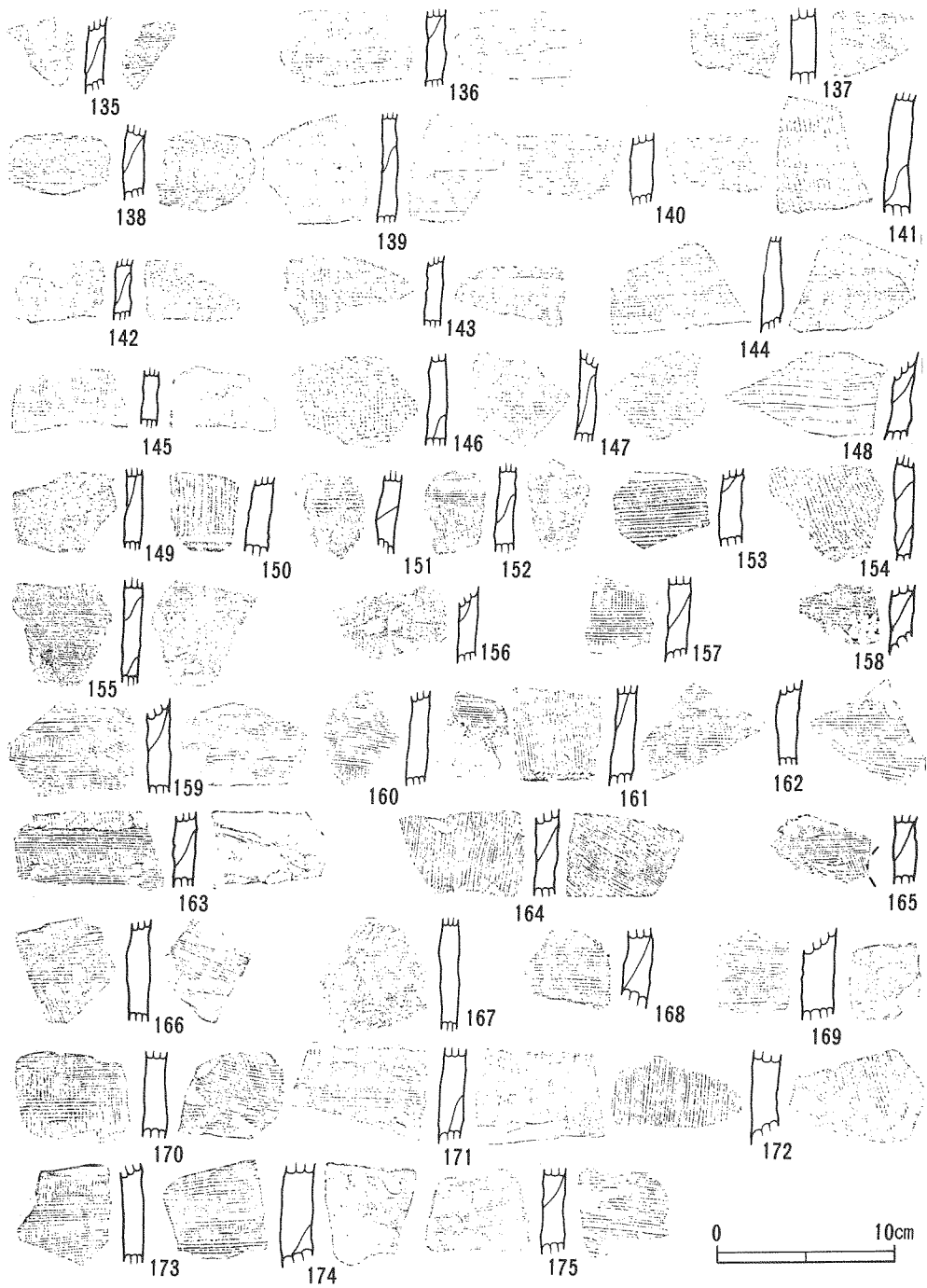


図36 遺物実測図 (古墳 3)

- 2 七原恵史 1970 「南東山古墳」 『春日井市遺跡発掘調査報告第4集』 春日井市教育委員会
- 3 橋崎彰一 1972 「古墳時代」 『岐阜県史』 通史編原始 岐阜県

- 4 愛知県教育委員会 1974 『重要遺跡指定促進調査報告』
- 5 七原恵史他 1977 『印場大塚古墳』 尾張旭市教育委員会
- 6 七原恵史他 1978 『尾張旭市の古窯』 尾張旭市教育委員会
- 7 伊藤稔・加藤安信他 1981 『愛知県重要遺跡指定促進調査報告VI』 愛知県教育委員会
- 8 伊藤稔・加藤安信・斎藤孝正他 1981 『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告(II)』 愛知県教育委員会
- 9 赤塚次郎 1973 「尾張としてはにわ製作」 『考古学の広場』第1号
- 10 斎藤孝正他 1983 『愛知県古窯跡群分布調査報告(III)』 愛知県教育委員会
- 11 七原恵史他 1983 『長坂古墳群』 尾張旭市教育委員会
- 12 名古屋市博物館 1984 『守山の遺跡と遺物』
- 13 赤塚次郎 1986 「造墓への憧憬」 『考古学の広場』第3号

3) 分析方法

須恵器、埴輪試料は表面を研磨して付着物を削りおとしたのち、タングステンカーバイド製乳鉢(硬度 9.5)の中で 100~200メッシュ程度に粉碎した。粉末試料は塩化ビニール製リング枠の中に入れ、約15トンの圧力を加えて、直径20mm、厚さ3mmのコイン状の錠剤に成形し、蛍光X線分析用試料とした。エネルギー分散型蛍光X線分析装置でTiを2次ターゲットにして真空中でK、Caを、また、Moを2次ターゲットにして空気中でFe、Rb、Srを測定した。定量分析には岩石標準試料JG-1を標準試料として使用した。分析値はJG-1による標準化値で表示した。

4) 分析結果

①窯跡出土須恵器・埴輪

窯跡出土試料の分析結果を表23に示す。この表より、どの窯の試料もCa量が少ないという共通点があることがわかる。Ca量が少ないこと、言い換えれば、Caの蛍光X線のカウント数が少ないことであり、そのため測定の際の計数誤差は大きくなる。この点を考慮に入れると、これらの窯跡出土試料はCa量では相互識別できないと云えよう。そうすると、これらの窯間の相互識別ができるかどうかはK、Fe、Rb、Srの4因子にかかってくる。はじめに、Rb-Sr分布図上で窯間の相互識別が可能かどうかをみてみた。図37には下原2、4号窯の試料のRb-Sr分布図を示す。この図にはまた、今回分析したすべての窯跡出土試料を包含するようにして名古屋領域をとった。この領域は定量的な意味をもつものではなく、名古屋市周辺の窯跡出土試料はこの領域に分布するというを定性的に示す。とはいうものの、他地域の窯跡出土試料と比較する場合とか、古墳出土試料が名古屋産かどうかを推定する場合に目安を立てる上に役立つ。図38には城山2号窯、図39

表23 窯跡出土試料の分析値

試料番号	遺跡名	K	Ca	Fe	Rb	Sr
1	下原2号窯	0.479	0.164	1.97	0.656	0.260
2	〃	0.514	0.078	1.86	0.776	0.247
3	〃	0.514	0.078	1.72	0.696	0.261
4	下原4号窯	0.472	0.054	1.58	0.667	0.244
5	〃	0.439	0.126	2.44	0.690	0.313
6	〃	0.446	0.053	1.26	0.516	0.192
7	〃	0.427	0.047	1.30	0.486	0.189
8	〃	0.353	0.042	1.44	0.479	0.204
9	城山2号窯	0.411	0.058	3.11	0.621	0.186
10	〃	0.487	0.069	3.42	0.627	0.211
11	〃	0.389	0.064	3.02	0.649	0.204
12	〃	0.469	0.091	3.03	0.699	0.239
13	〃	0.478	0.086	2.28	0.732	0.273
14	〃	0.422	0.072	2.83	0.685	0.235
15	〃	0.424	0.062	3.24	0.542	0.195
16	〃	0.463	0.069	3.24	0.570	0.196
17	〃	0.308	0.061	4.33	0.429	0.154
18	〃	0.500	0.078	2.51	0.662	0.250
19	〃	0.422	0.078	2.77	0.703	0.227
20	〃	0.496	0.101	3.23	0.615	0.193
21	〃	0.409	0.068	3.91	0.451	0.165
22	〃	0.516	0.079	3.40	0.582	0.197
23	〃	0.443	0.063	3.73	0.496	0.166
24	〃	0.370	0.061	2.89	0.579	0.195
25	〃	0.369	0.070	2.84	0.614	0.193
26	東山10号窯	0.458	0.070	1.51	0.652	0.217
27	〃	0.471	0.079	2.10	0.560	0.219
28	〃	0.440	0.054	1.60	0.559	0.190
29	〃	0.476	0.095	1.06	0.658	0.238
30	〃	0.471	0.102	1.40	0.555	0.238
31	東山11号窯	0.482	0.055	1.43	0.583	0.203
32	〃	0.451	0.059	1.62	0.547	0.216
33	〃	0.461	0.074	1.64	0.557	0.223
34	〃	0.501	0.079	1.26	0.594	0.245
35	〃	0.424	0.054	2.19	0.524	0.202
36	東山54号窯	0.403	0.055	1.68	0.577	0.208
37	〃	0.412	0.044	1.49	0.513	0.156

識別が可能である。

以上の結果、名古屋市周辺の窯跡出土試料はK、Ca、Rb、Sr 因子では相互識別できない、いずれも化学特性がよく似た試料であることがわかった。しかし、城山2号窯の試料にはFe 量が多く、下原2、4号窯、東山10、11、54号窯などの試料から識別できた。この結果は今後、名古屋市周辺の古墳・遺跡出土須恵器・埴輪の産地を求める上に役立つであろう。

には東山10、11、54号窯の試料のRb - Sr 分布図を示す。すべてよく似た位置に分布し、これらの窯間の相互識別にはRb-Sr 分布図も有効ではないことがわかる。別の言い方をすれば、名古屋市周辺の窯跡出土試料はすべてこの領域に分布するものと推察される。つまり、名古屋市周辺は単純な地質構造をもち、同質の化学特性をもつ粘土が広く分布しているものとみられる。滋賀県、三重県の窯跡出土須恵器もRb-Sr 分布図上では似たような位置に分布し、これらの地域にも同じような特性をもつ粘土が広がっているものとみられる。図37、38で若干、気になる点は埴輪は須恵器に比べてRb、Sr 量がともに少ない傾向がある点である。この点については目下のところ十分に説明できない。ただ、須恵器も埴輪も名古屋領域に含まれる点で同質の胎土とみなされ得る。表23をみると、K 因子も窯間の相互識別には役立たないことがわかる。そうすると、窯間の相互識別に役立つのはFe 因子のみということになる。図40にはFe 量を比較してある。下原2、4号窯、東山10、11、54号窯の試料にはFe 量が少ないのに対し、城山2号窯の試料にはFe 量が多く、Fe 因子で相互

表24 古墳出土埴輪の分析値(1)

試料番号	遺跡名	K	Ca	Fe	Rb	Sr
1	城塚古墳	0.643	0.244	2.13	0.607	0.446
2	〃	0.600	0.077	1.49	0.628	0.267
3	〃	0.366	0.159	5.43	0.408	0.214
4	〃	0.400	0.187	4.74	0.472	0.253
5	登越古墳	0.546	0.151	2.13	0.694	0.319
6	〃	0.647	0.074	1.76	0.743	0.318
7	〃	0.516	0.079	3.66	0.544	0.157
8	〃	0.540	0.175	2.18	0.573	0.393
9	〃	0.640	0.083	2.47	0.707	0.241
10	〃	0.444	0.068	2.68	0.334	0.211
11	南屋敷西古墳	0.377	0.039	1.92	0.550	0.197
12	〃	0.289	0.047	2.25	0.494	0.208
13	〃	0.385	0.043	1.88	0.597	0.205
14	〃	0.336	0.033	1.63	0.533	0.172
15	〃	0.323	0.034	1.68	0.539	0.166
16	〃	0.364	0.053	2.21	0.543	0.203
17	〃	0.336	0.042	1.51	0.561	0.173
18	不動古墳	0.290	0.030	2.07	0.525	0.180
19	〃	0.271	0.040	2.09	0.367	0.137
20	〃	0.280	0.040	1.61	0.391	0.147
21	〃	0.273	0.035	1.56	0.344	0.135
22	〃	0.366	0.045	1.31	0.416	0.136
23	〃	0.345	0.033	1.71	0.414	0.132
24	〃	0.345	0.041	1.37	0.415	0.147
25	〃	0.360	0.042	1.53	0.445	0.141
26	味美二子山古墳	0.245	0.032	2.41	0.343	0.142
27	〃	0.397	0.040	2.13	0.617	0.181
28	〃	0.481	0.054	1.97	0.787	0.227
29	〃	0.306	0.035	2.19	0.485	0.169
30	〃	0.272	0.037	2.28	0.415	0.141
31	〃	0.283	0.034	2.38	0.449	0.157
32	〃	0.499	0.052	1.77	0.743	0.228
33	味美御旅所古墳	0.453	0.044	2.90	0.668	0.202
34	〃	0.417	0.048	3.42	0.627	0.201
35	〃	0.461	0.097	2.35	0.597	0.249
36	〃	0.369	0.042	1.80	0.575	0.203
37	〃	0.416	0.043	3.39	0.596	0.170
38	〃	0.408	0.099	2.70	0.522	0.226
39	〃	0.277	0.034	3.10	0.396	0.140
40	〃	0.247	0.035	3.06	0.367	0.133
41	〃	0.370	0.042	3.42	0.515	0.159
42	南東山古墳	0.490	0.043	1.42	0.678	0.227
43	〃	0.499	0.052	1.68	0.683	0.213
44	〃	0.502	0.055	1.85	0.738	0.221
45	〃	0.527	0.057	1.86	0.776	0.211
46	〃	0.494	0.056	1.46	0.699	0.215
47	〃	0.467	0.044	2.04	0.708	0.177
48	〃	0.540	0.060	1.93	0.574	0.233
49	〃	0.542	0.061	1.90	0.732	0.220
50	印場大塚古墳	0.481	0.048	3.52	0.581	0.134
51	〃	0.393	0.040	3.56	0.558	0.120
52	〃	0.390	0.048	3.65	0.547	0.115
53	〃	0.277	0.045	4.45	0.266	0.120
54	〃	0.391	0.044	3.55	0.542	0.126
55	長坂4号墳	0.341	0.031	1.24	0.500	0.127
56	〃	0.314	0.044	1.64	0.516	0.136
57	〃	0.342	0.037	1.31	0.511	0.185
58	〃	0.333	0.046	1.39	0.451	0.138
59	〃	0.319	0.047	1.75	0.562	0.142
60	長坂5号墳	0.269	0.080	5.35	0.356	0.151

試料番号	遺跡名	K	Ca	Fe	Rb	Sr
61	長坂5号墳	0.295	0.032	1.43	0.314	0.127
62	長坂6号墳	0.297	0.042	1.83	0.459	0.158
63	〃	0.298	0.044	2.00	0.463	0.137
64	〃	0.299	0.046	1.92	0.450	0.133
65	〃	0.229	0.032	1.68	0.267	0.148
66	〃	0.287	0.036	1.57	0.352	0.175
67	〃	0.294	0.029	1.45	0.357	0.133
68	〃	0.338	0.033	1.32	0.561	0.156
69	〃	0.321	0.029	1.64	0.410	0.158
70	守山瓢箪山古墳	0.319	0.058	1.25	0.531	0.235
71	〃	0.312	0.060	1.96	0.517	0.164
72	〃	0.365	0.071	1.33	0.520	0.213
73	〃	0.276	0.039	2.33	0.420	0.139
74	〃	0.246	0.032	1.35	0.401	0.142
75	〃	0.282	0.040	1.16	0.463	0.171
76	〃	0.288	0.042	1.79	0.314	0.182
77	〃	0.366	0.048	1.07	0.528	0.199
78	〃	0.325	0.042	1.08	0.501	0.189
79	〃	0.313	0.043	1.09	0.472	0.192
80	〃	0.306	0.042	1.07	0.460	0.183
81	〃	0.354	0.047	1.06	0.547	0.207
82	〃	0.319	0.043	1.17	0.495	0.195
83	〃	0.265	0.034	1.11	0.384	0.158
84	〃	0.316	0.045	1.07	0.444	0.181
85	池下古墳	0.430	0.049	2.29	0.563	0.163
86	〃	0.443	0.101	2.44	0.544	0.178
87	〃	0.377	0.031	2.52	0.567	0.114
88	〃	0.383	0.037	2.28	0.533	0.136
89	〃	0.390	0.037	2.15	0.539	0.138
90	〃	0.395	0.038	2.54	0.487	0.139
91	〃	0.392	0.035	2.19	0.539	0.119
92	〃	0.361	0.038	2.78	0.594	0.112
93	〃	0.444	0.047	2.17	0.531	0.160
94	〃	0.379	0.042	2.88	0.441	0.147
95	離れ松2号遺構	0.493	0.070	2.52	0.496	0.194
96	〃	0.412	0.046	3.75	0.455	0.129
97	〃	0.497	0.070	2.37	0.490	0.201
98	〃	0.465	0.065	2.51	0.486	0.179
99	〃	0.461	0.063	2.95	0.502	0.181
100	〃	0.358	0.048	2.73	0.519	0.114
101	〃	0.406	0.046	2.92	0.504	0.147
102	〃	0.416	0.046	3.21	0.483	0.150
103	〃	0.359	0.045	3.04	0.414	0.131
104	〃	0.384	0.046	4.38	0.455	0.123
105	離れ松4号遺構	0.474	0.059	2.22	0.584	0.187
106	〃	0.471	0.067	2.63	0.540	0.195
107	〃	0.444	0.056	2.47	0.596	0.174
108	〃	0.428	0.069	2.77	0.529	0.178
109	〃	0.475	0.065	2.59	0.563	0.196
110	〃	0.323	0.051	4.29	0.377	0.119
111	〃	0.465	0.049	2.59	0.532	0.166
112	〃	0.475	0.064	2.63	0.550	0.178
113	〃	0.458	0.065	2.57	0.520	0.180
114	〃	0.391	0.038	3.69	0.488	0.113
115	離れ松6号遺構	0.313	0.068	3.29	0.402	0.181
116	〃	0.368	0.079	3.01	0.408	0.194
117	〃	0.364	0.069	3.25	0.398	0.178
118	〃	0.314	0.061	3.17	0.350	0.170
119	〃	0.459	0.059	2.61	0.563	0.201
120	〃	0.380	0.069	2.74	0.429	0.204

表25 古墳出土埴輪の分析値(2)

試料番号	遺跡名	K	Ca	Fe	Rb	Sr
121	離れ松6号遺構	0.400	0.067	2.94	0.399	0.185
122	〃	0.299	0.059	3.45	0.399	0.167
123	〃	0.338	0.078	3.42	0.425	0.183
124	〃	0.331	0.060	3.43	0.347	0.179
125	離れ松9号遺構	0.398	0.045	4.14	0.511	0.126
126	〃	0.311	0.050	4.50	0.371	0.111
127	〃	0.399	0.050	3.44	0.534	0.135
128	〃	0.333	0.050	4.25	0.331	0.145
129	〃	0.435	0.053	3.07	0.525	0.162
130	〃	0.374	0.065	3.41	0.595	0.172
131	〃	0.419	0.049	3.21	0.482	0.152
132	〃	0.453	0.065	3.61	0.497	0.182
133	〃	0.413	0.054	3.47	0.405	0.163
134	〃	0.344	0.049	4.25	0.310	0.124
135	断夫山古墳	0.431	0.035	1.23	0.475	0.198
136	〃	0.325	0.039	1.48	0.361	0.148
137	〃	0.438	0.034	0.960	0.438	0.178
138	〃	0.384	0.032	1.48	0.418	0.156
139	〃	0.354	0.039	1.54	0.379	0.166
140	〃	0.364	0.031	0.911	0.381	0.165
141	〃	0.465	0.037	1.12	0.440	0.163
142	〃	0.384	0.044	1.60	0.466	0.175
143	〃	0.473	0.039	1.19	0.506	0.173
144	〃	0.405	0.033	1.17	0.564	0.182
145	〃	0.431	0.038	1.49	0.502	0.193
146	〃	0.484	0.058	1.24	0.703	0.213
147	〃	0.455	0.047	1.46	0.556	0.190
148	〃	0.386	0.029	1.31	0.610	0.199
149	〃	0.441	0.042	1.60	0.561	0.178
150	〃	0.547	0.037	1.24	0.581	0.191
151	〃	0.474	0.047	1.75	0.550	0.179
152	〃	0.506	0.038	1.02	0.594	0.230
153	〃	0.439	0.036	1.44	0.494	0.152
154	〃	0.502	0.065	1.21	0.715	0.213
155	〃	0.418	0.035	1.37	0.391	0.181
156	白鳥古墳	0.353	0.029	2.19	0.544	0.141
157	〃	0.246	0.027	2.17	0.312	0.117
158	〃	0.338	0.027	1.85	0.516	0.141
159	〃	0.358	0.036	1.78	0.504	0.181
160	〃	0.252	0.033	2.66	0.280	0.131
161	〃	0.275	0.028	2.15	0.329	0.134
162	〃	0.274	0.032	1.83	0.400	0.158
163	〃	0.204	0.023	2.13	0.342	0.122
164	〃	0.353	0.028	1.74	0.495	0.159
165	〃	0.289	0.023	1.53	0.421	0.168
166	〃	0.402	0.063	1.12	0.577	0.255
167	〃	0.440	0.038	2.28	0.518	0.171
168	〃	0.402	0.033	2.24	0.407	0.173
169	〃	0.426	0.042	1.59	0.510	0.213
170	〃	0.370	0.038	1.40	0.481	0.196
171	〃	0.285	0.033	1.93	0.402	0.160
172	〃	0.336	0.034	1.65	0.470	0.162
173	〃	0.269	0.027	1.87	0.364	0.149
174	〃	0.388	0.035	1.67	0.469	0.182
175	〃	0.264	0.118	2.81	0.336	0.269

須恵器・埴輪の伝播を追跡するには胎土分析のデータは重要であるが需要・供給の関係が成立するためには、生産地である窯と供給先の古墳・遺跡の間に同時性が成り立つことが必要であり、窯跡、古墳・遺跡の年代による整理が必要である。なお、同じ窯から出土する須恵器と埴輪の胎土にはとくに有意な差は認められなかった。これはこれまでに筆者が分析して来た他の地域の須恵器・埴輪についても観測された。

②古墳出土埴輪

19基の古墳から出土した埴輪の分析結果を表24・25に示してある。表24・25から、これら古墳出土埴輪胎土はCa 因子では相互識別できないことがわかる。窯跡出土試料と同様、Ca 量がいずれの埴輪にも少ないという特徴がすぐわかる。図41には、これら古墳出土埴輪のRb-Sr 分布図を示す。窯跡出土試料のところで設定された名古屋領域内にほとんどの埴輪は分布する。ここでも、須恵器に比べて軟質の埴輪にはRb、Sr 量が若干少ない傾向がある。これは胎土が異なるというよりも、試料作成上の問題、つまり、試料をプレスするときに軟質のものは硬質の試料

に比べてリング枠内に少しめり込んでしまうことによる可能性がある。ここではとくに、須恵器と埴輪の胎土に違いがあるとは判断しない。したがって、Rb-Sr 分布図上の分布位置や、Ca 因子にみられる特異性からみて、これらの埴輪もすべて名古屋市周辺の地元

図37 下原2・4号窯出土埴輪の Rb-Sr 分布図

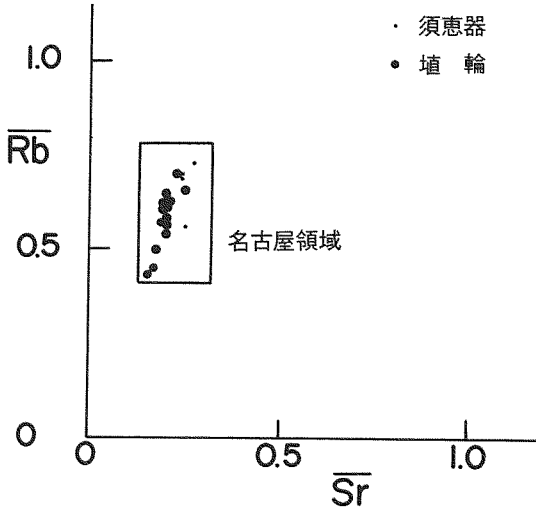


図38 城山2号窯出土須恵器・埴輪の Rb-Sr 分布図

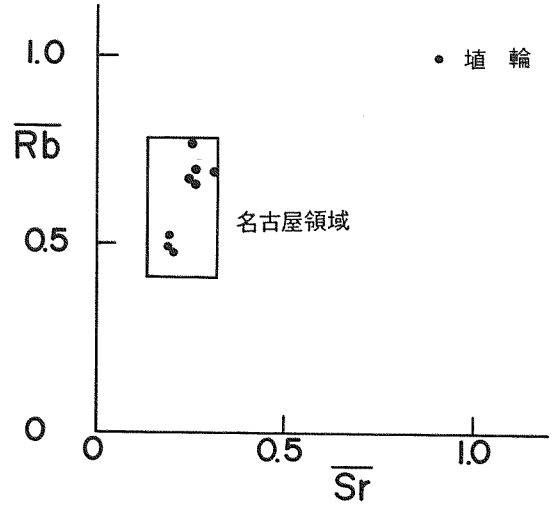


図39 東山10・11・54号窯出土須恵器・埴輪の Rb-Sr 分布図

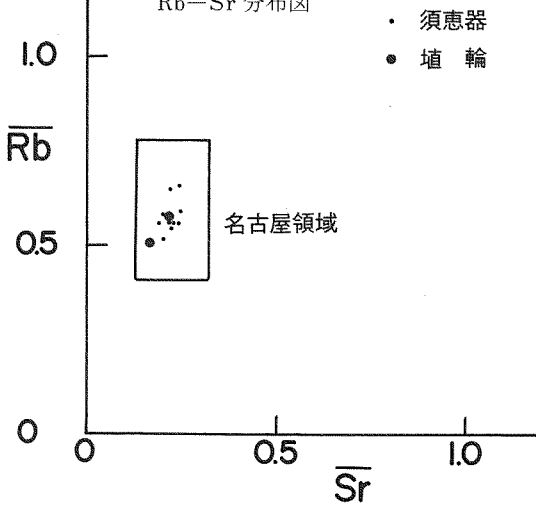


図41 古墳出土埴輪の Rb-Sr 分布図

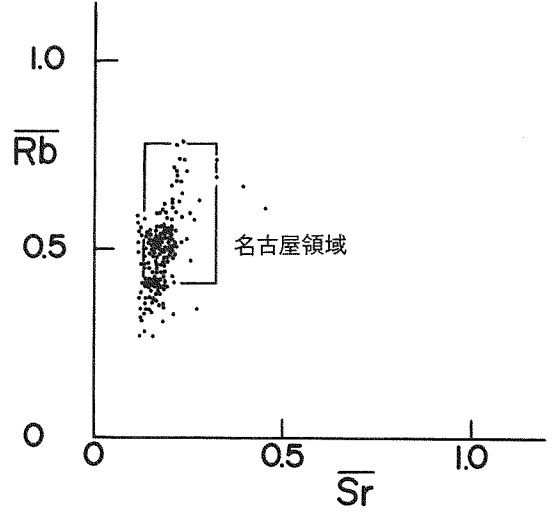


図40 窯跡出土須恵器・埴輪の Fe 量

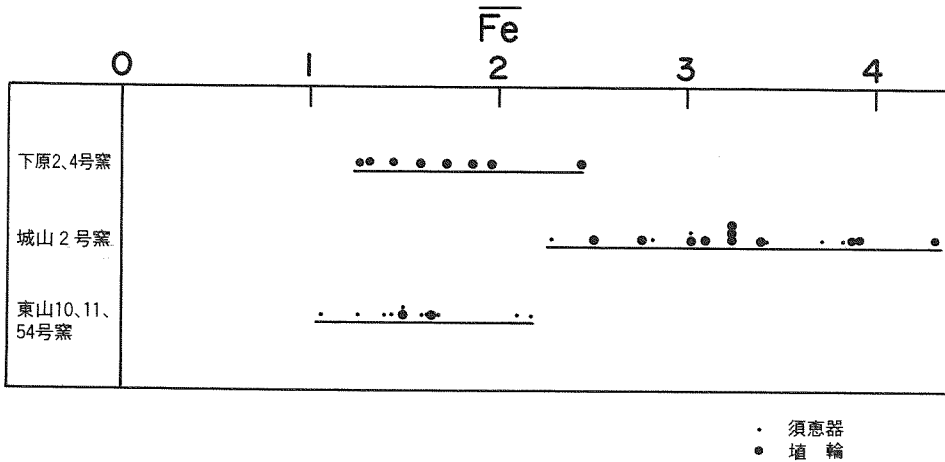


図42 古墳出土土直輪のFe量

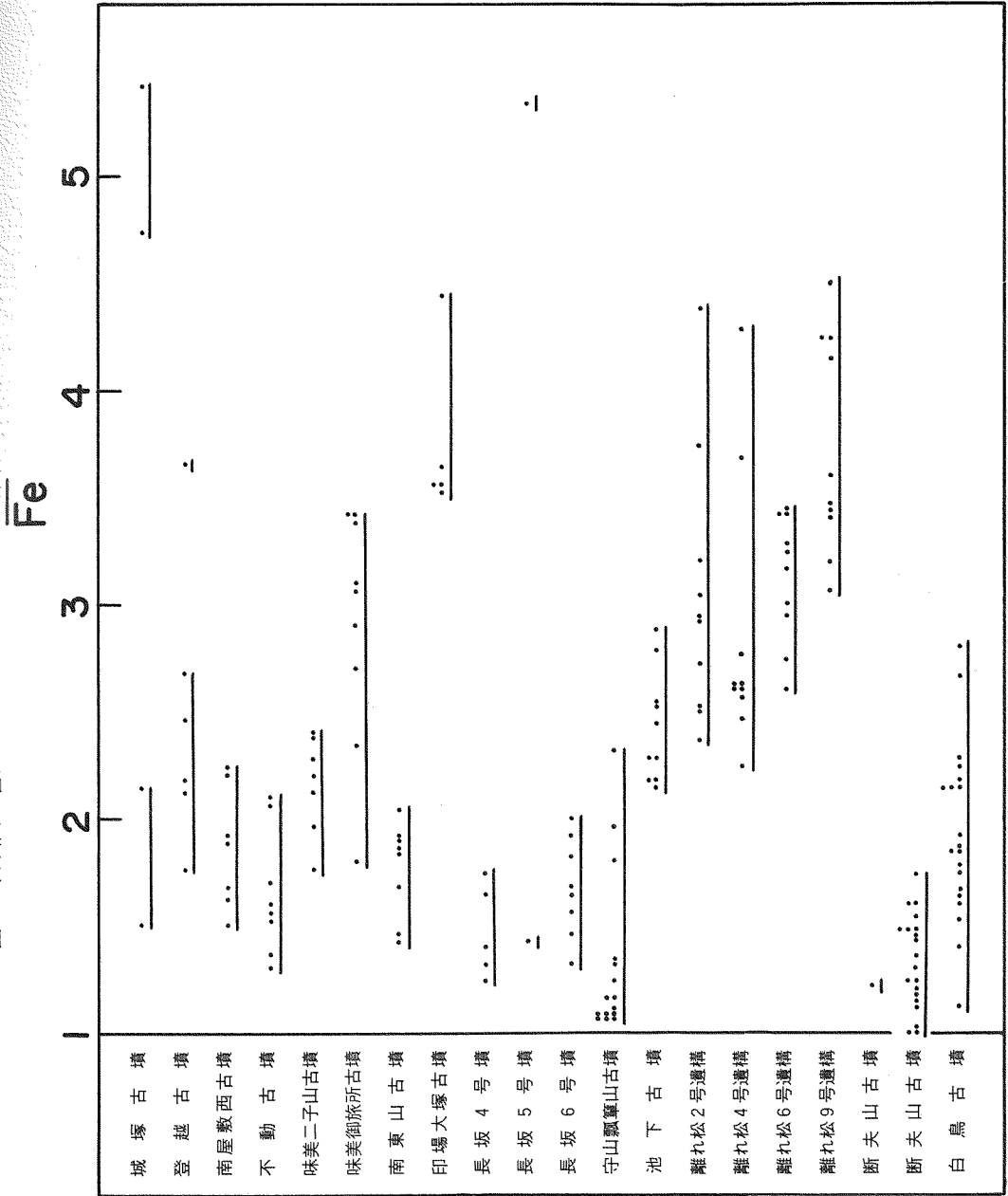
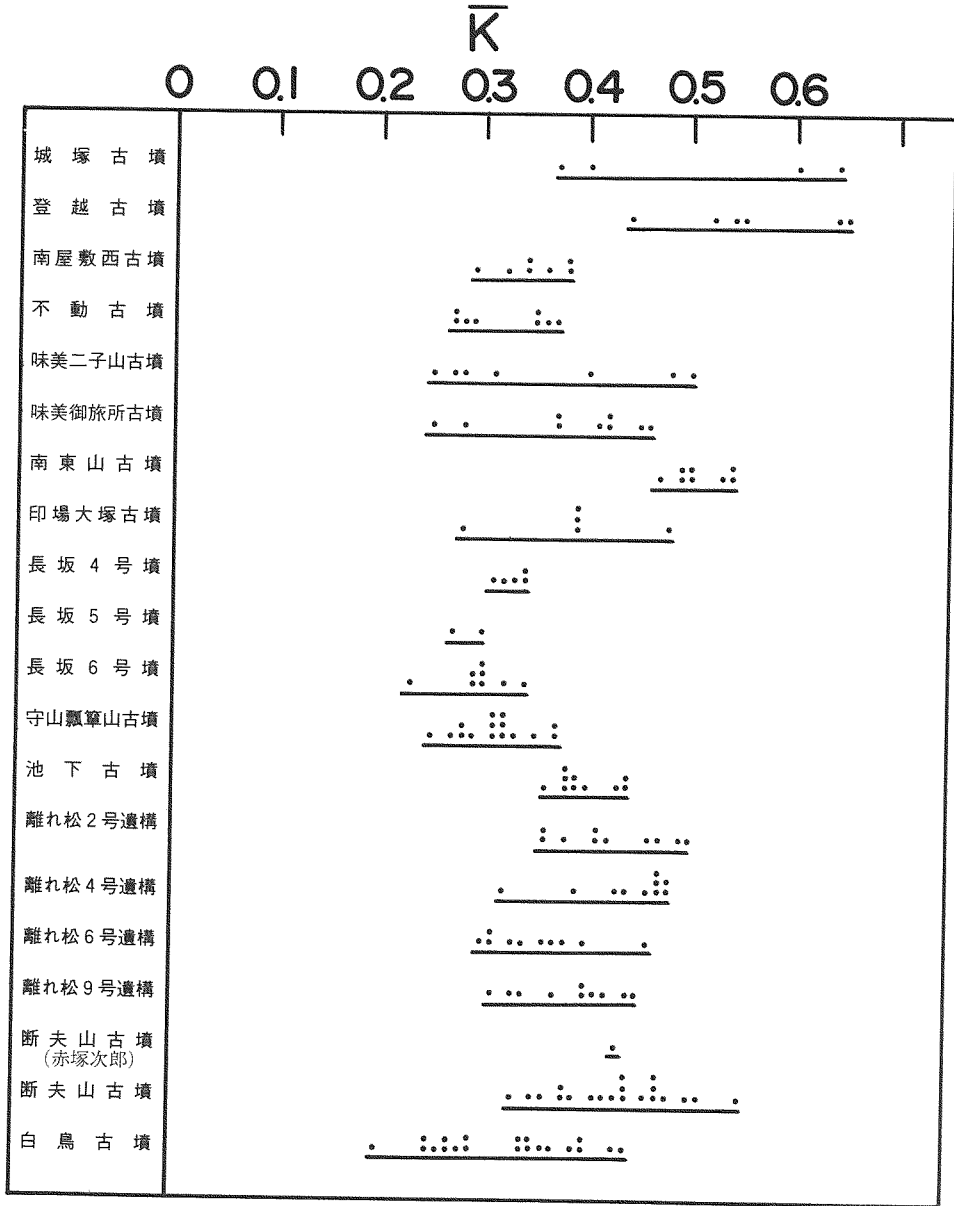


図43 古墳出土埴輪のK量



産の埴輪とみられる。そうすると、須恵器と同様、古墳出土埴輪胎土の違いをみるにはFe因子にたよらざるを得ない。図42には、古墳出土埴輪のFe量を比較してある。大部分の古墳ではFe量もまとまっているが、著しくばらつく古墳も2・3基みとめられる。この結果を解釈するのは難しいが、解釈の一試案を次に示そう。Fe量の比較的まとまった古墳は単元供給、Fe量が大きくばらつく埴輪を出す古墳は多元供給であると考えることが

できる。そうすると、図42より南屋敷西古墳、不動古墳、味美二子山古墳、南東山古墳、印場大塚古墳、長坂4、6号墳、守山瓢箪山古墳、池下古墳、離れ松6号遺構、断夫山古墳、白鳥古墳などはまず、単元供給である古墳とみられる。これに対し、城塚古墳、登越古墳、長坂5号墳などは多元供給とみられる。味美御旅所古墳、離れ松2、4、9号遺構などはどちらとも判別できない古墳である。次に、Fe 因子によって定性的に古墳の分類を試みた。Fe 量の最も少ない守山瓢箪山古墳、断夫山古墳をⅠ群、次に南屋敷西古墳、不動古墳、南東山古墳、長坂4、6号墳、白鳥古墳をⅡ群、味美二子山古墳、味美御旅所古墳、池下古墳、離れ松2、4、6号遺構をⅢ群、印場大塚古墳、離れ松9号遺構をⅣ群とする。

表26 K・Fe因子による古墳の分類

	K因子による分類	Fe因子による分類
A群	<ul style="list-style-type: none"> 南屋敷西古墳 不動古墳 味美二子山古墳 味美御旅所古墳 印場大塚古墳 長坂4号墳 長坂5号墳 長坂6号墳 守山瓢箪山古墳 白鳥古墳 	<ul style="list-style-type: none"> Ⅱ群 Ⅱ群 Ⅲ群 Ⅲ群 Ⅳ群 Ⅱ群 Ⅱ群 Ⅱ群 Ⅰ群 Ⅱ群
B群	<ul style="list-style-type: none"> 池下古墳 離れ松2号遺構 離れ松4号遺構 離れ松6号遺構 離れ松9号遺構 断夫山古墳 	<ul style="list-style-type: none"> Ⅲ群 Ⅲ群 Ⅲ群 Ⅲ群 Ⅳ群 Ⅰ群
C群	<ul style="list-style-type: none"> 登越古墳 南東山古墳 	<ul style="list-style-type: none"> Ⅲ群 Ⅱ群

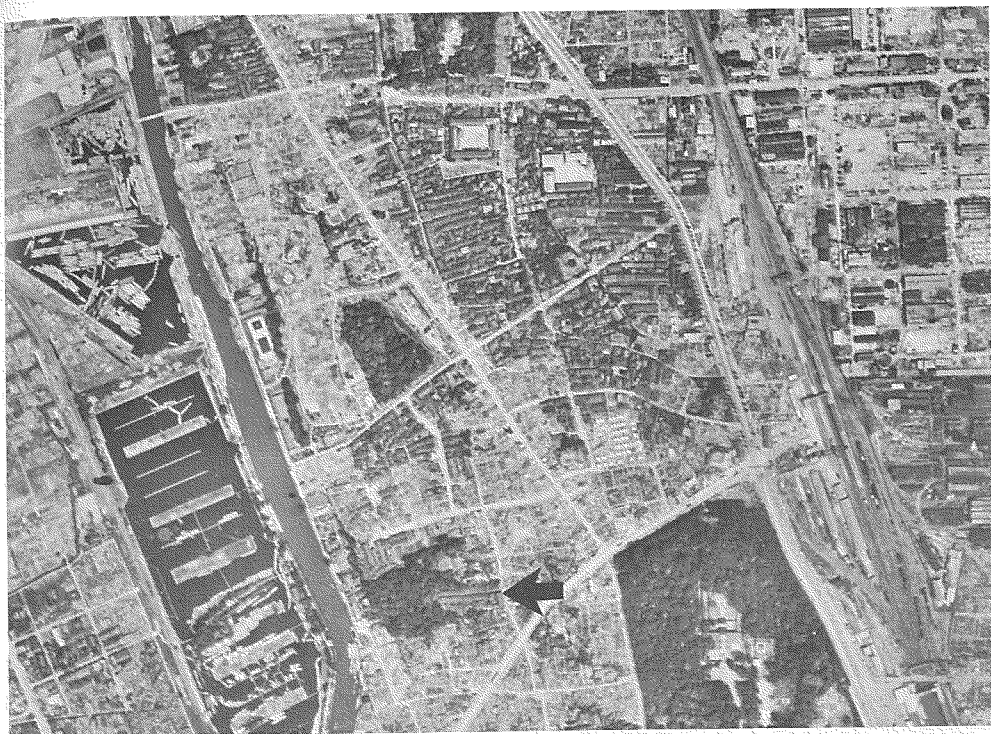
一方、図43にはK因子を比較してある。須恵器と違って古墳出土埴輪には若干の違いが認められる。K因子によっても定性的に3群に分類することができる。南屋敷西古墳、不動古墳、味美二子山古墳、味美御旅所古墳、印場大塚古墳、長坂4、5、6号墳、守山瓢箪山古墳、白鳥古墳をA群、池下古墳、離れ松2、4、6、9号遺構、断夫山古墳をB群、登越古墳、南東山古墳をC群とする。この結果を表26にまとめてある。K因子による分類とFe因子による分類の共通項を抜きとると、同じ胎土をもつ埴輪を出土することができる。すなわち、A群では南屋敷西古墳、不動古墳、長坂4、5、6号墳、白鳥古墳の埴輪は同じ胎土をもつと云えよう。味美二子山古墳、味美御旅所古墳の埴輪も類似した胎土をもつ。しかし、守山瓢箪山古墳、印場大塚古墳の埴輪と同じ胎土をもつ埴輪はない。B群では池下古墳、離れ松2、4、6号遺構の埴輪は同質の胎土をもつが、離れ松9号遺構、断夫山古墳の埴輪と同質の胎土をもつ埴輪はない。C群の登越古墳、南東山古墳の埴輪と同質の胎土をもつ埴輪もない。このように同質の胎土をもつ埴輪が見当たらない場合には野焼の埴輪である可能性がある。

以上にみてきたように、19基の古墳出土埴輪はすべて、地元、名古屋市周辺産とみられるが、よく点検すると必ずしも胎土は一致しない。わずかに違いのあるK、Fe因子を使って古墳の分類を試みたが、それらの産地を名古屋市周辺で同定することは現在のところ容易ではない。しかし、古墳を年代によってふり分けして整理した上で胎土分析のデータをみると、もっと有効な知見が得られるかもしれない。

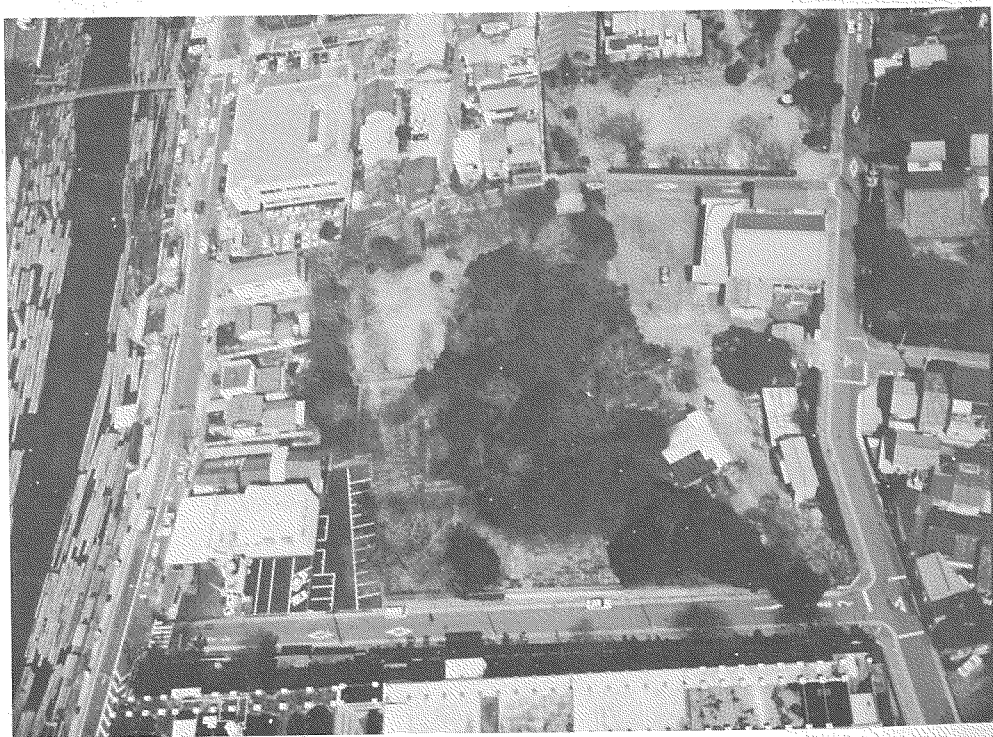
図

版

図版1 航空写真



1946年6月米軍撮影（国土地理院）



1986年3月白鳥古墳南側上空より撮影

図版 2 発掘区の状況 (1)

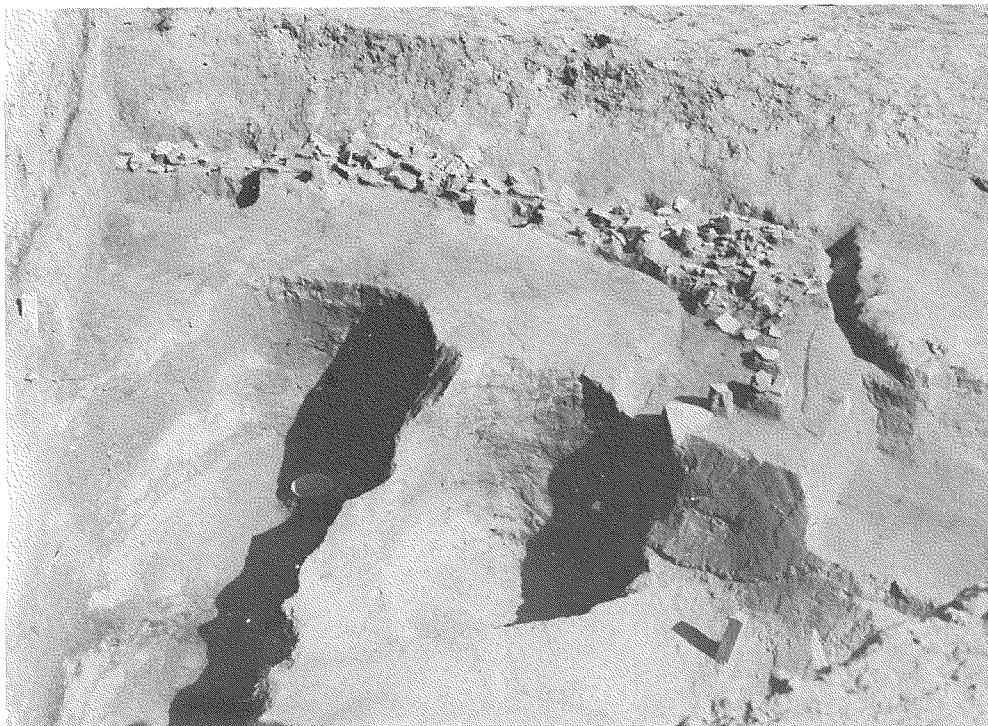


発掘調査前の状況 (北から、奥の森が後円部)



周濠検出状況 (南から、白線の手前)

図版 3 発掘区の状況 (2)



4BGr. SD1 および SK3 (南から、手前左)



4BGr. SK3 山茶碗出土状況 (南から)

図版4 発掘区の状況(3)



4BGr. SD1 遺物出土状況(西から)



4BGr. SD1 掘削後(西から)

図版 5 発掘区の状況 (4)



4CGr. SK4 山茶碗・小皿および鉄刀出土状況 (南から)



4CGr. SK6 山茶碗出土状況 (西から)

図版 6 発掘区の状況 (5)

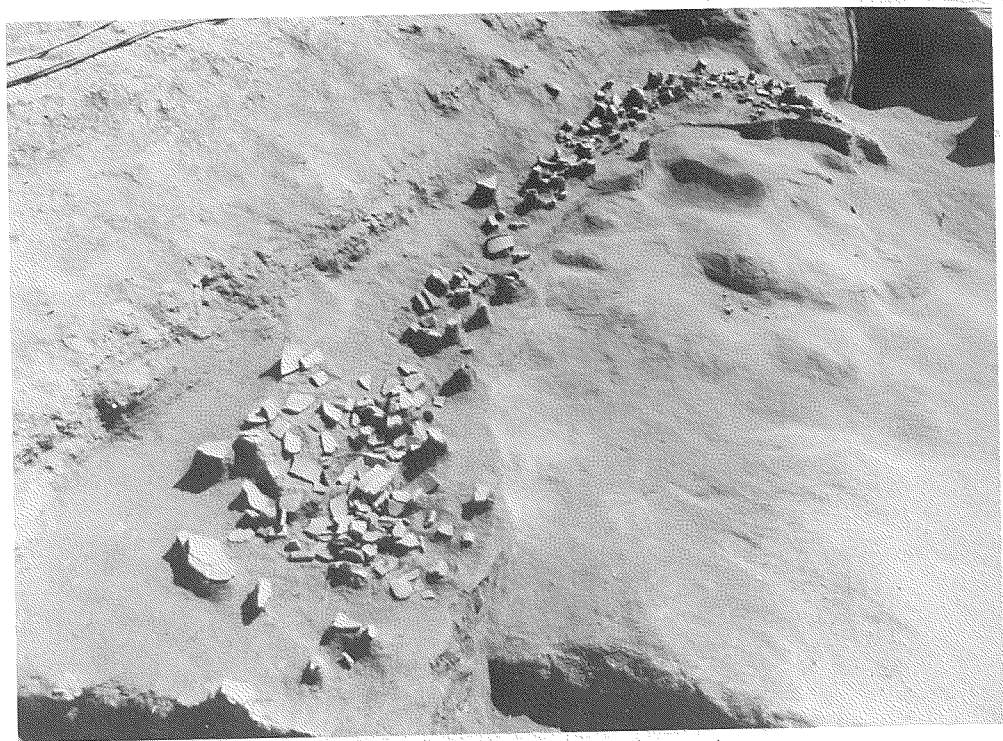


周濠掘削中 SD2 検出状況 (北東から)

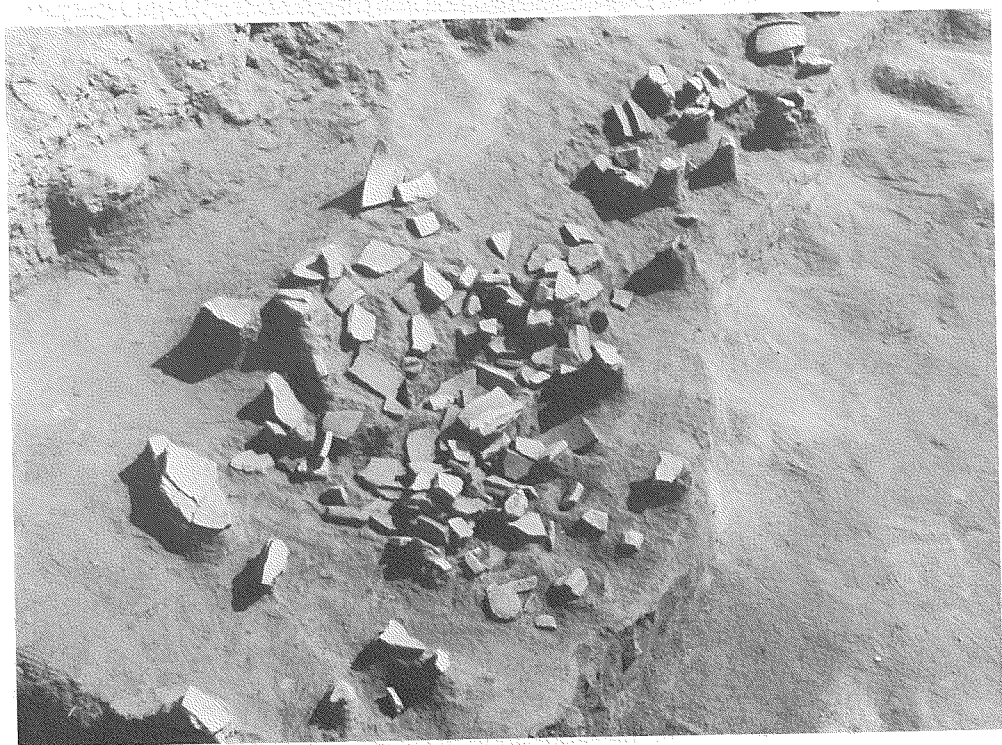


4D~4EGr. SD2 検出状況 (南西から)

図版7 発掘区の状況(6)



4D~4EGr. SD2遺物出土状況(西から)



4DGr. SD2遺物出土状況(西から)

図版 8 発掘区の状況 (7)



周濠掘削後SD1・2検出状況(北東から)



周濠掘削後(東から)

図版 9 発掘区の状況 (8)



周濠掘削後 (南から)



SD3掘削後 (南東から)

図版10 発掘区の状況 (9)

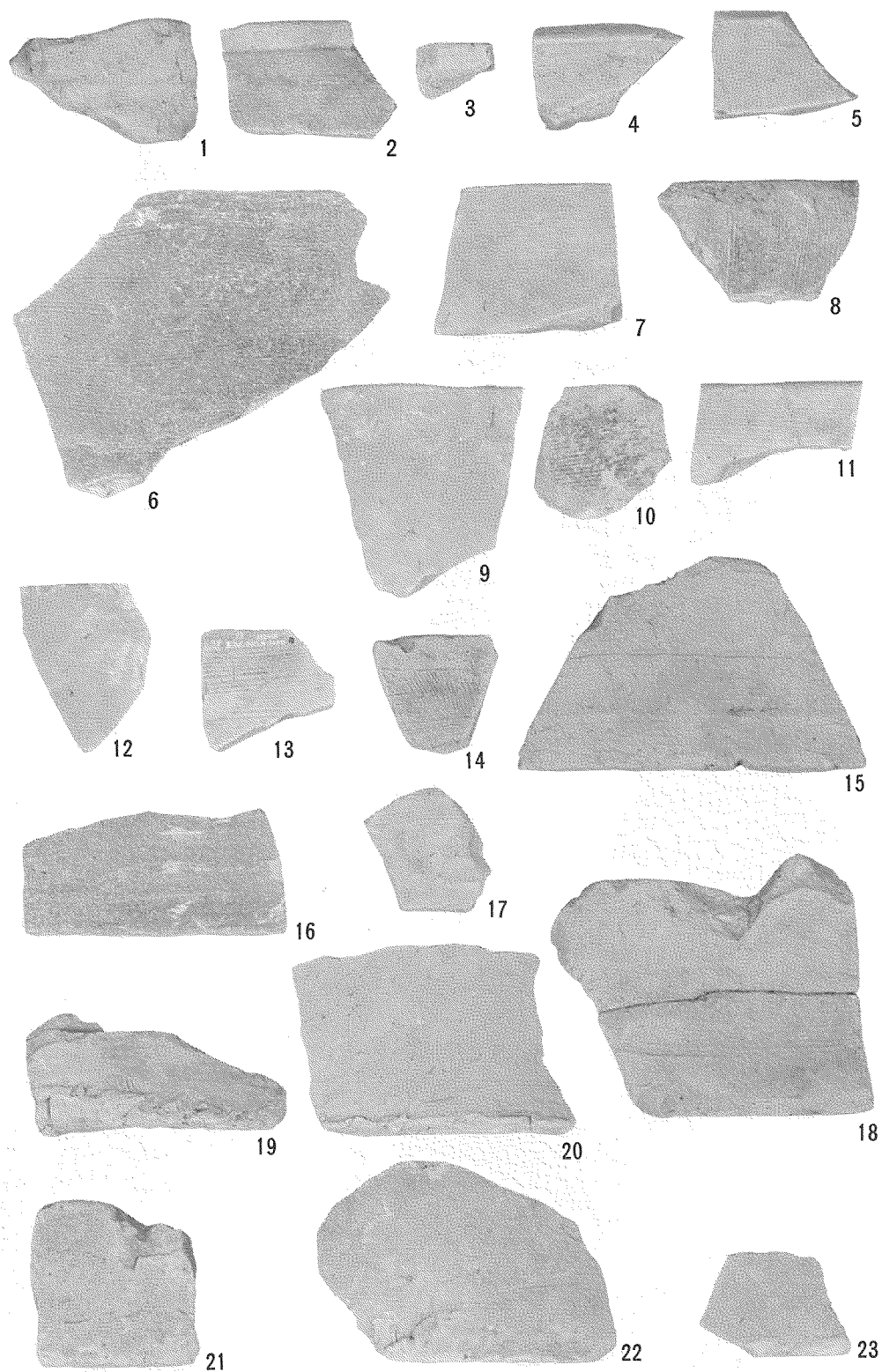


中央セッションベルト西面、周濠北端層序 (西から)



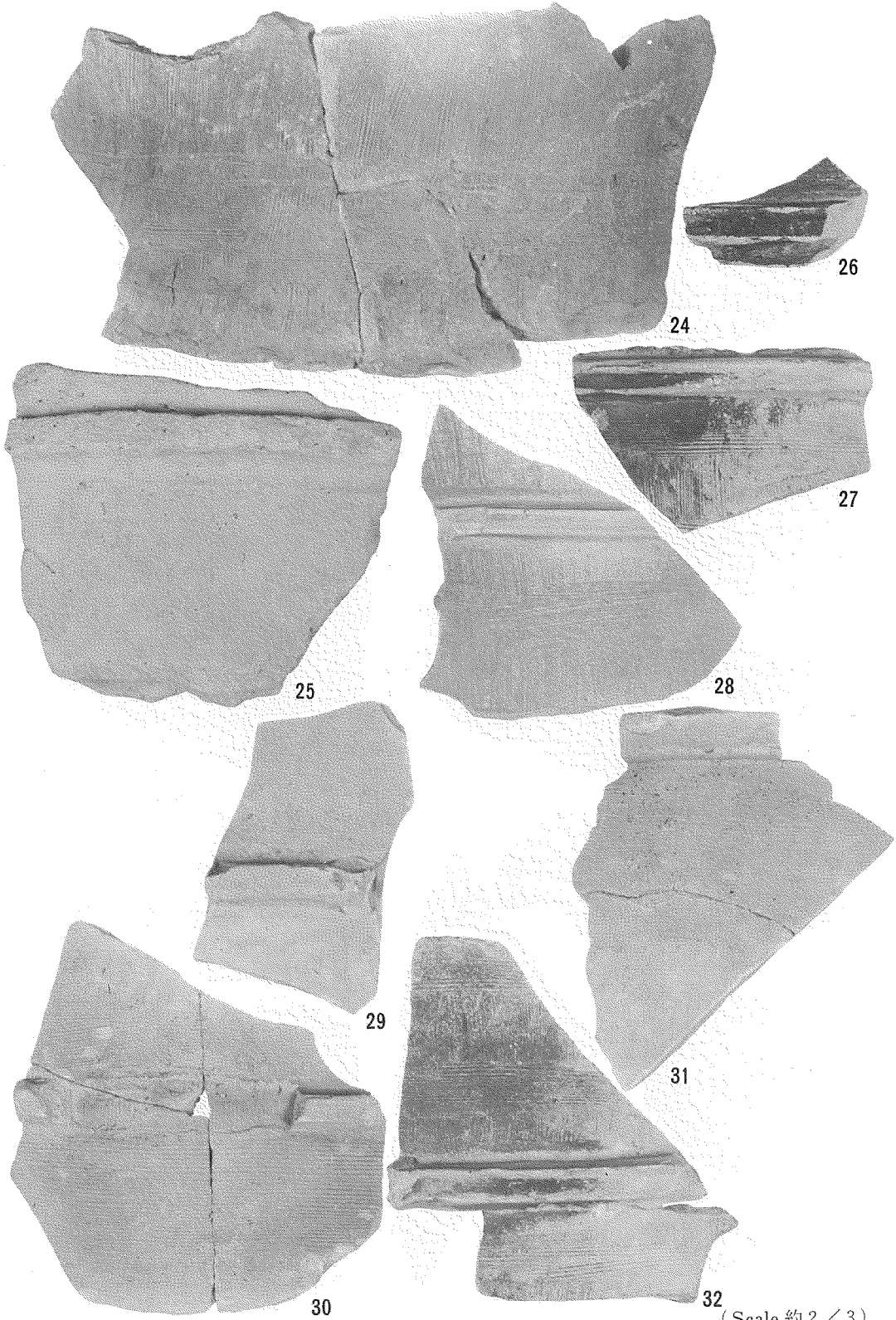
調査区西端東面セッション、周濠北端及びSD1層序 (東から)

図版11 遺物写真 (古墳1)



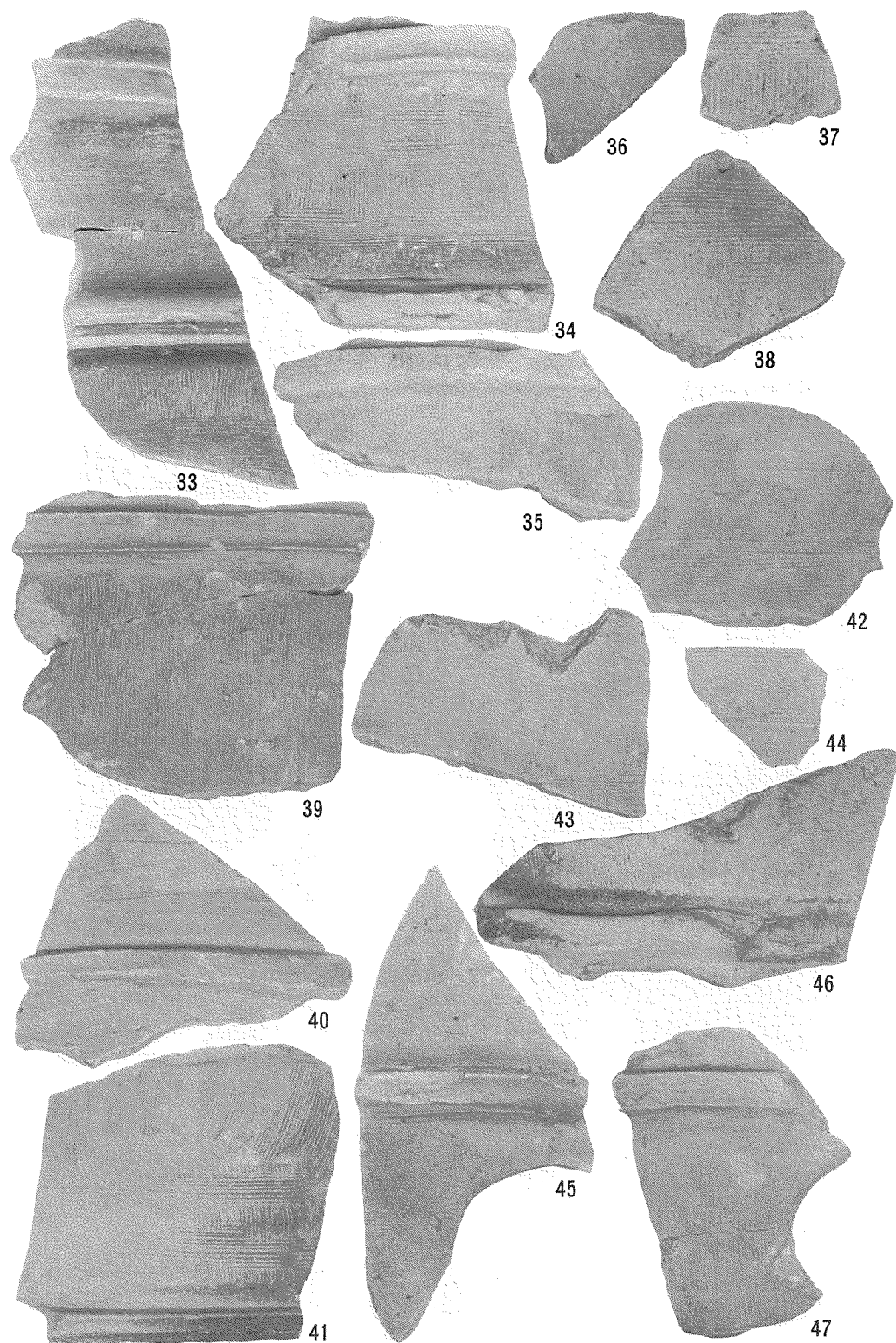
(Scale 約 2/3)

図版12 遺物写真 (古墳2)



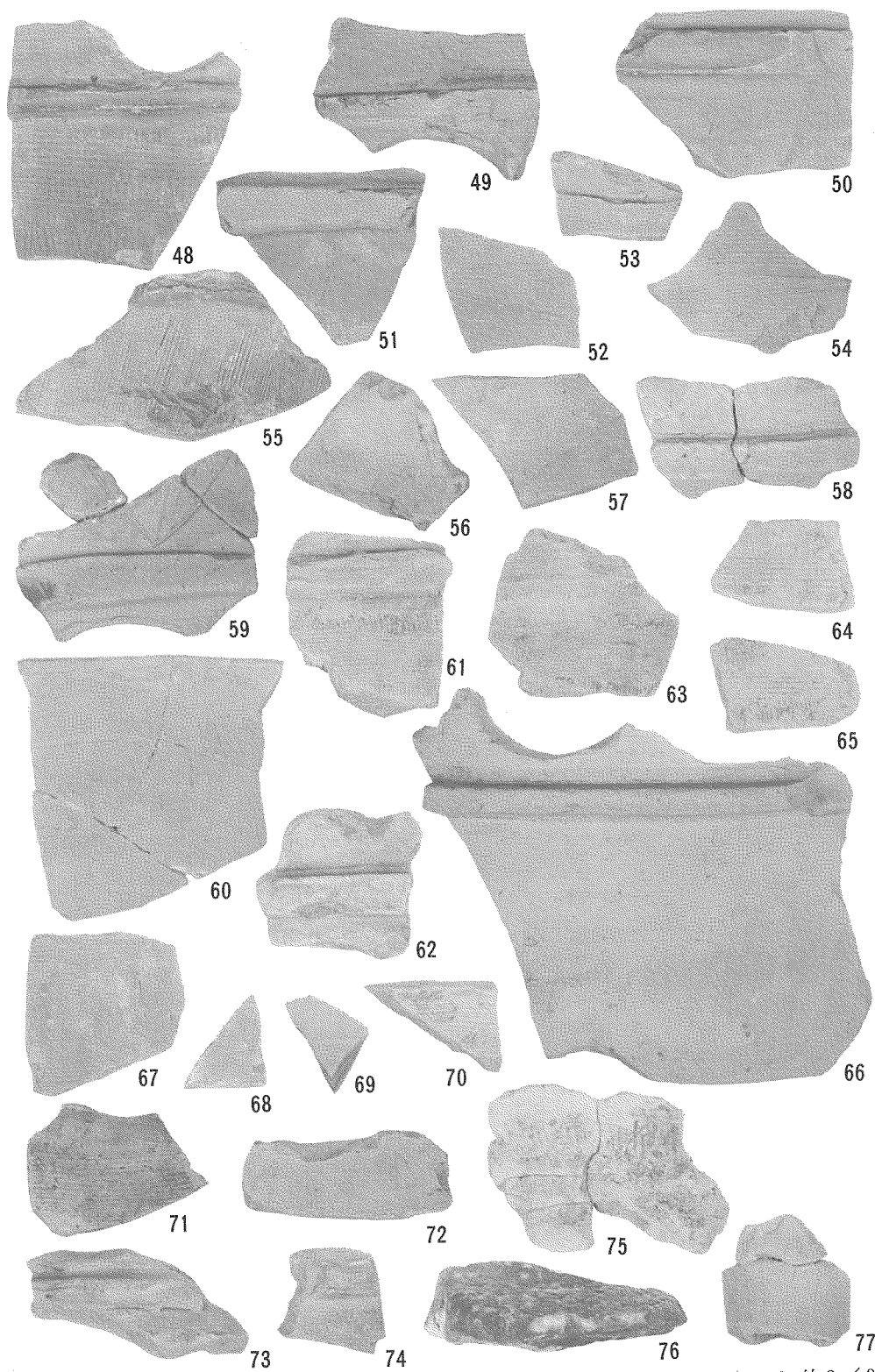
(Scale 約 2 / 3)

図版13 遺物写真 (古墳3)



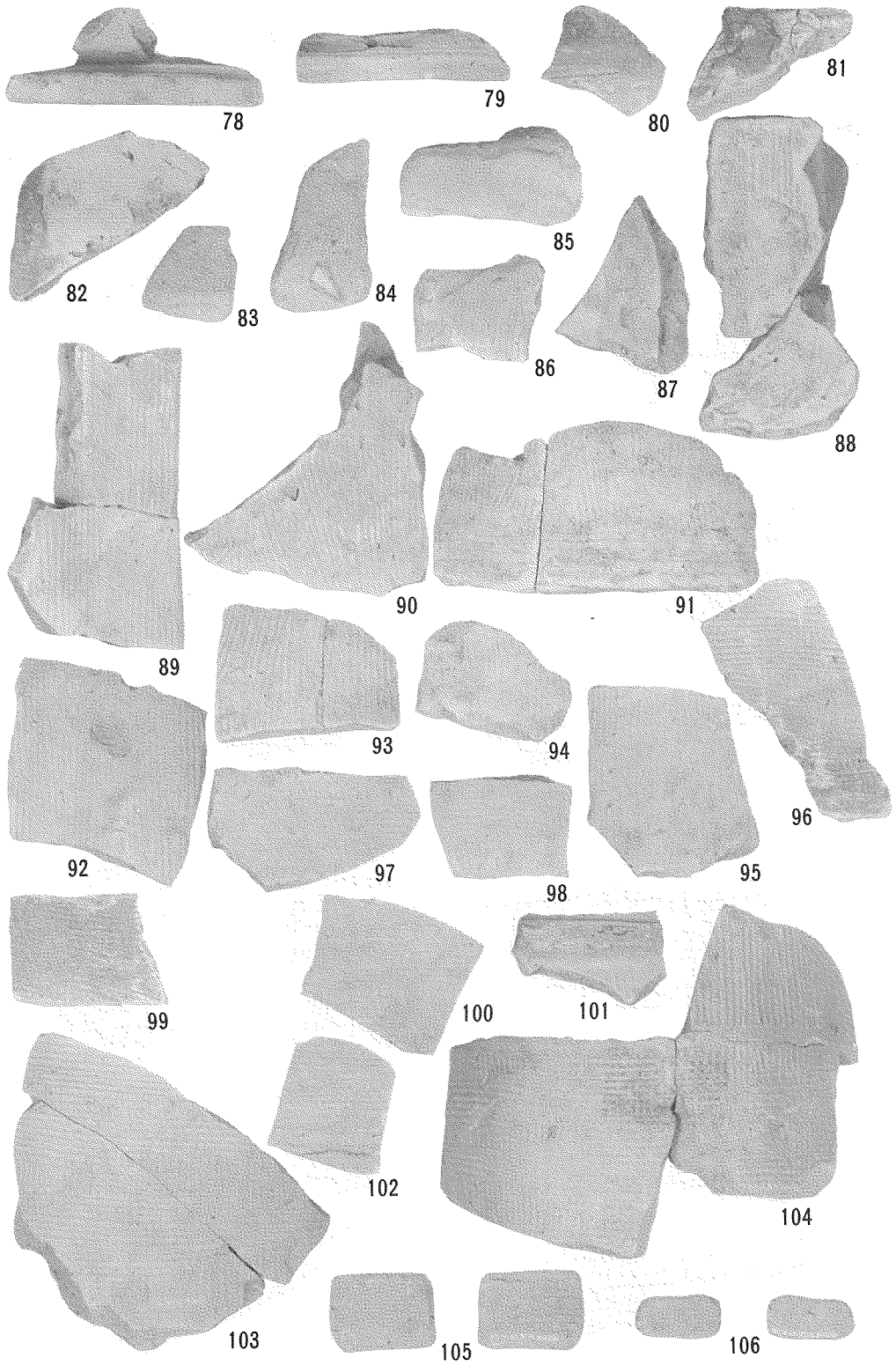
(Scale 約 2 / 3)

図版14 遺物写真 (古墳4)



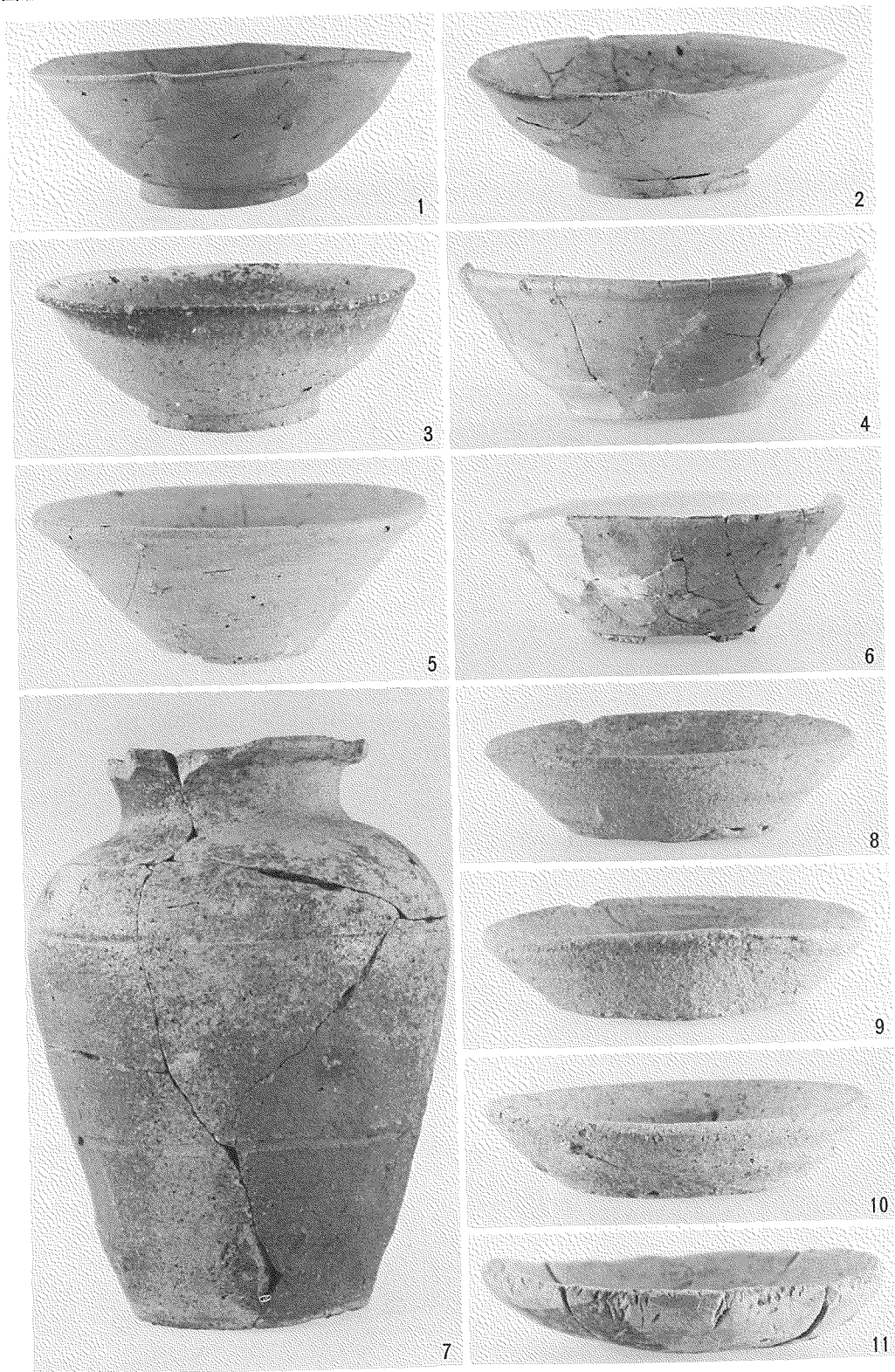
(Scale 約 2 / 3)

図版15 遺物写真 (古墳5)

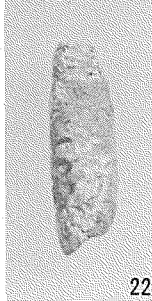
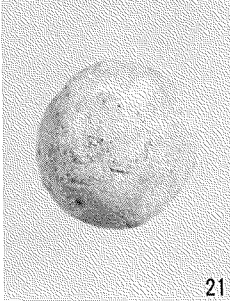
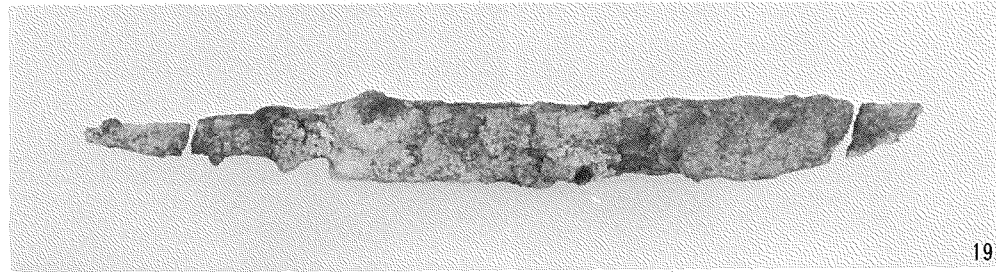
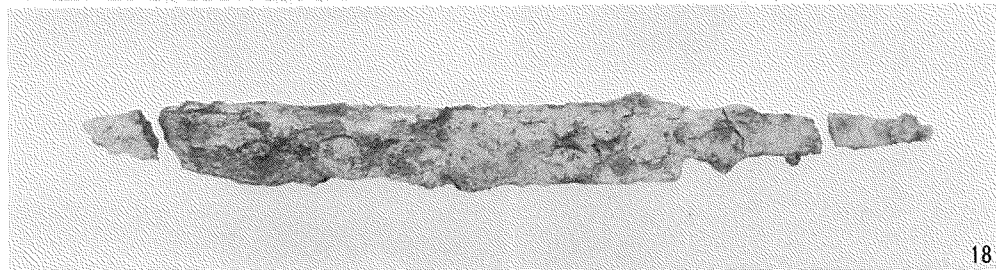
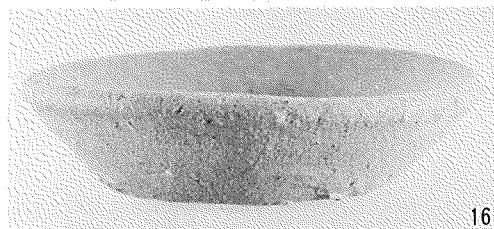


(Scale 約 2 / 3)

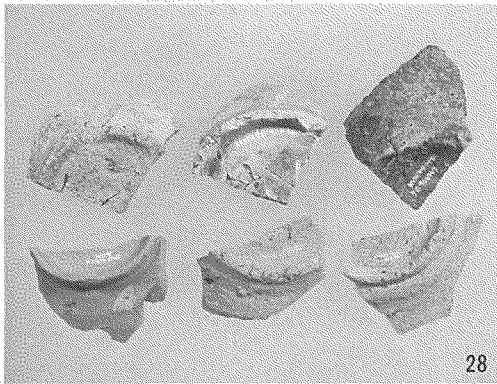
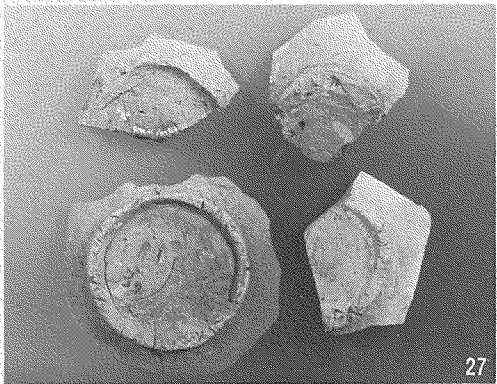
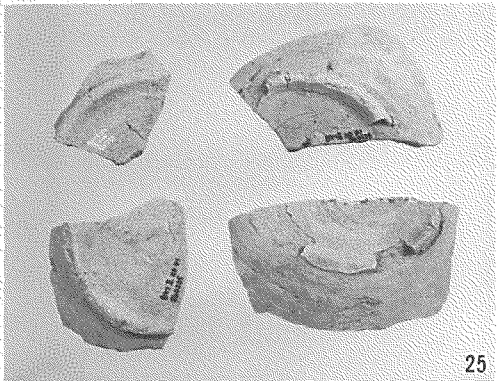
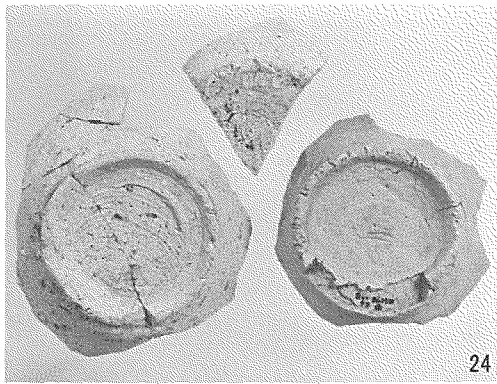
图版16 遺物写真(中世1)

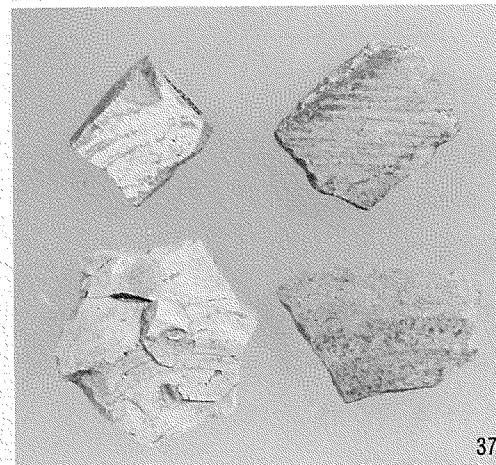
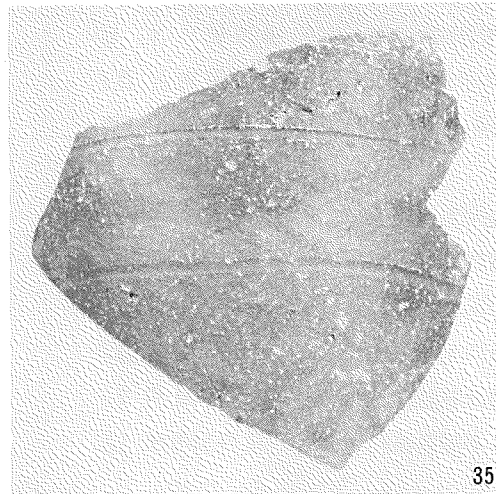
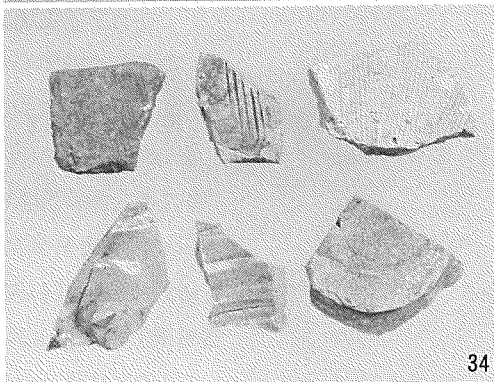
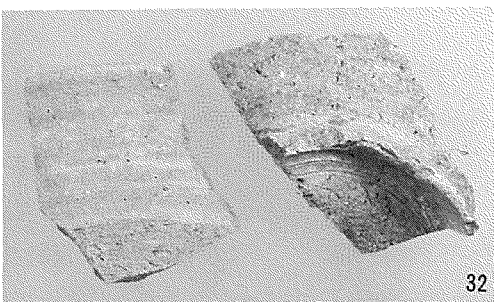
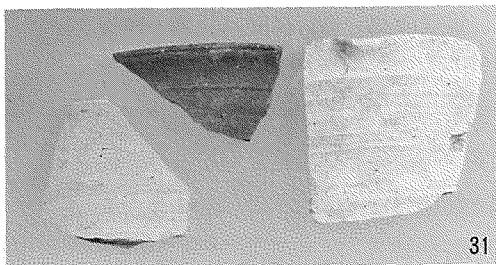


图版17 遺物写真 (中世2)



图版18 遺物写真 (中世 3)





名古屋市文化財調査報告 既刊目録

I	名古屋市千種区	東山H-101号古窯発掘調査報告書	1973	品切
II	名古屋市中区	古沢町遺跡発掘調査報告書 一弥生編一	1974	〃
III	名古屋市千種区	御影町古窯跡群発掘調査報告書	1974	〃
IV	名古屋市緑区	有松町並み調査報告	1975	〃
V	名古屋市緑区	NKI-34号古窯跡発掘調査報告書	1975	〃
VI	名古屋市緑区	徳重西部土地区画整理事業予定地内所在埋蔵文化財発掘調査報告書	1976	〃
VII	名古屋市昭和区	光真寺古窯跡発掘調査報告書	1980	在庫
VIII	名古屋市守山区	小幡古墳発掘調査報告書	1981	〃
IX	名古屋市緑区	NN-278号古窯発掘調査報告書	1981	品切
X	名古屋市内の山車と神楽	民俗文化財調査報告書	1981	在庫
XI	名古屋市緑区	NN-314号古窯跡発掘調査報告書	1981	〃
XII	名古屋市緑区	NN-282号古窯跡発掘調査報告書	1982	〃
XIII	名古屋市緑区	NN-268号古窯跡発掘調査報告書	1983	〃
XIV	名古屋市守山区	笹ヶ根古墳群発掘調査報告書	1984	〃
XV	名古屋の石造物		1985	〃
XVI	名古屋市守山区	天白・元屋敷遺跡発掘調査報告書	1985	〃
XVII	中区正木4丁目	尾張元興寺跡発掘調査報告書	1985	〃
XVIII	守山区中志段味	天白・元屋敷遺跡第二次発掘調査報告書	1986	〃
XIX	守山区吉根	吉根地区埋蔵文化財発掘調査報告書	1986	〃
XX	熱田区夜寒町	高蔵遺跡発掘調査報告書	1987	〃
21	熱田区白鳥一丁目	白鳥古墳第Ⅱ次発掘調査報告書	1989	新刊

名古屋市文化財調査報告21

白鳥古墳第Ⅱ次発掘調査報告書

1989年3月31日発行

編集 名古屋市見晴台考古資料館

発行 名古屋市教育委員会

名古屋市中区三の丸三丁目1番1号

印刷 澤多印刷株式会社

一般 有料 500円

※このシリーズの番号については、本号よりアラビア数字に変更します。

